長岡京市文化財調査報告書

第 29 冊

1992

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 29 冊

1992

長岡京市教育委員会

1　土器溜りＳＸ38507遺物出土状況（南から）

2　土器溜りＳＸ38507出土遺物

序　　文

本市は、昭和47年10月に市政を施行し、「長岡町」から「長岡京市」と新しく生まれ変わり、今年で二十歳を迎えます。

当時、古都京都と経済都市大阪の中間に立地している地理的背景から、人口は急増し56,000人まで膨れ上がり、町としては日本一の人口を誇っていました。

市名は住民からの応募で決められましたが、市名候補には、市名となった「長岡京市」をはじめ、「乙訓市」「西京都市」「桓武長岡市」など147種類が寄せられました。中には町の花“きりしま”にちなんだ「きりしまつつじ市」、乙訓名産の竹林やタケノコをうたった「竹岡市」、「緑市」などの珍名もありました。選考の結果、「歴史ある長岡の名を残したい」という住民の強い願いと由緒ある長岡京の歴史的背景が命名の決め手となりました。

市名に冠した都城跡「長岡京」は、当時、向日市にある朝堂院や内裏などの都の中心部（宮域）の一部しか発掘調査されておらず、まだ「幻の都」と考えられていました。昭和50年代に入り、宮域に加え長岡京域まで調査が拡大され、朱雀大路などの条坊遺構、都人の住居跡などが次々と発見され、かなり完成された都であったことが明らかになりました。この結果、今日では小学校の教科書にも「長岡京」の記事が載せられ、「長岡京」の名は全国的に知られるようになりました。

ここに刊行いたします報告書は、平成３年度中に教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡および海印寺跡に関する発掘調査の成果であります。とくに長岡京跡では、西二坊々間小路や東一坊々間大路の側溝が確認されるなど貴重な成果が得られました。

これらの成果が本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに、市民の歴史学習資料として広く活用していただけることと期待しています。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係機関、また、発掘調査にご理解とご協力を賜りました土地所有者の方々に、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成４年３月

長岡京市教育委員会

教育長　中小路　脩

凡　　例

1．本冊は、平成３年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡および海印寺跡の発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表１のとおりである。その位置は第１図に示した。

3．長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京跡の条坊名は、山中　章ほか「第126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第８集　1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。

6．本書の編集は、長岡京市教育委員会管理課文化財係中尾秀正が行った。

7．現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、下記の方々のご協力を得た。

また、図面のトレース、遺物写真撮影は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏、写房楠華堂　楠本真紀子氏にそれぞれご協力を得た。

〔技術補佐員〕　坂根　瞬・花村　潔

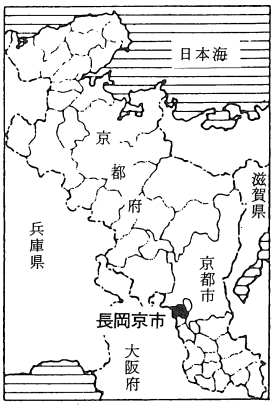
〔調査作業員〕　岩岸三郎・中村正雄・麻田安太郎・井本千代治・佐藤昭三・平木秋夫・高瀬嘉一郎・田頭道登

〔調査補助員・整理員〕　月本一武・橋田邦夫・佐藤隆広・船戸裕子・井上礼子・久保直子・久米佐知子・井上ユカリ・小畠絢子・鈴木芙美子・岩川絢子・田中智紀・田中京子・三間千津・天白真理子・奥野久美子・太田美枝子

付表１　本書報告調査一覧表

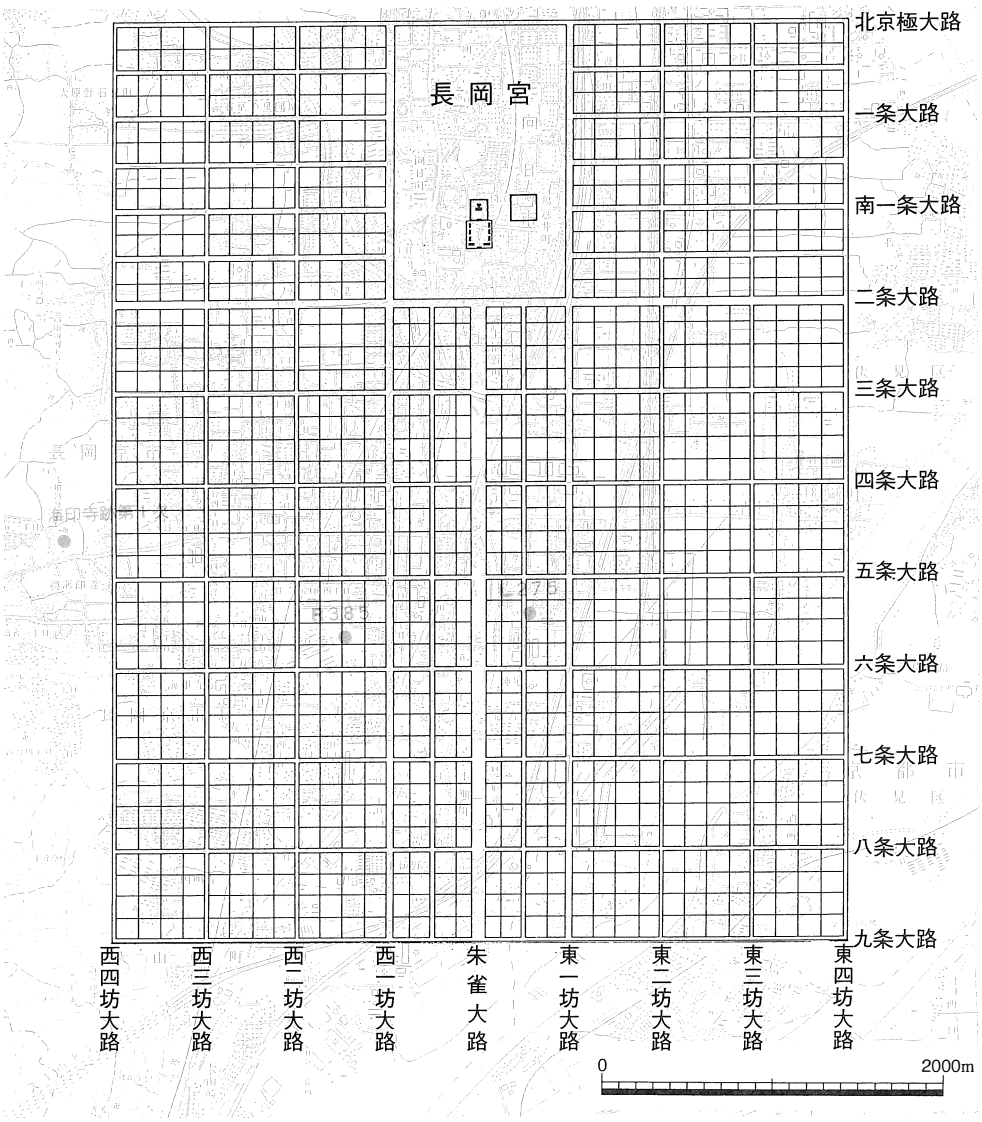
調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間(現地)	調査面積	備考
海印寺跡 第１次調査	7CKPME	長岡京市 奥海印寺明神前32	西尾武之	1991. 7.1～8.3	394m²	
長岡京跡 左京第275次調査	7ANMST-6	長岡京市 神足芝本６	伊辻克美	1991. 10.8～11.1	149m²	雲宮遺跡 芝本遺跡
長岡京跡 右京第385次調査	7ANMSI-11	長岡京市 開田四丁目405－4	藤井博一	1991. 11.14～12.19	214m²	開田遺跡

第１図　本書報告調査地位置図



長岡京条坊復原図

平城京型復原による



本　文　目　次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii

第１章　海印寺跡第１次範囲確認調査概要 …… 1
1　はじめに　2　海印寺の歴史と周辺の調査　3　検出遺構
4　出土遺物　5　まとめ
付論…海印寺跡において発掘された土石流扇状地の微地形分析
1　緒言　2　調査地の位置　3　土石流扇状地の層相・形態
4　土石流扇状地及び周辺地形の微地形学的検討　5　小結

第２章　長岡京跡左京第275次調査概要 ……19
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第３章　長岡京跡右京第385次調査概要 ……39
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

図　版　目　次

巻頭図版　長岡京跡右京第385次（７ＡＮＭＳＩ－11地区）調査
1　土器溜りSX38507遺物出土状況（南から）
2　土器溜りSX38507出土遺物

海印寺跡第１次（７ＣＫＰＭＥ地区）範囲確認調査

図版１　1　調査地全景（東半部、南から）　2　調査地全景（西半部、南から）
図版２　1　西側試掘トレンチ（東から）　2　調査地東側遠景（西から）
3　ＳＸ08検出状況（東から）　4　ＳＸ07高坏出土状況
5　Ｐ６高坏出土状況
図版３　出土遺物

長岡京跡左京第275次（７ＡＮＭＳＴ－６地区）調査

図版４　1　調査地全景（南から）　2　調査地全景（北から）
図版５　1　轍検出状況（西から）　3　溝ＳＤ27503断面（南から）
3　溝ＳＤ27503杭出土状況（南東から）　4　樫の木出土状況（北東から）
図版６　出土遺物－１
図版７　出土遺物－２
図版８　墨書土器
図版９　1　墨書土器　2　線刻土器
図版10　1　墨書土器　2　墨書土器
図版11　1　墨書土器と線刻土器　2　縄文土器・獣骨・銭貨・土錘
図版12　1　硯に使われた須恵器坏蓋　2　墨痕を残す須恵器壺
図版13　1　漆の皮膜を残す土師器と須恵器　2　製塩土器
図版14　1　瓦質の羽釜　2　生駒山西麓産の羽釜と竈
図版15　1　土師器甑　2　土馬

長岡京跡右京第385次（７ＡＮＭＳＩ－11地区）調査

図版16　発掘調査地全景（西から）
図版17　１　調査区全景（南から）　２　北拡張区全景（南から）
図版18　１　溝ＳＤ38503集石検出状況（南から）
　　２　土器溜りＳＸ38507遺物出土状況（南から）
図版19　１　土壙ＳＫ38519出土鉄刀　２　溝ＳＤ38503出土遺物
図版20　土器溜りＳＸ38507出土遺物

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図 ……iii

海印寺跡第１次（７ＣＫＰＭＥ地区）範囲確認調査

第２図　発掘調査地位置図(1／5000) …… 1
第３図　寂照院仁王門（南から） …… 2
第４図　調査前全景（南西から） …… 2
第５図　奥海印寺の字名と集落(1／5000) …… 3
第６図　検出遺構図(1／200) …… 4
第７図　出土遺物実測図(1／4) …… 6
第８図　瓦実測図１(1／4) …… 7
第９図　瓦実測図２(1／4) …… 8
第10図　調査地の位置と周辺地形 ……12
第11図　調査地における土石流扇状地の形態・層相 ……14
第12図　土石流の堆積状況（左：北西から　右：北から、LocB) ……15
第13図　調査地周辺等高線図・地形縦断面図 ……17

長岡京跡左京第275次（７ＡＮＭＳＴ－６地区）調査

第14図　発掘調査地位置図(1／5000) ……19
第15図　北壁土層図(1／40) ……20
第16図　中世溝実測図(1／250) ……21
第17図　長岡京期遺構実測図（平面図1／100、断面図1／40) ……23
第18図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図１(1／4) ……25
第19図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図２(1／4) ……27
第20図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図３(1／4) ……28
第21図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図４(1／4) ……30
第22図　墨書土器、線刻土器実測図(1／2・1／4) ……35
第23図　左京六条一坊内の条坊検出遺構図(1／2000) ……36

長岡京右京第385次（７ＡＮＭＳＩ－11地区）調査

第24図　発掘調査地位置図(1／5000) ……39
第25図　調査地北壁土層図(1／100) ……40
第26図　検出遺構図(1／100) ……41
第27図　溝ＳＤ38501土層図(1／40) ……42
第28図　溝ＳＤ38503集石実測図(1／40) ……42
第29図　土器溜りＳＸ38507遺物出土状況実測図(1／5) ……43
第30図　溝ＳＤ38502土層図(1／40) ……45
第31図　溝ＳＤ38503・土壙ＳＫ38519出土遺物実測図(1／4) ……47
第32図　土器溜りＳＸ38507出土遺物実測図(1／4) ……48
第33図　土壙ＳＫ38518出土遺物実測図(1／4) ……49

付　表　目　次

付表１　本書報告調査一覧表 ……ii
付表２　溝ＳＤ27503出土の墨書土器・線刻土器一覧表 ……31
付表３　墨書土器と線刻土器の比率 ……34
付表４　本調査地周辺の条坊側溝座標値一覧表 ……37
付表５　西二坊々間小路側溝座標表 ……45

第１章　海印寺跡第１次（7CKPME地区）範囲確認調査概要

１　は じ め に

1　本報告は、1991年７月１日～1991年８月３日まで、長岡京市奥海印寺明神前32において実施した海印寺跡第１次範囲確認調査に関するものである。調査面積は394㎡である。

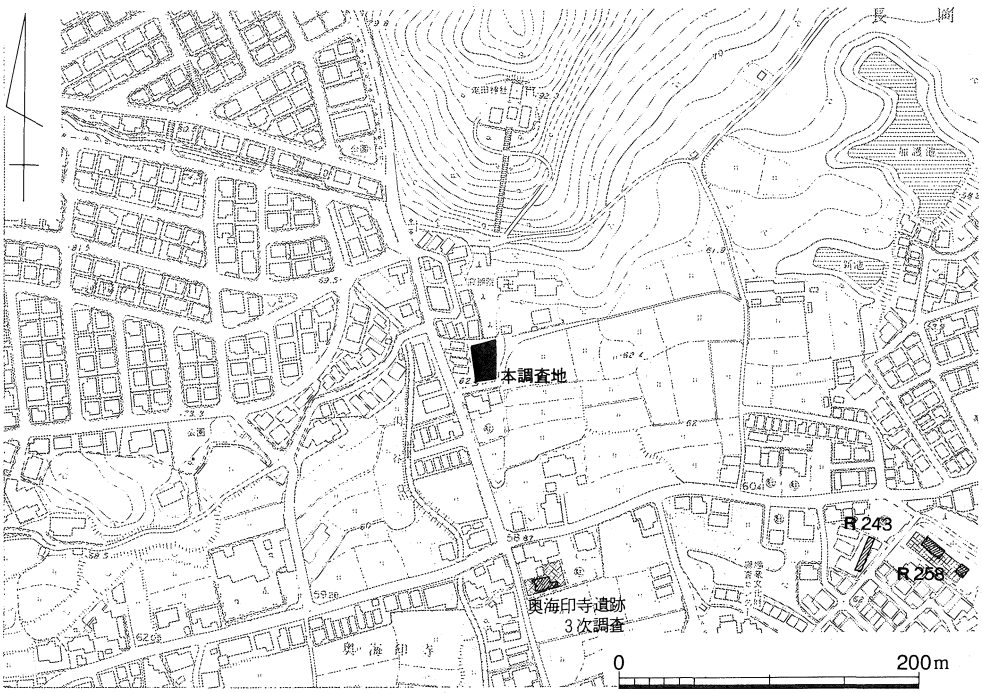
2　本調査地は平安時代前期の創建と伝えられる海印寺跡の推定寺域内に位置している。現在は子院である寂照院が残るのみであり、海印寺については文献史料で明らかにされた以外はこれまで発掘調査や遺物の発見もないことから不明な点が多く残されている。このため当地における伽藍の有無を確認することを目的に第１次範囲確認調査として実施したものである。

3　本調査は長岡京市教育委員会を主体とする平成３年度国庫補助事業であり、現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センター調査員原秀樹が担当した。

4　調査にあたっては、土地所有者である西尾武之氏をはじめ、寂照院、近隣住民の方々に種々のご協力を得た。また、現地調査にあたっては京都文教短期大学名誉教授中山修一氏よりご指導を賜った。

5　調査後の遺物実測や図面整理は、おもに船戸裕子、田中智紀が行った。

6　本報告のうち、付論については財団法人向日市埋蔵文化財センター中塚良氏に執筆を依頼し、その他の執筆と編集は原が行った。



第２図　発掘調査地位置図（１／5000）

2　海印寺の歴史と周辺の調査

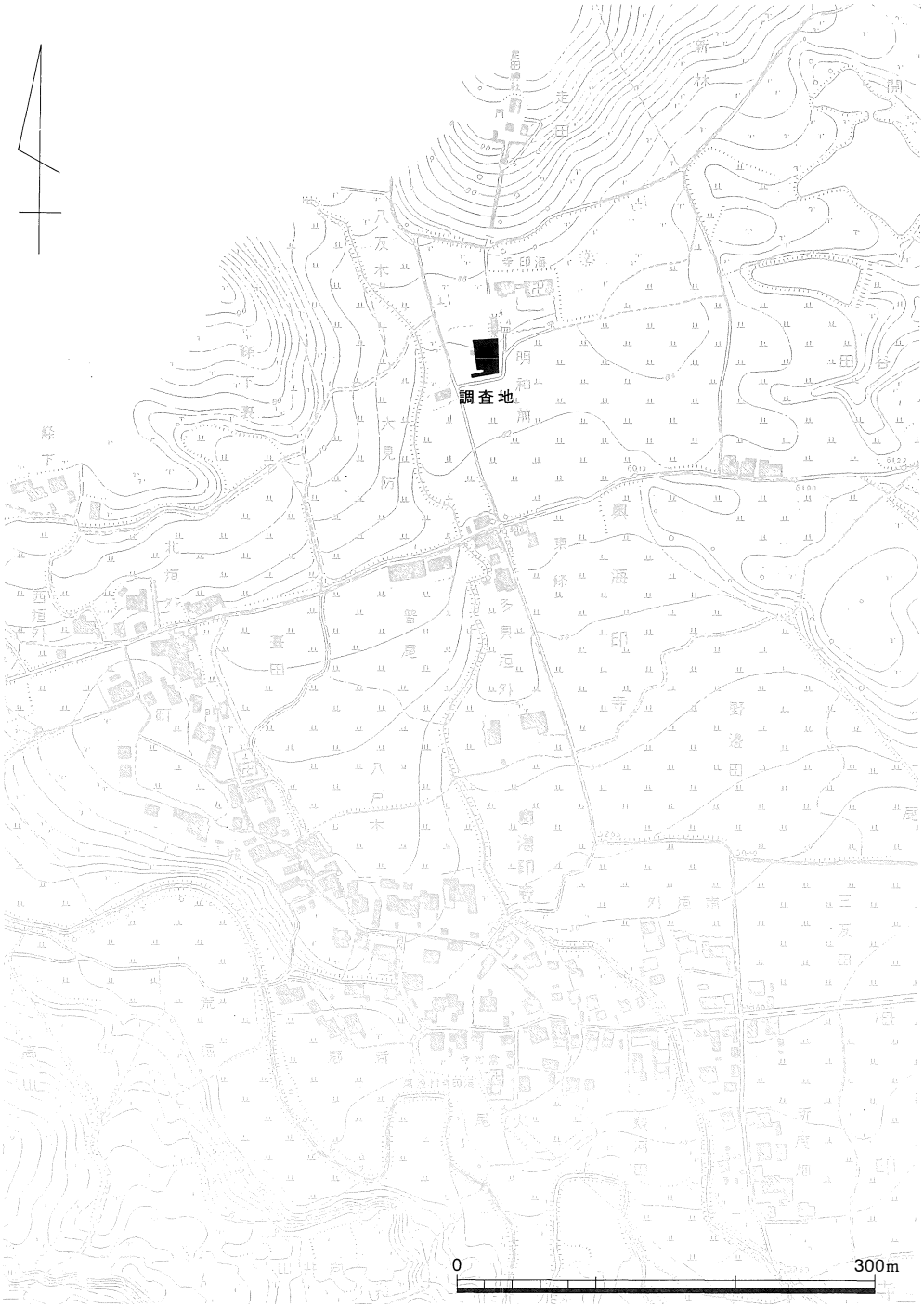
海印寺は、長岡京市の西部、西山から南東方向に派生する段丘部に位置している。現在は、海印寺の子院である寂照院を残すのみであるが、海印寺縁起（写）によると、嵯峨天皇の御願所として僧道雄が9世紀半ばに創建した寺とされる。道雄は、入滅直前の嘉祥4年（851）の太政官符に収められた上表文の中で、十の堂舎を建立したこと、海印寺は朝廷が直接管理する定額寺とすることなどを願い出ており、程なくこれが認められている。しかし、平安時代後期には朝廷の衰退にともない摂関家の祈禱所として寄進され、文永2年（1265）には荒廃した海印寺の再興を告げる後嵯峨上皇の院宣が発せられたが、中世には寺勢はさらに衰える一方であったことが知られる。中世の寂照院については、本市指定文化財である山門の仁王像吽形の胎内に納められた康永3年（1344）10月8日の年紀をもつ「寂照院仁王像造立結縁交名および紙背御成敗式目写本」がある。この結縁交名には、現在の大字単位の村名と、姓名をもつもの・僧・尼僧・商工業者・旅人・「殿」身分の人などが記されており、14世紀中頃の西岡（乙訓）地方の村の様子や信仰の状況をうかがうことができる貴重な史料である。またこの結縁交名は、御成敗式目（貞永式目）の古い写本の裏に書かれたものであり、第1条から第18条の一部までが残っている。戦国期では、山科言継の日記『言継卿記』永禄11年（1568）9月27日の条に、織田信長が足利義昭を擁して西岡地方に進出した際に当寺に宿したことが記されている。なお寂照院の名称は、同日記に登場するのが初見といわれる。

寂照院に伝わる彫刻、工芸品、古文書、建造物については、前述の結縁交名が本市の文化財に指定されたのを機に「寂照院総合調査報告書」（『長岡京市報告書』第16冊 1985年）として刊行されている。

海印寺の寺域についてはこれまでのところ字名から推定されるのみであるが、当地の字名である「明神前」をはじめ「大見坊」、「奥ノ院」などの小字名は、寂照院とその背後に位置する式内社の走田神社に由来するものと考えられる。中でも「大見坊」と「明神前」は、湯谷川

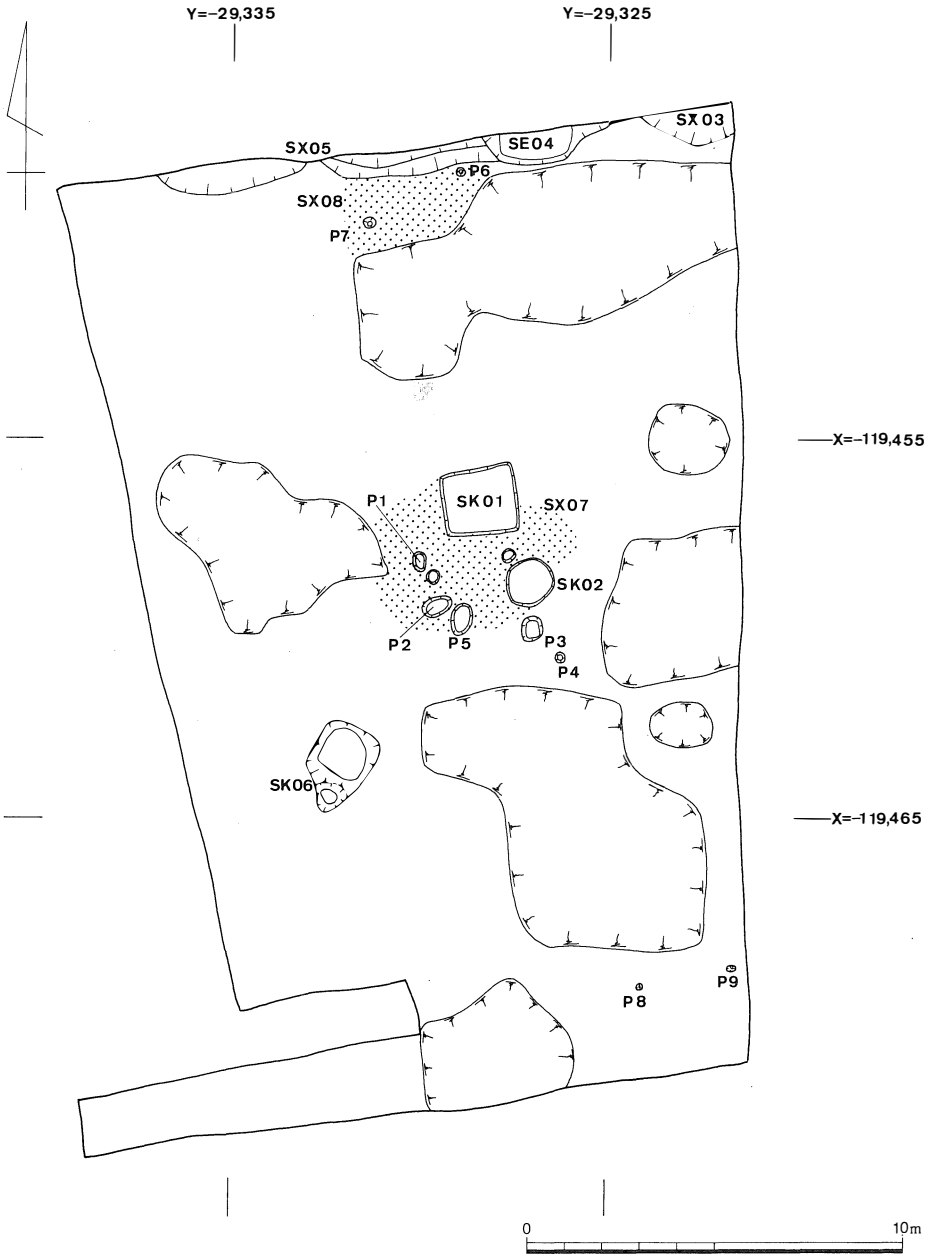
第3図　寂照院仁王門（南から）

第4図　調査前全景（南西から）



京都市土木局都市計畫課　　昭和10年修正測図

第５図　奥海印寺の字名と集落（１／５000）



第６図　検出遺構図（１／200）

をはさんで背後の丘陵地から南東方向に延びる段丘部に位置しており、周辺では最も高い標高を有する。集落跡についても、寺の前面に「多貝垣外」、「北垣外」、「南垣外」、「西垣外」などの小字名が残っており注目される（第５図）。

本調査地は旧都長岡京の外に位置しているが、既に周辺では旧石器時代、縄文時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代の各遺構・遺物が確認された奥海印寺遺跡[1]と、

中世城館である海印寺城跡[(2)]が知られるとともに、北側の丘陵地には走田古墳群[(3)]、稲荷山古墳群などの後期群集墳が点在している。また、寂照院境内に置かれている家形石棺の棺材については走田古墳群から掘り出されたものと推定される。この他、寂照院の北約400mの丘陵斜面には平安時代前期の奥海印寺窯跡がある。本瓦窯の軒瓦は京都市伏見区の貞観寺推定寺域内から出土しているが、海印寺所用の軒瓦についてはこれまでのところ採集されたものがないことから明らかでない。

3　検　出　遺　構

本調査地は、長岡京市の西方を流れる小泉川の支流、湯谷川の左岸段丘部に位置する。当地の標高は約63mである。今回の調査は、海印寺跡の推定寺域内における初めての発掘調査であり、これまで明らかでなかった伽藍や軒瓦などの遺物が確認されるものと期待された。

調査は、土置き場の関係から東側と西側に分けて全面発掘を行った。掘削は草刈りのあと重機を用いて表土や藪土などの除去を行い、調査後埋め戻して旧状に復した。遺構は礫を多く含む面から検出したが、調査地の約３割は建物解体時の撹乱壙で破壊されていた（第６図）。

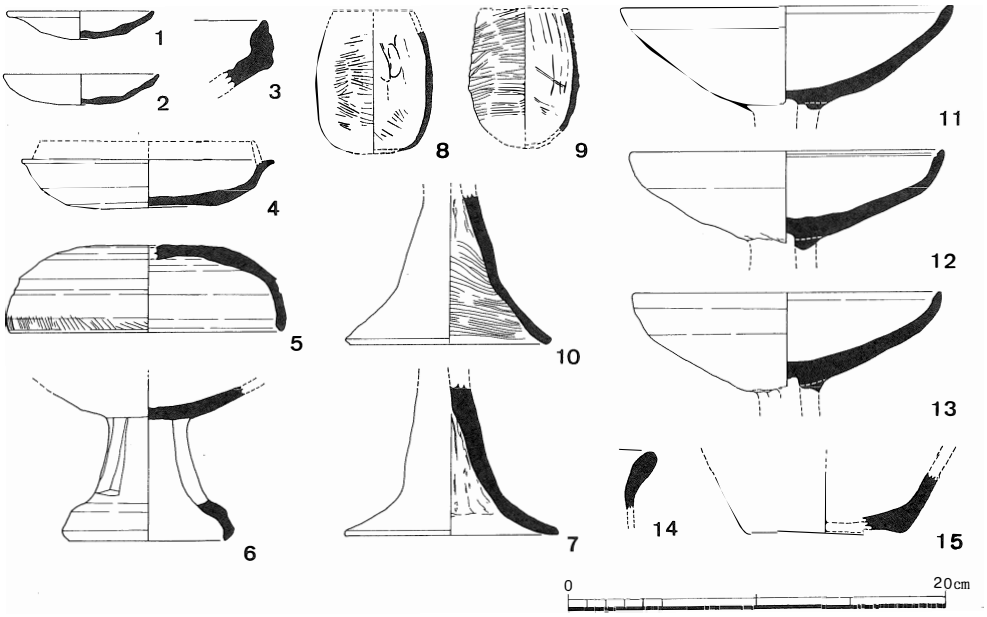
遺構は、主に江戸時代の落ち込みと井戸、古墳時代後期の土器溜りと柱穴を検出するとともに、これらの遺構の基盤となる礫を多く含む土石流堆積層から口縁部と底部片を含む縄文土器を確認している。

江戸時代の遺構は、調査地北端で検出した落ち込みＳＸ03・05と井戸ＳＥ04がある。いずれも調査地境界に接するため全容は不明であるが、さらに北側へと続いている。井戸は崩落の危険があるため底まで掘れなかった。陶磁器や瓦が少量出土している。土壙ＳＫ01・02・06については、埋土が藪土に類似する黄褐色砂質土であることから近世以後に掘られたものと考えられる。

古墳時代後期の遺構は、土器溜りＳＸ07・08（網かけ部分）と柱穴がある。大部分の遺物はこの土器溜りから出土したものである。

土器溜りＳＸ07　凹凸のある礫上面で検出した不定形なくぼみである。深さ約0.1mの黒褐色礫混じり土から土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、この中には脚部を欠く土師器高坏の坏部を伏せて上下に重ねたものも出土している（図版２－４）。重複する柱穴P1・P2・P5は黒褐色礫混じり土を掘り込んでいる。

土器溜りＳＸ08　ＳＸ07に類似した埋土であり、深さ約0.1mを測る。土師器、須恵器が出土している。柱穴P6・P7は埋土を掘り下げた礫上面から検出しており、P6からは土師器高坏の坏部が出土した（図版２－５）。



第７図　出土遺物実測図（１／４）

4　出　土　遺　物

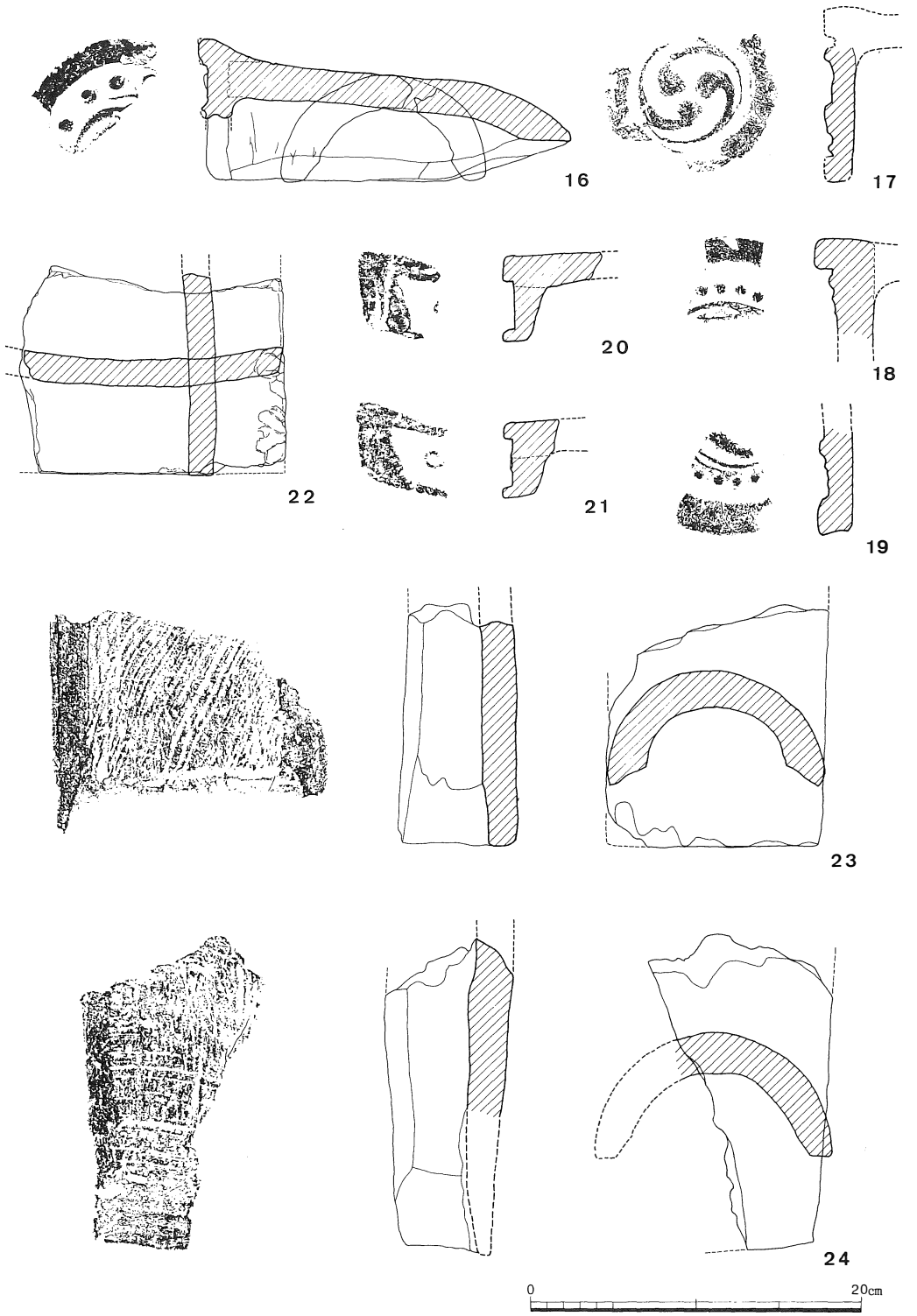
今回の調査で出土した遺物は、土器溜りＳＸ07とＳＸ08、柱穴、落ち込みＳＸ03、井戸ＳＥ04などからのものである（第７～９図）。出土量は整理コンテナに３箱あり、このうちの２箱は瓦類である。

柱穴Ｐ４出土遺物　土師器皿（１・２）と備前焼擂鉢(3)がある。１・２は口径８㎝前後の小皿。３は小片であるが内面にすり目が７本確認される。

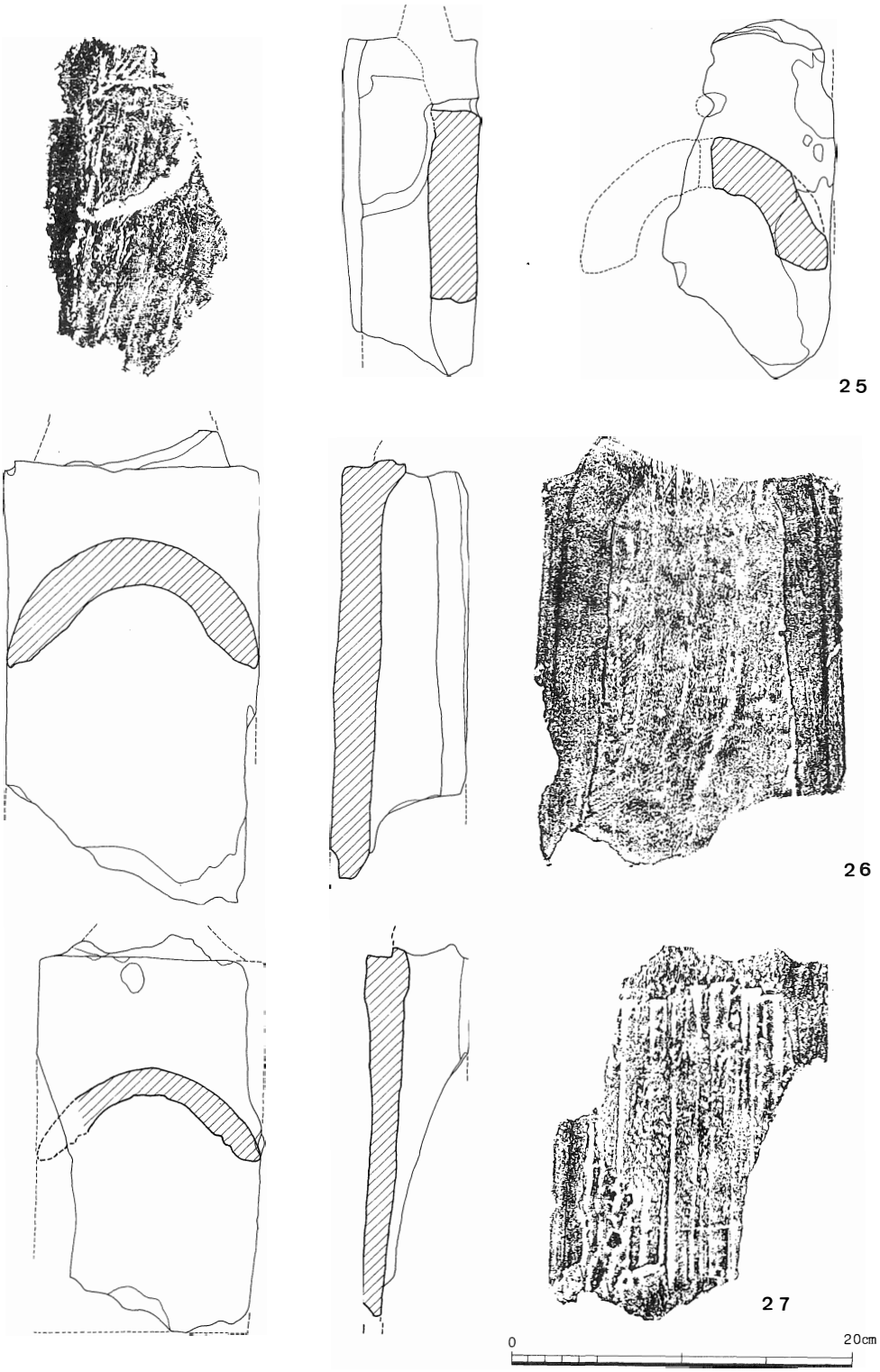
柱穴Ｐ６出土遺物　土師器高坏(13)がある。柱穴内から坏部を上向きにして出土した。口縁部は横ナデしており、口縁端部内面は内傾する。内面はナデ、外面に指頭痕が残る。脚部を欠いており、坏部の接合面には棒を挿入したと考えられる径0.8㎝前後の孔と、ひねりを加えた痕跡が残る。

土器溜りＳＸ07出土遺物　土師器の高坏脚部(10)と坏部(11・12)、製塩土器(8・9)がある。11は、摩滅しており調整不明。口縁端部内面は内傾する。12は口縁端部内面に沈線を有する。調整は13と同じである。11と12はいずれも脚部を欠いており、口縁部を伏せて上下に重ねた状態で出土した。10は、脚部内面に刷け目と成形時のしぼり目をとどめる。８・９は、体部外面に平行叩きを施す。底部外面と内面はナデをおこなう。

土器溜りＳＸ08出土遺物　須恵器の坏(4)・蓋(5)・高坏(6)と、土師器の高坏脚部(7)がある。４は、浅くて平たい底部に粗いヘラ削りを施す。色調は淡灰色を呈する。５は、口縁端部外面に斜方向の刷け目状の条線を施しており、体部には浅い凹みを有する。色調は青灰色を呈する。



第８図　瓦実測図１（１／４）



第９図　瓦実測図２（１／４）

６は、脚部に長方形の３方透かしをあけている。焼成は軟質、色調は淡青灰色を呈する。７は、脚部内面のしぼり目が顕著である。

土石流堆積層出土遺物　礫層の上面から縄文時代後期前葉に比定される土器の口縁部(14)と底部(15)が出土した。北白川上層Ⅱ式にあたる。[4]

落ち込みＳＸ03、井戸ＳＥ04出土遺物　巴文軒丸瓦(16～19)、軒平瓦（20・21）、平瓦(22)、丸瓦（23～27）、桟瓦などの他、京焼系陶器の丸碗や瀬戸焼の茶碗などがある。このうち大部分は丸瓦であり、瓦当文様が残存するものは極めて少ない。これらの瓦類[5]は、調査地北側の江戸時代の落ち込みＳＸ03と井戸ＳＥ04から出土しており、周辺が整地された際に投棄されたものと考えられる。16は内区に左巻き巴文を、外区に珠文を配する。巴は２本の尾部がわずかに残る。瓦当面には離れ砂を使用しており、丸瓦の接合面に刻み目をいれる。瓦当裏面の接合部分には、上下に粘土を足し、周縁に沿ってナデをおこなう。丸瓦凸面は縦方向のヘラナデ調整、凹面は前端部と両側縁部をヘラケズリ調整しており、前端部の形は舌状に丸くなる。凹面には横方向のコビキ痕跡（コビキＢ）をとどめる。瓦当は直径約14cm、全長22.8cmである。胎土は淡灰色で砂粒を含み、色調は内外面とも暗灰色から灰色を呈する。焼成は堅緻。17は、右巻き三巴文。丸瓦との接合面で剝離する。巴は各尾部が接しており、頭部も円形で大きい。瓦当は直径10.3cmである。胎土は砂粒を含み、色調は内外面とも淡灰色を呈する。焼成は軟質。18は、内区が剝離しており文様は不明瞭であるが左巻き巴文と考えられる。外区に珠文を配する。丸瓦との接合面で剝がれる。胎土は灰色で微砂粒を含む。色調灰色、焼成堅緻。19は、左巻き巴文。胎土に砂粒を多く含む。色調は灰褐色、焼成は軟質。20・21は、内区左側をわずかに残すのみであるが、文様は唐草文であろう。瓦当は平瓦凸面に粘土を張り付けている。平瓦はすべて破片で全形のわかるものはない。22は、両面とも横方向にナデをおこなう。端部はヘラケズリの後ナデ調整する。色調は凹面と側面、凸面の一部が灰色、他は暗灰色を呈する。焼成は堅緻。丸瓦は23・24が前端部のみ、25～27は玉縁が残存する。凸面の調整は、いずれも縦方向のヘラナデ調整であるが、26は縄目叩きの後ヘラナデをおこなう。凹面は、前端部と両側縁部をヘラケズリ調整する。丸瓦凹面は、23・25・26に布目と斜方向のコビキ痕跡（コビキＡ）があり、24は横方向のコビキ痕跡（コビキＢ）のみみられ、27には横方向のコビキ痕跡（コビキＢ）と幅１cm前後のタタキ板痕がみられる。このうち25・26は玉縁部凹面にも布目があり、25には丸瓦凹面に布袋痕、筒部に釘穴を有する。丸瓦は全長がわかるものはないが、27は筒部長21.6cmである。胎土は淡灰色で砂粒を含み、色調は内外面ともに暗灰色を呈するもの（25～27）と、部分的に淡灰色から暗灰色を呈するもの（23・24）がある。焼成は、24が軟質。他のものは堅緻。

5 ま と め

今回の調査では、海印寺跡に関連する遺構は明確でなかったが、縄文時代後期、古墳時代後期、戦国期から江戸時代にかけての遺構・遺物を確認することができた。中でも、土石流堆積層から縄文時代後期前葉の土器片が出土したことは、土石流堆積の下限年代を示すものとして特筆される。これらの縄文土器は土石流の発生によって下方に流されたと考えられることから、上流域には集落跡が存在した可能性がある。なお今回の調査に関する地形学的な分析・検討については、中塚良氏のご協力により付論として掲載させていただいた。

古墳時代では、須恵器蓋(5)や高坏(6)など6世紀中頃のものがわずかに出土しているが、大半は高坏や坏などの特徴から7世紀前半代と考えられる。本地点の製塩土器や高坏は、下海印寺遺跡の第1号竪穴住居や土壙1出土遺物の中に類似したものが見られる。これらの遺物は、背後の丘陵地に点在する走田古墳群から掘り出されたとされる石棺と時期を同じくするものであり、古墳の築造とともに周辺に集落が営まれたことを示唆するものとして注目される。

戦国期から江戸時代の遺構は、柱穴P4と落ち込みＳＸ03、井戸ＳＥ04がある。前者は概ね16世紀後葉と考えられるが量的には極めて少ない。丸瓦に残るコビキ痕跡の違いやタタキ板痕については、中世末から近世初頭にかけての城館や城郭から出土する瓦にみられる技法であり、このうち本調査地では第9図27が最も新しいものと考えられる。これらの瓦が投棄された時期は、落ち込みＳＸ03から出土した京焼系陶器などから18世紀後半頃と考えられる。なお、安永9年（1780）頃に描かれた寂照院絵図(6)には本調査地付近に建物など見当たらないが、江戸時代中期の寂照院の本堂と仁王門、妙見社と呼ばれた走田神社への鳥居や参道が鳥瞰できる。

海印寺の遺構は当地では既に削平されたものと判断されるが、寺域については従来より地名や地形から想定されているとおり、本地点東側の平坦部や湯谷川を挟んだ西側の大見坊付近に求められよう。今後の調査が待たれるところである。

注1) ①山本輝雄「奥海印寺遺跡第1次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度 1988年
②山本輝雄「奥海印寺遺跡第2次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和62年度 1989年
③小田桐淳「奥海印寺遺跡第3次調査概要」『長岡京市報告書』第20冊 1988年
④原秀樹「奥海印寺遺跡第5次調査概要」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年

2) 木村泰彦「奥海印寺遺跡第4次調査概要」『長岡京市報告書』第20冊 1988年

3) 『長岡京市史』資料編一 1991年

4) 奈良大学助教授泉拓良氏のご教示による。

5) 瓦類については、大手前女子学園『大坂城三の丸跡Ⅱ』大手口における発掘調査報告書その2 1988年と、高槻市文化財調査報告書第14冊『摂津高槻城』昭和59年を参照した。

6) 角川書店『日本名所風俗図絵』第8巻、長岡京市『寂照院総合調査報告書』図版2に掲載

付　論

海印寺跡において発掘された土石流扇状地の微地形分析

中塚　良（財団法人向日市埋蔵文化財センター）

1　緒　　言

1991年８月、平安時代の寺院跡と推定される海印寺跡において、第１回目の範囲確認調査が実施された。寺院に関連する遺構は検出し得なかったが、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構群が確認され、その下位には拳大～人頭大の礫を主体とする砂礫層が厚く堆積していた。層相、形態から土石流扇状地を構成する堆積物と判断された。周辺域での地形調査によって、堆積物は調査地背後の開析谷から供給されたものと推察された。堆積物中からは、縄文時代後期前半の所産とみられる土器片が少量ながら出土したことにより、土石流堆積の形成年代は当該期を下限年代とし、古墳時代後期までの時間幅で把握し得た。一方、開析谷谷口部を、活断層として周知された走田断層が横切っている。断層位置における土石流扇状地の縦断面形において、約２ｍの低崖を認めた。

本稿では、発掘現場での観察結果をもとに、縄文時代に形成された土石流扇状地の性格を明らかにし、土石流扇状地地形面の断層変位に対し、微地形学的な検討を加える。なお、調査の機会を与えられた中尾秀正・原秀樹両氏に謝意を表する。

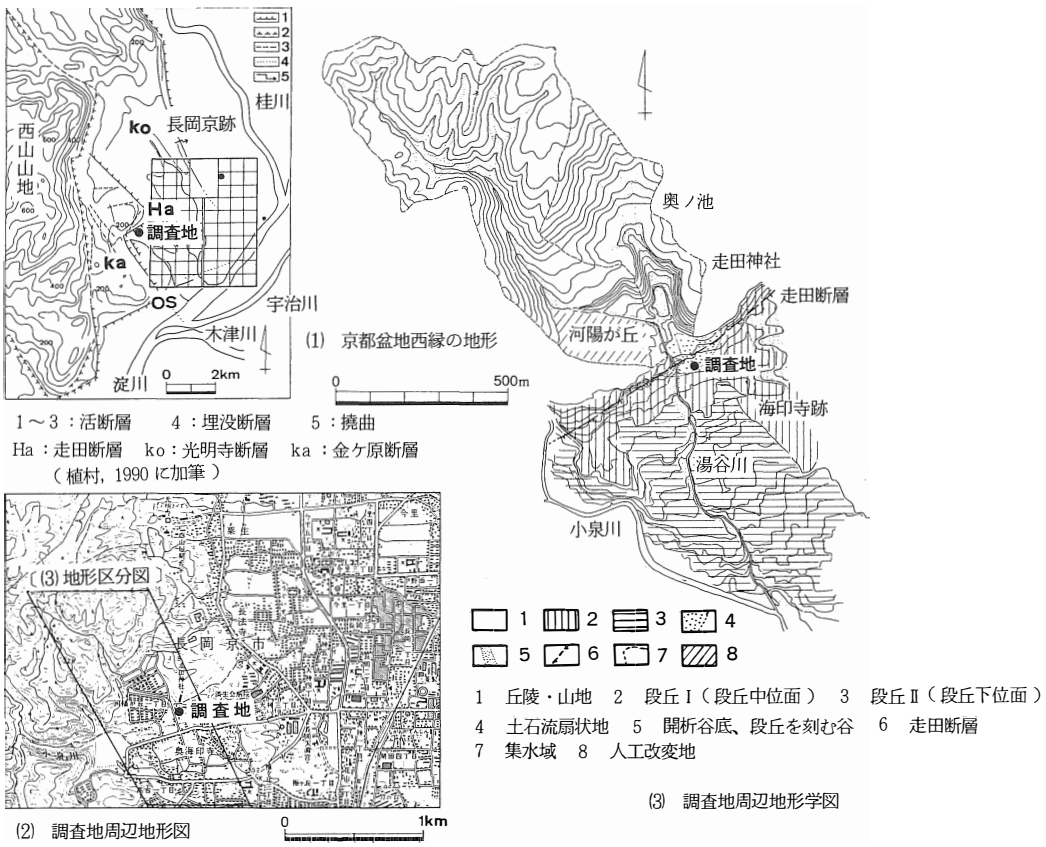
2　調査地の位置（第10図）

調査地は、京都盆地西縁・小泉川左岸中流域の段丘Ｉ面（中塚，1991[1]）、いわゆる段丘中位面（国土地理院，1966）を被覆する扇状地に位置する。標高は約63ｍである。段丘は、南落ちの緩傾斜面をなす。調査地背後には、丘陵を刻む開析谷が発達しており、これらの水を集めて湯谷川が段丘上を南流し、小泉川に合流する。大阪層群からなる丘陵の基盤は、頁岩・砂岩などの堆積岩類からなる丹波帯中・古生層である。湯谷川は、海印寺跡の南に広がる段丘II面（段丘下位面）を掘り込んで狭い河谷を形成しており、河谷部分は海印寺跡の南、標高62ｍ付近まで明瞭に認められる。丘陵～段丘の傾斜変換点には、北あがりで東北東－西南西方位に延びる走田断層（植村，1990．活断層研究会編，1991）が周知されている。走田断層は、湯谷川及び開析谷の谷口部を横断し、段丘面及び扇状地面を断層変位させている。

3　土石流扇状地の層相・形態（第11・12図）

〔層相〕　調査地の層序は、上層から耕作土、褐色礫質土、暗褐色シルト質礫である。このうち暗褐色シルト質礫は、地表下0.6～0.7ｍ以深に厚く堆積しており、トレンチ全域に広がりを

みせる。これらは層相からみて、土石流堆積物（Debris flow deposits）であり、扇状地（土石流扇状地）の構成層と判断される。礫は大～巨礫を主体にしており、主に亜角～角礫からなる。淘汰の具合、葉理の発達とも全体に悪い。基質の土性は軟質で、やや粘性を伴う褐色シルト壌土である。Loc.Bでは、礫層は層厚1.0m以上であり、中位で粗粒化した後堆積面にむけて急激に細粒化する。Loc.Cでは、不明瞭ながら礫の長軸方位を北東－南西にそろえるものがあり、礫の配列に弱いインブリケーションが認められる。礫は上面を北西側に傾斜させ、一部に急角度で衝立状に立ちあがるものもある。礫の走向・傾斜は、S51°W，43°NW程度であった（巨礫5点計測、算術平均）。トレンチ南端：Loc.Dでは、礫層は著しく細粒化し、中礫が主体となる。堆積物の粒径の水平的変化を知るため、Loc.A′・C・Dにおいて、堆積面からやや下位の地層断面に位置する礫を掘り出して、最も大きな礫5～10点を測った（礫の長軸を計測、算術平均）。最大粒径は、Loc.A′：184mm（ϕ：−7.5）、Loc.C：231mm（ϕ：−7.9）、Loc.D：88mm（ϕ：−6.5）を示した。堆積物の粒径は、トレンチ中央において最大となり、南端にむけて急激に細粒化する。以上の観察結果は、堆積物が、多量の水を含んで集合運搬された状態を示唆する。



第10図　調査地の位置と周辺地形

〔礫種構成〕　Loc.Ｃにおいて、巨礫間に点在する中礫程度の礫を無作為に抽出し、礫種構成について調べた。礫種構成は、頁岩・粘板岩：59％、砂岩33％、礫岩９％（試料数：46点）である。

〔堆積面の形態〕　土石流堆の堆積面高度は、トレンチ北西端が標高63.6mであり、南端にむけて高度を下げる。約0.5mの高度差を有する。堆積面の縦断面形は、南半でやや凹形をなすものの概ね平滑である。堆積面の勾配は南落ち21　である。堆積面には、等高線で示すように、南東～南にむけて延びる舌状の微高地が認められる。微高地の発達方位は、礫のインブリケーションから推定される堆積物の運搬堆積方位（Loc.Ｃ：Ｅ51°Ｓ）と整合的である。

〔土石流堆積物の考古学年代〕　土石流堆積物の上位（堆積面から－0.1m程度）からは、縁帯文系縄文土器（北白川上層Ⅱ式）が若干点数出土した[(2)]。また、土石流堆積物の上面では、古墳時代後期～飛鳥時代の所産とみられる遺構群が検出された。従って、土石流堆積物の形成時期（土石流の発生時期）は遺物の考古学年代からみて、縄文時代後期前半を下限年代とし、当該期～古墳時代後期（６世紀中頃）の時間幅でとらえることができる。

4　土石流扇状地及び周辺地形の微地形学的検討（第13図）

〔調査地周辺地形の断面形〕　第13図に、海印寺跡周辺の地形断面を示す。Ａ－Ａ′が、調査地東側における丘陵～段丘の断面形、Ｂ－Ｂ′が、奥ノ池開析谷[(3)]から調査地を介し段丘Ⅰ～Ⅱ面（中塚，1991）に至る断面形、また、Ｃ－Ｃ′が湯谷川開析谷から段丘面を掘り込む湯谷川の河谷に沿う断面形である。

Ａ－Ａ′断面：標高64m、69mに傾斜変換点が認められる。走田断層は段丘Ⅰ面を北上がりに変位させている。走田断層による段丘Ⅰ面の垂直変位量は、北上り約50mと報告されている（植村，1990）。

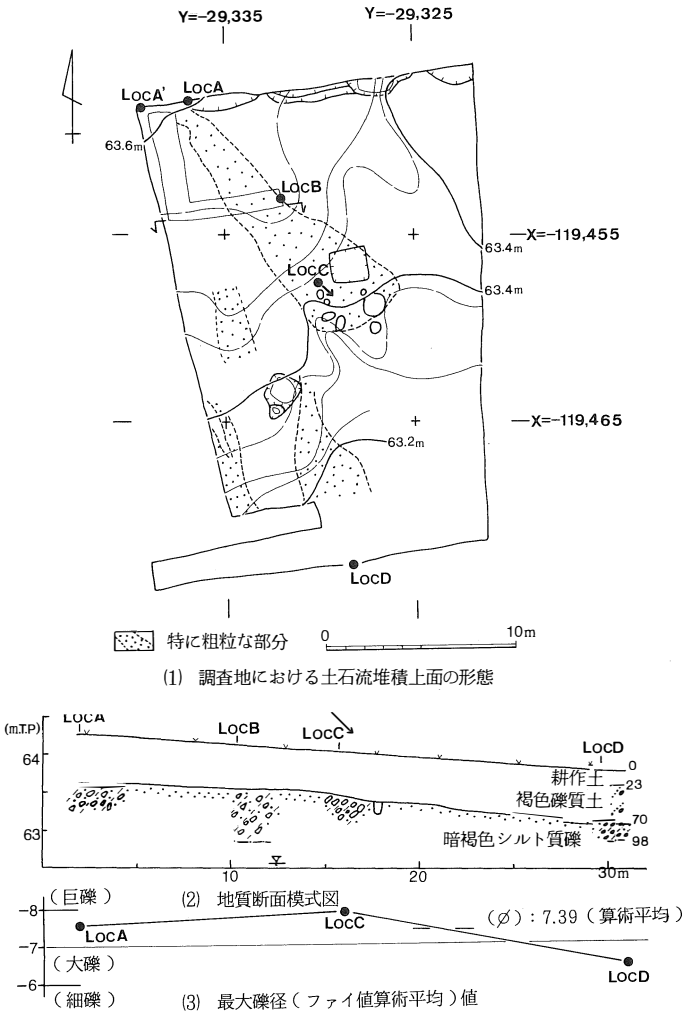
Ｂ－Ｂ′断面：段丘の断面形では、段丘Ⅰ面と同Ⅱ面の境界は不明瞭であり、標高58～60mにおいて傾斜を変える程度である。また、段丘Ⅰ面を覆う土石流扇状地面も断面形では不明瞭である。土石流堆積物の分布範囲は、奥海印寺遺跡の調査（Oku　１～４）によって一部確認されている。奥ノ池開析谷谷底面の断面形には、標高64m付近、開析谷谷口部に至って比高約2.0mの低崖が認められ、海印寺跡の位置する土石流扇状地の断面形に不連続である。一方、開析谷底の勾配は約29　であり、土石流扇状地面の勾配に比較的整合している。低崖は、走田断層が土石流扇状地面を東北東方位に横断する位置にある。一方、開析谷から供給された堆積物が谷口部分を厚く埋積する状況をトレンチの層序より推測しうる。従ってこの低崖は、土石流扇状地形成後の走田断層による構造変位に伴って形成された可能性が高いものと判断される。本来、開析谷から流れ下った土石流堆積物は、その堆積時に開析谷底の傾斜に連続したものとみられる。

Ｃ－Ｃ′断面：湯谷川の河谷が標高62m付近まで段丘Ⅱ面を１～２m程度掘り込む。湯谷川

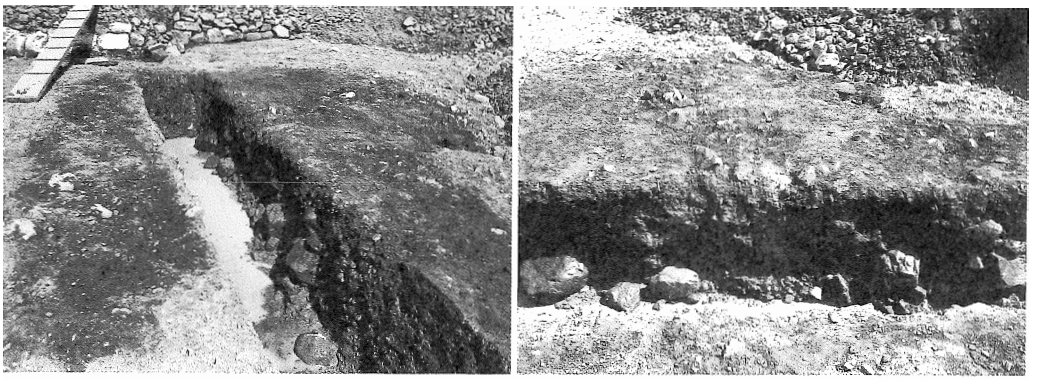
開析谷は、断面形からみて住宅建設に伴う人工改変を受けたものと判断される。

〔土石流扇状地の形成と断層変位〕 前節において述べたように、海印寺跡において検出された土石流堆積物の形成時期は、考古学年代から縄文時代後期前半を下限年代として古墳時代後期（６世紀中頃）までの時間幅でとらえることができる。谷頭～段丘Ｉ面にかけて土石流扇状地面が広がっているが、土石流扇状地面上での低崖（比高2.0m）が、走田断層の変位に伴う堆積面の変形（断層の垂直変位）とする前提にたって、断層の平均変位速度・活動度について考察する。内陸の活断層において、２m程度の断層変位は、一般に１回の活断層の活動に伴うものと考えられている。

土石流扇状地の形成時期を縄文時代後期前半（4000～3500年前）と仮定した場合、断層の垂直変位速度は0.50～0.57m／10^3年と算定される。断層の活動度はＢ級である。一方、古墳時



第11図 調査地における土石流扇状地の形態・層相



第12図　土石流の堆積状況（左：北西から　右：北から、LocB)

代後期（1400年前）でとらえた場合、変位速度は1.43m／10^3年と算定され、前者に比べてひと桁大きい数値を得る。植村（1990）は、京都盆地西縁に分布する活断層を扱って、0.1～0.4m／10^3年の垂直変位速度、Ｂ級下位の活動度を推定した。今回見積もられた数値では、前者の垂直変位速度がこれに比較的近い数値を示している。水平ずれの成分については、今回明らかにし得ない。植村の報文を勘案すれば、断層変位速度の算定値との比較によって、土石流扇状地の形成時期は、堆積物に伴う遺物の下限年代である縄文時代後期前半もしくはこれに近い時期であるものとして矛盾しない。　以上の検討から、走田断層の垂直変位量、断層の平均変位速度は、それぞれ2.0m、0.50～0.57m／10^3年と見積もることができた。走田断層は、長さ1.3km、活動度Ｂ級下位と報告されており、これらのデータをもとに、活断層に関する経験式（松田，1975）などを用いて、断層の活動度を整理してみる。

(1)　地震規模（M：マグニチュード）・活断層変位量（D：m）の関係式：logD＝0.6M－4.0に、今回得られたD：2.0mを代入するとM：7.2を得る。

(2)　地震規模・活断層の長さ（L：km）の関係式：logL＝0.6M－2.9に、L：1.3kmを代入して、M：4.7を得る。一方、1)で得られたM：7.2を上式に代入すると、L：26.3kmを得ることになり、断層の長さ（1.3km)と矛盾を生ずる。従って、D：2.0mの垂直変位量を、一回の断層変位にともなうものとみるならば、走田断層単独での活動では説明しがたい。

(3)　断層運動の再来周期に関する式：LogR＝0.6M－（logS＋1.0）（但しR：再来周期，年、S：平均変位速度，mm／年）に、1)で得られたM：7.2及びS：0.57を代入すると、R：3630年を得る。

(4)　走田断層の南東約２kmの沖積低地地下には、大山崎・下植野断層（中塚，1991・第10図OS）の伏在が推定されている[(4)]。両断層は平行して東北東にのび南北性の断層である余ケ原断層が連なっている。大山崎・下植野断層の平均垂直変位速度は、0.65m／10^3年と見積もられている。この値は、走田断層の変位速度と大きく矛盾しない。これより走田断層とその周

辺に分布する活断層系が同程度の活動をおこなった可能性を指摘しうる。

5 小 結

長岡京市海印寺跡において検出された土石流扇状地及び周辺地形に対し、考古学年代にもとづいて微地形学的な検討を加えた。検討結果は次のように整理できる。

(1) 土石流扇状地は、大阪層群・丹波帯中～古生層の基盤を刻む谷、すなわち湯谷川・奥ノ池の両開析谷から供給された土砂によって、谷口部から下位にむけて段丘Ｉ面を被覆して発達するものとみられる。今回の調査地は堆積相、構成物質の粒径からみて、その末端付近に位置するものと考えられる。土石流扇状地面は、現在の湯谷川によって約２ｍ掘り込まれている。

(2) 構成物質は、大～巨礫、角～亜角礫を主体とし、基質は軟質のシルト壌土である。全長25ｍのトレンチ内では、トレンチ北端から中央にかけて粗粒化した後、南端において急激に細粒化する状況が認められた。また、堆積面は舌状の平面形、凸形の横断面形をなす微高地群によって構成される。層相・堆積構造から、微地形の発達方位はおおむね南東方位と推定された。

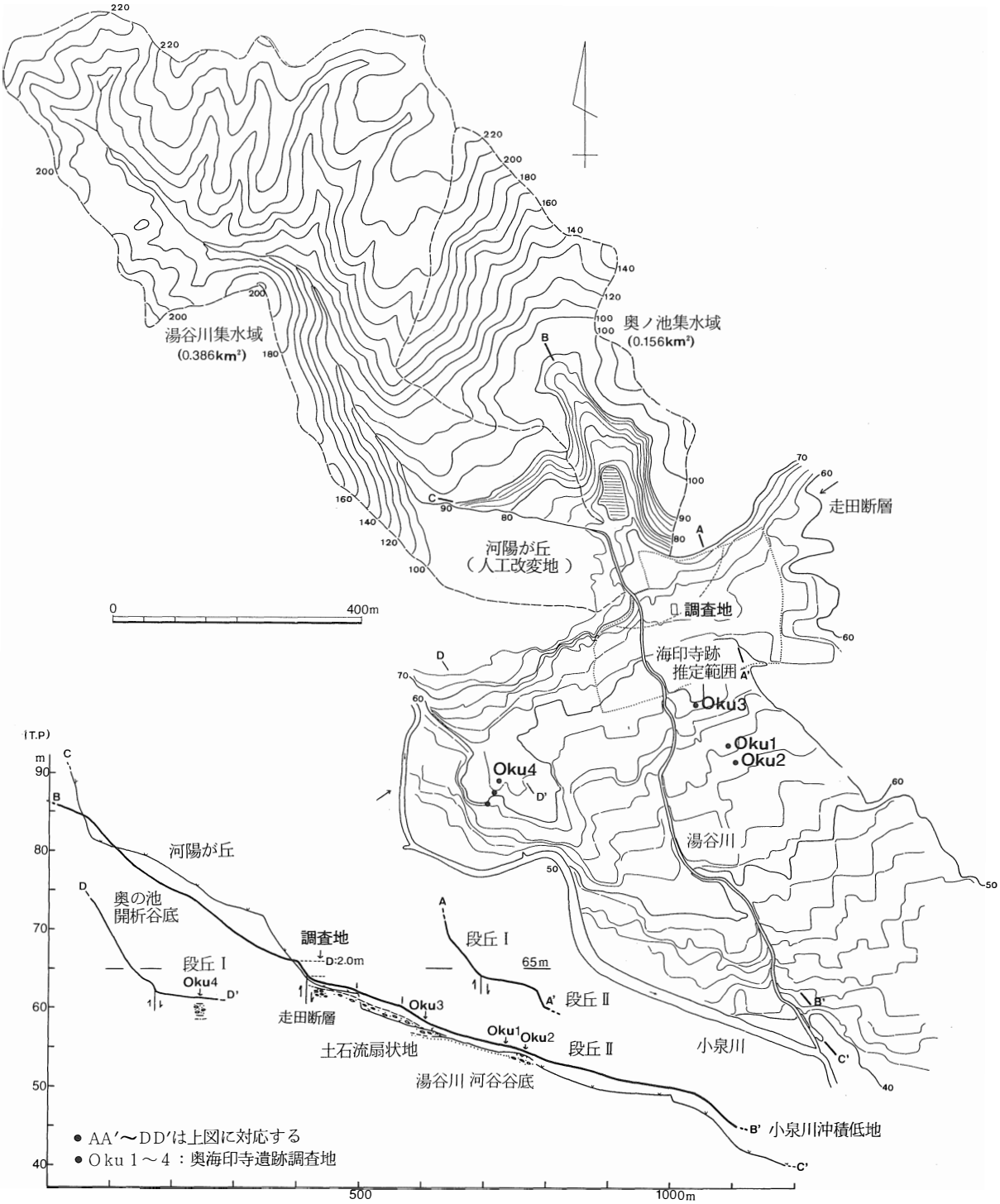
(3) 土石流堆の形成年代は、考古学年代からみて縄文時代後期前半（4000～3500年前）～古墳時代後期（1400年前）の時間幅で把握できる。

(4) 土石流扇状地の中央、調査地北側には京都盆地西縁活断層系のひとつ、走田断層が東北東方位に延びる。地形断面形の検討から、土石流扇状地面は、垂直に約2.0ｍ断層変位するものと推察された。断層の最新の活動時期は、土石流堆積面の形成期以降である。

(5) 2.0ｍの低崖の形成を複数回の断層変位によるものと考えない場合、土石流扇状地を横断する断層の垂直平均変位速度は、土石流堆積物の考古学年代からＡ：0.50～0.57ｍ／10^3年～Ｂ：1.43ｍ／10^3年の幅で見積りうる。京都盆西縁活断層系の活動度を考慮するならば、Ａ案が妥当と言えよう。断層の活動度はＢ級中位である。

(6) 走田断層の断層変位量と断層規模（全長）は不調和であるが、周辺活断層の活動様式によって説明しうる可能性を指摘した。

地形条件が良好とみられた段丘面上において、断層変位した土石流扇状地が発達することが、発掘調査によって明らかとなり、災害の自然史や、今日の防災問題を考えるうえで貴重なデータを入手し得た。地形形成史を考えた場合、臨海平野、内陸盆地を問わず、縄文時代後期は扇状地の拡大、洪水堆積物の堆積量の増加など、地形条件の変化の画期にあたることが、最近の考古学調査の進展とともに指摘されつつある。岩屑生産の影響を直接うける山間部における今回の調査事例に興味がもたれる[5]。また、地震断層としての活断層の活動時期・活動度が、考古学年代によって推定されたように、関連諸科学における考古学調査のしめる役割は大きい。断層位置や周辺地域での今後の発掘調査の進展によって、土石流扇状地の広がりや堆積構造・年代、断層変位の様式などについて、さらに精度の高い検討が可能となろう。



第13図　調査地周辺等高線図・地形縦断面図

〔文献〕（50音順）

植村善博(1990)：京都盆地西縁の変動地形と第四紀テクトニクス.『立命館地理学』第２号,37–56.

小田桐淳(1988)：奥海印寺遺跡第３次（2LOPTJ–3地区）調査概要．『長岡京市文化財調査報告書』第20冊，33–44.

亀井節夫(1982)：第３章．地形・地質「京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書」『長岡京市文化財調査報告書』第10冊

活断層研究会編(1991)：76 京都及大阪『日本の活断層－分布図と資料』東京大学出版会,272－279.

木村泰彦(1988)：奥海印寺遺跡第４次（2LOPSR地区）調査概要．『長岡京市文化財調査報告書』第20冊，45–51.

国土地理院(1966)：１／25,000土地条件図,京都南部.

中塚　良(1991)：山城盆地中央部小泉川沖積低地の微地形分析－遺跡立地からみた地形形成過程と構造運動－．『東北地理』43–1,1–18.

中塚　良(1992)：土器胎土中の砂礫分析からみた縄文時代・晩期の地形・地質条件の推移－京都盆地西縁・向日市石田遺跡を例に一．『日本地理学会予稿集』41.

松田時彦(1975)：活断層から発生する地震の規模と周期について．『地震』2,28,269–283.

山本輝雄(1988)：奥海印寺遺跡第１次（2LOPTJ地区）調査概報．『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度，164–169.

山本輝雄(1989)：奥海印寺遺跡第２次（2LOPTJ–2地区）調査概報．『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度，96–100.

〔注〕

1) 段丘面の評価については、中塚（1991）の「段丘Ｉ面」が、植村（1990）の高位段丘にあたる。

2) 奈良大学・泉拓良氏、滋賀県埋蔵文化財協会・中村健二氏ご教示。

3) 奥ノ池開析谷の名は、奥海印寺奥ノ院（現河陽が丘二丁目）に所在した「奥ノ池」にちなんで付けた。

4) 本断層は、京都盆地中央部沖積低地下、京都市伏見区横大路にまで追跡されると言う（立命館大学・植村善博先生、私信・1992年２月）

5) 立命館大学・高橋学先生ご教示による。小泉川流域では、下海印寺遺跡第３次調査において縄文時代後期中葉の土石流堆積物が確認されている（亀井、1982）。また、縄文時代後～晩期の堆積物の検討の他に、筆者は現在、考古学遺物から地形条件の推移を読み取る作業を始めた（中塚，1992）

第２章　長岡京跡左京第275次（7ANMST－６地区）調査概要

――長岡京跡左京六条一坊十町・東一坊々間大路、雲宮遺跡、芝本遺跡――

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1991年10月８日～1991年11月１日まで、長岡京市神足芝本６において実施した長岡京跡左京六条一坊十町推定地、東一坊々間大路、雲宮遺跡、および芝本遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は149㎡である。

2　本調査は、1987年に本調査地南側で行った左京第184次[1]調査においてその一部分を検出した東一坊々間大路東側溝の全容を明らかにすることを目的に実施したものである。調査は長岡京市教育委員会を主体とする平成３年度国庫補助事業として実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センター調査員 原秀樹が担当した。

3　調査実施にあたり、土地所有者である伊辻克美氏をはじめ、近隣住民の方々には種々のご協力を得た。また、現地調査および本報告の作成にあたっては、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏よりご指導を賜った。

4　調査後の遺物実測や図面整理は、船戸裕子、田中智紀が行った。また挿図の遺構番号については、一部本地点の調査次数「275」を省略している。

5　本報告の執筆ならびに編集は、原が行った。

第14図　発掘調査地位置図（１／5000）

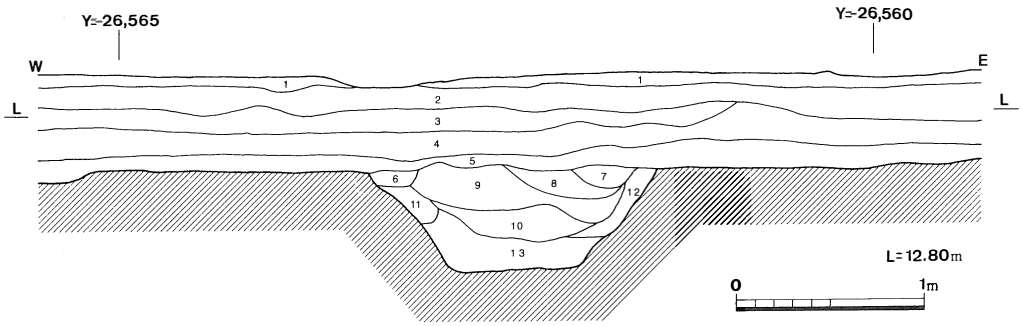
2　調　査　経　過

本調査地は、ＪＲ神足駅の東500mに位置する。地形的には、小畑川が形成した扇状地に立地しており、付近の水田面の標高は約13mである。今回の調査は、1987年に実施した左京第184次調査でその一部分を検出した東一坊々間大路東側溝ＳＤ18404の全容を明らかにすることを目的に、その北側に調査トレンチを設定した。当地は、長岡京跡左京六条一坊十町と東一坊々間大路東側溝に比定される他に、縄文時代から古墳時代の集落跡である雲宮遺跡[2]、縄文時代の散布地である芝本遺跡[3]に含まれている。また左京第60次[4]調査では良好に残る鎌倉時代の瓦器埦が大量に出土している。一方、長岡京期では左京六条一坊七町の左京第102次[5]調査で井籠組井戸を、同十一町の左京第204次[6]調査では東一坊第二小路両側溝と溝で南北に分割された宅地を検出しており、本地点と同じ十町で行われた左京第269次[7]調査では井戸と溝から多くの祭祀遺物が出土している。これらの調査結果は、本市左京域の中でも特筆されるものであり、今後の整理報告が待たれるところである。

調査は、南北に細長い水田の北側に南北38m、東西２～７mの幅で発掘区を設定した。掘削は重機を用いて耕作土と小畑川の洪水堆積層以下、整地土の除去を行った。また調査地北部では一部下層の掘り下げを行った後、埋め戻しを行った。

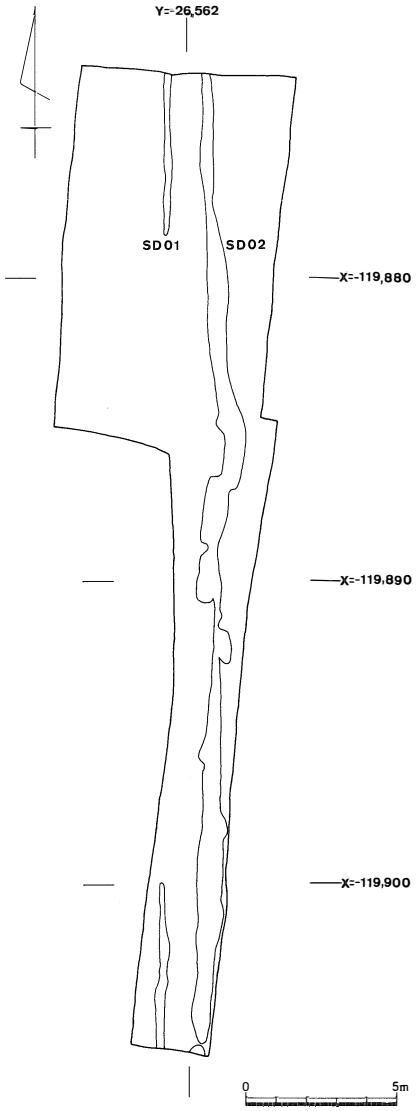
3　検　出　遺　構

本調査地では、周辺の調査地と同じく耕作土、床土の下に小畑川の洪水運搬堆積である砂礫層が広がっている。以下褐色斑紋とマンガン斑を含む灰色粘質土層と暗灰色粘質土層が堆積し



1　耕作土（調査時に少し除去）
2　褐色斑入灰褐色土
3　褐色斑入砂礫混じり灰褐色土（洪水層）
4　褐色斑入灰色粘質土（マンガン斑含む）
5　褐色斑入暗灰色粘質土（マンガン斑含む）
6　灰色粘質土（ＳＤ０１）
7　灰色粘質土（ＳＤ０２）
8　褐色斑入灰色粘質土（４に類似）
9　褐色斑入灰白色粘質土
10　暗灰色粘土混じり緑灰色粘質土
11　褐色斑入灰色粘質土（４に類似）
12　緑灰色斑入灰色粘質土
13　褐色砂混じり暗灰色粘土（炭混じり）
（ＳＤ０３）

第15図　北壁土層図（１／40）



第16図　中世溝実測図（１／250）

ており、長岡京期と中世の遺構は、東側溝の埋土と類似する褐色斑紋を含む灰白色粘質土層から検出している（第15図）。検出面の標高は12.5mである。また調査区北部で行った下層の調査（第17図、溝ＳＤ27503・B–B′ラインの西側。調査面積約10m²）では、ブロック状の褐色斑紋を含む青灰色シルト層と灰白色粘質土層が約0.6m堆積しており、その下から暗灰色腐植土層を検出した。土層内からは長さ5.5m以上、幹の直径約0.4mを測るブナ科の常緑高木である樫と木の葉類、クルミやどんぐりなどの果実類、ヨシと考えられる管状で節のある植物根などが出土した。これらの時期については土器が出土していないことから明確でないが、東側に隣接する左京第269次調査地から本地点と同様の木の葉や果実類を出土する弥生時代中期を下限とする東西方向の流路が検出されていることから、これもほぼ同時期と考えられる。地山は粘着性の強い緑灰色粘土である。

長岡京期以後の遺構は、南北方向の素掘り溝２条を検出している（第16図）。溝ＳＤ27501は幅0.2～0.3m、深さ0.1m。溝ＳＤ27502は、最大幅0.8m、深さ約0.2～0.5m。中央付近では東側へ膨らんでおり幅や深さも一様でない。両溝は東一坊々間大路東側溝ＳＤ27503と重複しており、溝ＳＤ27502からは長岡京期の土器も出土した。両溝については、周辺の調査地で検出された中世の素掘り溝と同じ方位であること、切り合い関係が新しいことから判断して一連の中世溝と考えられる。

長岡京期の遺構は、東一坊々間大路東側溝ＳＤ27503、轍ＳＸ27507と、柱穴などを検出している（第17図）。いずれも側溝東側の宅地内で検出したものであり、路面上では遺構・遺物とも確認されなかった。

溝ＳＤ27503　左京第184次調査で検出された溝ＳＤ18404の北延長線上に位置する。幅1.3m、深さ0.5m。全長約38m分を検出する。溝の埋土は、遺物を多く含む下層（第17図７・８層）と、上層にわかれる。検出面は遺構の基盤となる層と類似しており、検出当初の輪郭は不明瞭であったが、中世溝ＳＤ27501・02を掘り下げた段階で重なる側溝の輪郭を確認することがで

きた。土器類は大半が下層から出土しており、本側溝が機能を終えた際に投棄されたものと考えられる。またＣ－Ｃ′ライン付近からは杭が１本検出された（図版５－３）。途中で折れているが、先を尖らせて打ちこんだものである。

溝ＳＤ27504・05　幅0.1～0.3m、深さ約0.1mの東西方向の溝。ＳＤ27502より西へは続いておらず、切り合い関係は両溝の方が古い。長岡京期の土器片が少量出土した。

溝ＳＤ27506　調査区東壁でわずかに検出した東西方向の溝。ＳＤ27503に切られている。長岡京期の土器片が少量出土した。

轍ＳＸ27507　両輪の幅1.5m、各車輪跡は幅0.1mである。長さ２m分を検出した。この南側でも２条ほどの轍がある。既に同町内の左京第269次調査では、北西から南東方向に延びる轍を検出している。

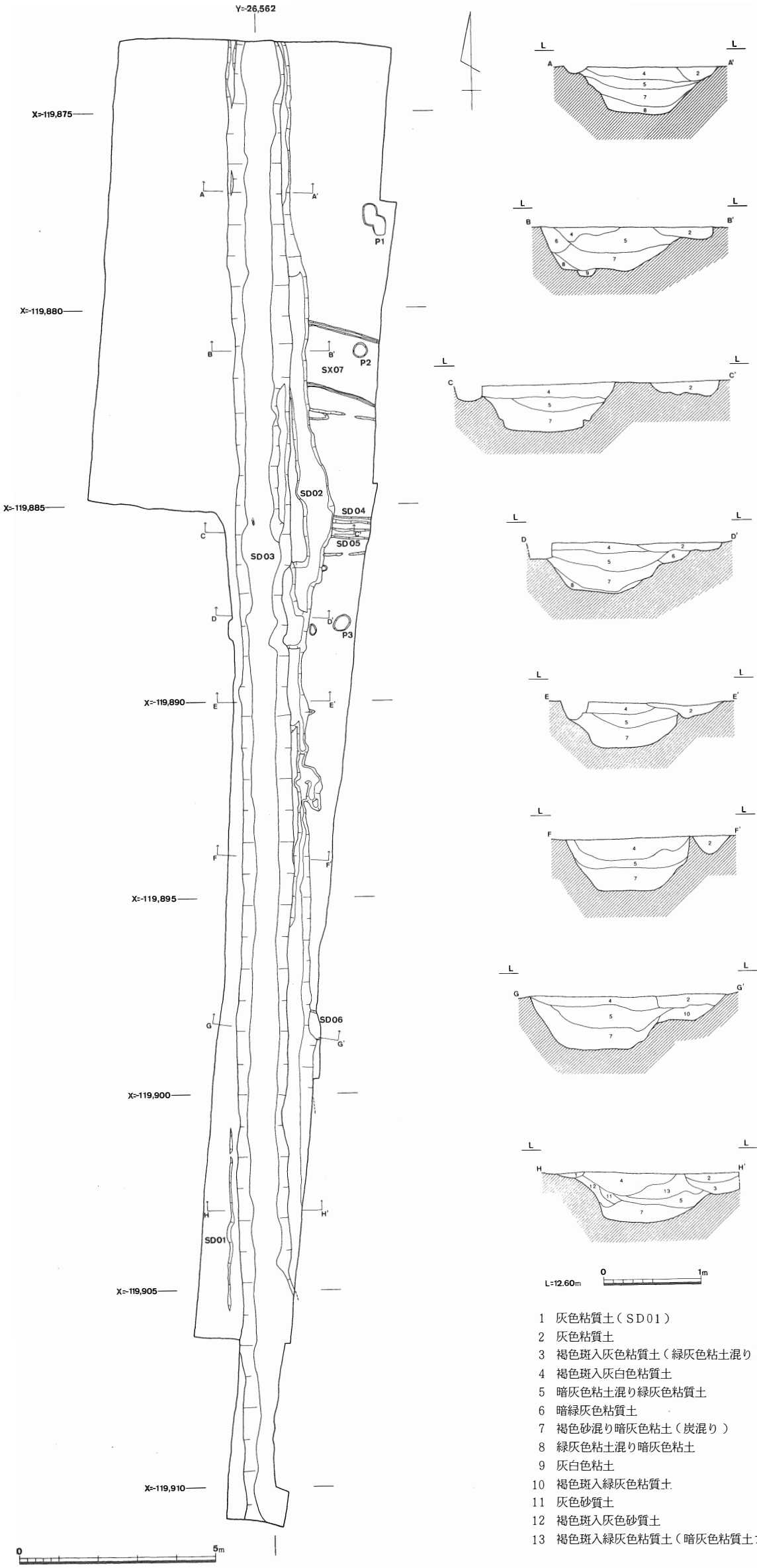
柱穴Ｐ1～Ｐ3　いずれも調査区東端で検出したが柱筋は不明。

４　出　土　遺　物

今回の調査では、溝ＳＤ27503から長岡京期の良好な遺物が出土した。中でも注目されるのは土師器と須恵器の皿や坏に記号や文字を墨書、線刻したものが多いこと、漆の容器として使われた土師器や須恵器、墨痕をとどめる須恵器が多い点である。他に少量であるが、古墳時代の土師器、須恵器、弥生土器の底部片、縄文時代晩期の深鉢片などが出土している。

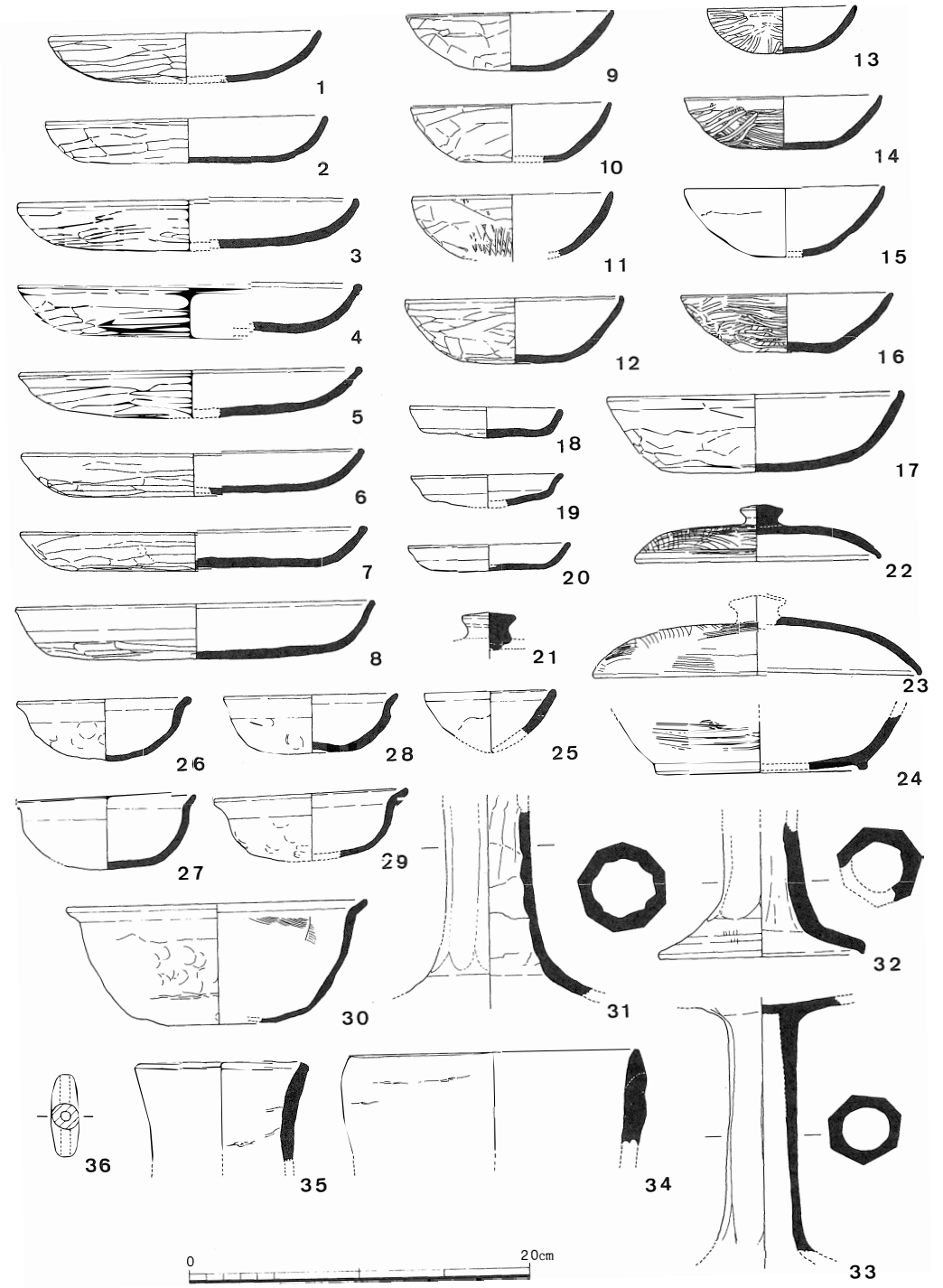
溝ＳＤ27503出土遺物（第18～21図、図版６～15）　土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、土馬、瓦、銅銭、鉄釘、木片、獣骨等が出土した。このうち墨書土器と線刻土器については、別項の付表２・３と第22図で一括して報告する。

土師器には、皿Ａ、皿Ｃ、椀Ａ、椀Ｃ、坏Ａ、坏Ｂ蓋、坏Ｂ、ミニチュア竈のカマコ、壺Ｂ、高坏、製塩土器、土錘、甕が出土している。皿Ａ（１～８）は、口径16cm前後、器高約３cmのもの（１・２）と、口径20cm、器高３cm前後のもの（３～８）がある。調整は、１～７が外面全体をヘラ削りするｃ手法、８は口縁端部を横ナデ、底部をヘラ削りするｂ手法。ｃ手法の皿には端部のナデを削り残すものがある。皿Ｃ（18～20）は口径９cm前後、器高約２cm。調整は、口縁部を横ナデ、底部はオサエ。このうち18は灯火器に使用する。椀Ａ（９～12）は、口径12cm、器高3.5cm前後である。調整は内面をナデ、外面はヘラ削りするｃ手法。椀Ｃ（13～16）は、口径8.6cm、器高2.7cmのもの(13)と、口径12cm、器高3.5cm前後のもの（14～16）がある。いずれも外面には成形時の凹凸をとどめ、粘土紐の痕跡を残す。調整は、内面を時計回りにナデあげており、外面はヘラ磨きを施す。坏Ａ(17)は口径17cm、器高4.5cm。調整は外面全体をヘラ削りするｃ手法であるが、口縁部の一部にナデが残る。坏Ｂ蓋（21～23）は、口径14.2cmの22と、口径19.1cmの23がある。22は、天井部をヘラ削りの後、四分割にヘラ磨きを施す。口縁部は周縁に沿って弧状にヘラ磨きを施す。21はつまみと内面はナデ調整。21はつまみのみ残る。



1　灰色粘質土（ＳＤ０１）
2　灰色粘質土
3　褐色斑入灰色粘質土（緑灰色粘土混り）　}（ＳＤ０２）
4　褐色斑入灰白色粘質土
5　暗灰色粘土混り緑灰色粘質土
6　暗緑灰色粘質土
7　褐色砂混り暗灰色粘土（炭混り）
8　緑灰色粘土混り暗灰色粘土
9　灰白色粘土
10　褐色斑入緑灰色粘質土
11　灰色砂質土
12　褐色斑入灰色砂質土
13　褐色斑入緑灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混）

第17図　長岡京期遺構実測図（平面図１／100、 断面図１／40）

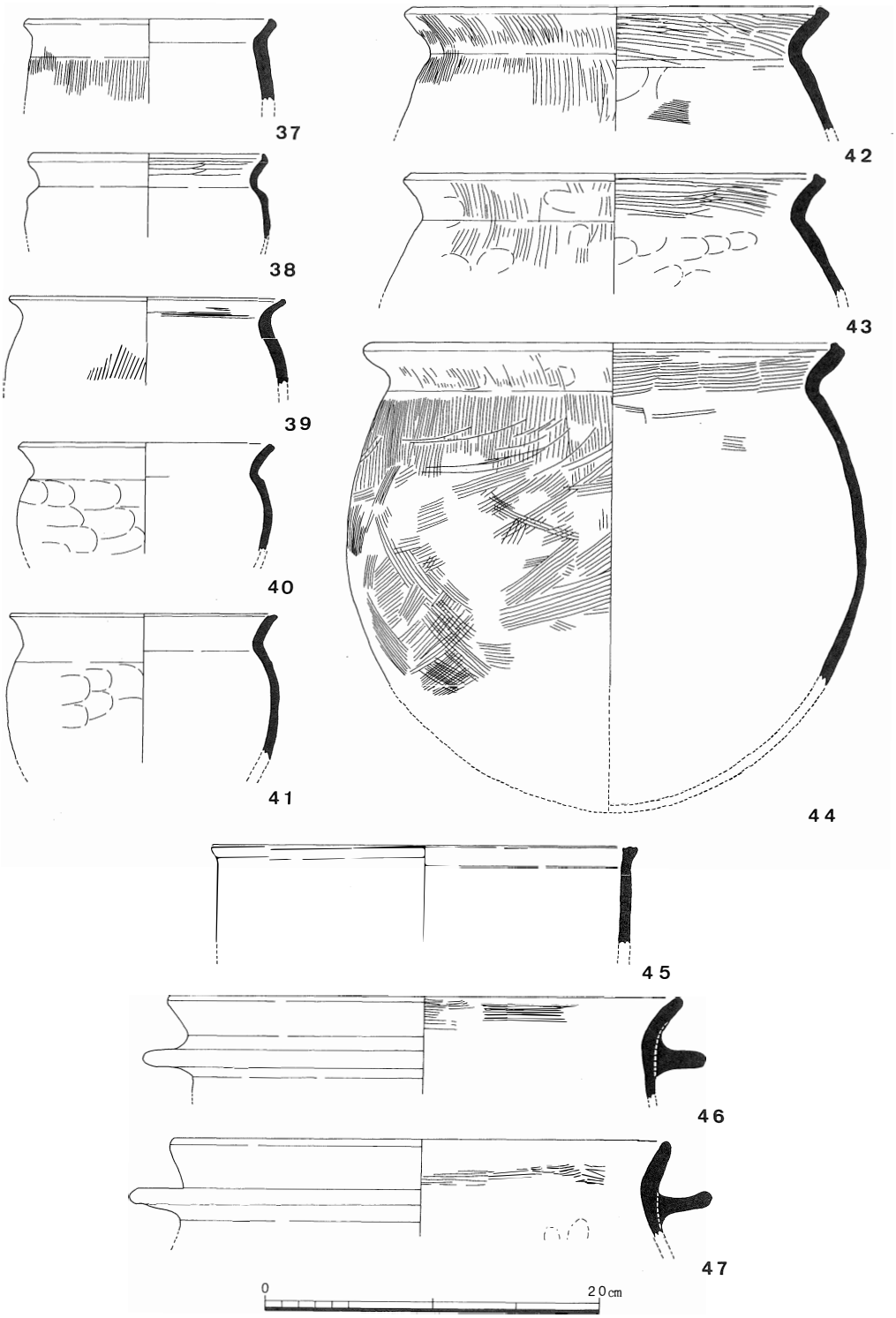


第18図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図１（１／４）

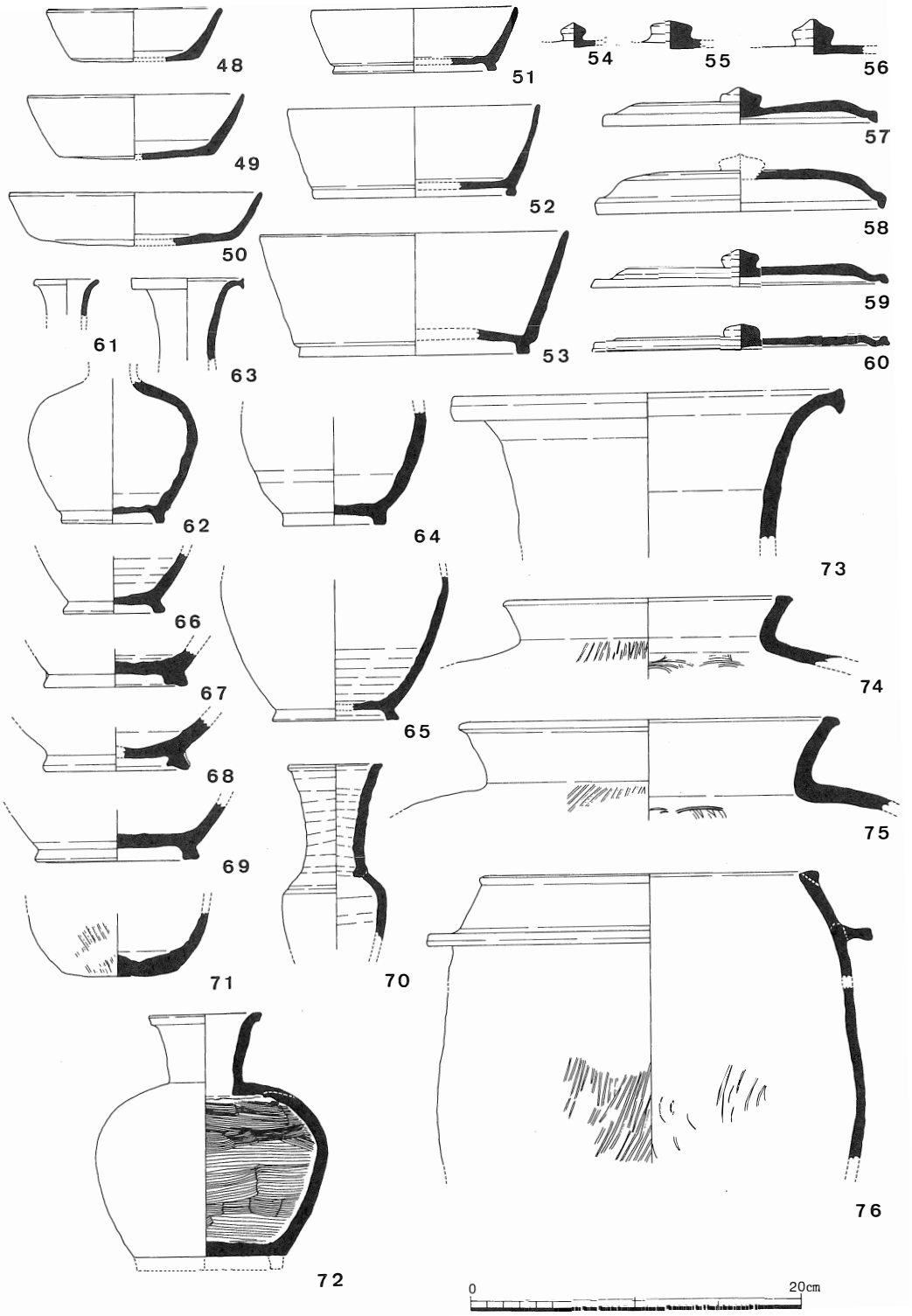
杯B(24)は口縁部外面にヘラ磨きを施す。25はミニチュア竈のカマドと組みになるカマコ。墨書人面土器タイプの壺B（26～30）には、口径10cm、器高4cm前後のもの（26～29）と、口径17.3cm、器高7cmのもの(30)がある。人面の描かれたものはない。高坏（31～33）は、脚部の断面形が9角形のもの(31)と7角形(32・33）のものがある。脚部内面は、31が粘土紐の凹凸が目立つのに対し、32・33は平滑である。坏部外面に線刻を施すものが出土している（第22図64）。製塩土器は小片が多く図示できるものは少ない。いずれも胎土に多くの砂粒を含み、粘土紐の痕を残す。34は厚さ1.0～1.4cm。口縁部はまっすぐに立ち上がる。35は厚さ0.15～0.7cm。口縁部はラッパ状にひらく。内面に布目があるものはわずかである。土錘(36)は1点だけ出土した。長さ4.9cm、直径1.5cm。甕（37～44）は、口径14～16cmのもの（37～41）と、口径25～29cmのもの（42～44）がある。37は直線的にのびる体部と短く外反する口縁部をもつ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整。38は体部外面が火熱で剝離しており調整不明。内面は口縁部に粗いハケメを施す。器壁は甕の中で最も薄い。39は外面ハケメ調整、内面ナデ調整。40・41は外面に指圧痕をとどめるだけの特徴的な甕である。口縁部と内面はナデ調整。41は外面に煤がつく。これらは南河内地方に特有な甕[8]といわれる。42・43は、外面ハケメ調整の後、口縁端部を横ナデする。口縁部内面は、外面と同じ粗いハケメを施す。体部内面は細かいハケメの後ナデ調整を施す。44は竈に再利用している。底部を水平に打ち欠き、口縁部から体部の一個所を焚き口にしている。内面には煤が多量に付着している。45は甑の口縁部と考えられるものである。胎土は淡茶褐色で微砂粒を含む。調整は口縁部と内面に横ナデを施し、体部外面には指圧痕をとどめる。口縁部の上端には2条の浅い沈線がめぐる。外面に煤の付着はみられないが、破片の内面と断面に煤が付くものがある。46・47は、生駒山西麓産の羽釜。47の鍔には煤が付着する。他に生駒山西麓産の竈の破片が出土している。

須恵器には、坏A、坏B、坏B蓋、壺A蓋、壺L、壺M、壺G、甕、羽釜が出土している。

坏類は比較的多く出土している。坏A（48～50）には、口径の差異より3タイプがある。器高は各々3～4cmである。48は口径10.4cm。焼成は軟質。口縁部には灯火による油煙がつく。49は口径13cm。50は口径15.2cm。いずれも焼成は堅緻。坏B（51～53）は、口径14～15cm、器高5cm前後のもの(52)が比較的多い。51は口径12.4cm、器高3.9cm。53は口径18.8cm、器高7.4cm。51は底部を裏返して硯に転用している。いずれも焼成は堅緻。坏B蓋（55～60）は口径17～18cm。57～59は蓋を裏返して硯に転用しており、内面は摺られて滑らかである。54は、壺A蓋をまねたミニチュア土器である。壺（61～72）は、口縁部や底部片が多く全形のわかるものは少ないが、その大半は球形の体部と外反する口縁部を有する壺L（63～69）と、その小型品である壺M（61・62）である。両者の境目は必ずしも明確でないが、壺Mは概ね器高10cm前後のものとした。底部外面は、67が糸切り、他のものはナデ調整。高台は張り付けている。焼成は64を除いていずれも堅緻。64は体部外面の下半をヘラ削りしており、直立した断面方形の高



第19図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図２（１／４）



第20図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図３（１／４）

台がつく。色調は灰白色で、焼成は軟質。これは側溝上層から出土したものである。また68は濃緑色から青みを帯びた釉が垂下しており、高台には石粒が付着する。これは東海地方の製品と考えられる。壺Ｇ(70)の口縁部にはロクロ成形による凹凸が著しい。71は底部と体部外面に平行タタキとナデ調整を施す壺。内面は横ナデ調整。横ナデは反時計回りである。胎土には黒色粒子を多く含む。色調は外面暗灰色、内面青灰色。焼成は堅緻。72は、壺Ｌと似た外形を呈するが、体部下半はより直線的である。平底を呈する底部の外縁には高台を張り付けた痕跡が残る。底部外面はナデ調整。体部内面と底部内面には反時計回りのハケメ調整を施す。他はナデ調整。口頸部と体部の接合は２段構成。胎土は淡灰色を呈し、若干の砂粒を含む。焼成は堅緻。他に同様の形態と手法をもつものは極めて少なく、類例の増加と生産地の検討が待たれる。甕（73～75）は、口頸部が高くのびて外反するもの(73)と、口縁部が短く外反するもの（74・75）がある。74は外面に平行タタキを施す。75は平行タタキのあとナデ調整。いずれも内面は同心円当て具痕をナデ消している。74は、体部外面と口頸部内面に自然釉が付着する。76は鍔を有する羽釜。内傾する口縁部と胴長の体部を有する。体部外面は平行タタキを施しており、内面は同心円当て具痕を丁寧にナデ消している。他の部位は横ナデ調整。口縁部上端の平坦面と鍔、体部外面に煤が付着する。胎土は灰白色を呈し、若干の砂粒を含む。よく焼き締まっておりいわゆる瓦質である。色調は淡灰色。長岡京域では、この他に右京第12次[9]調査と左京第120次[10]調査で出土している。

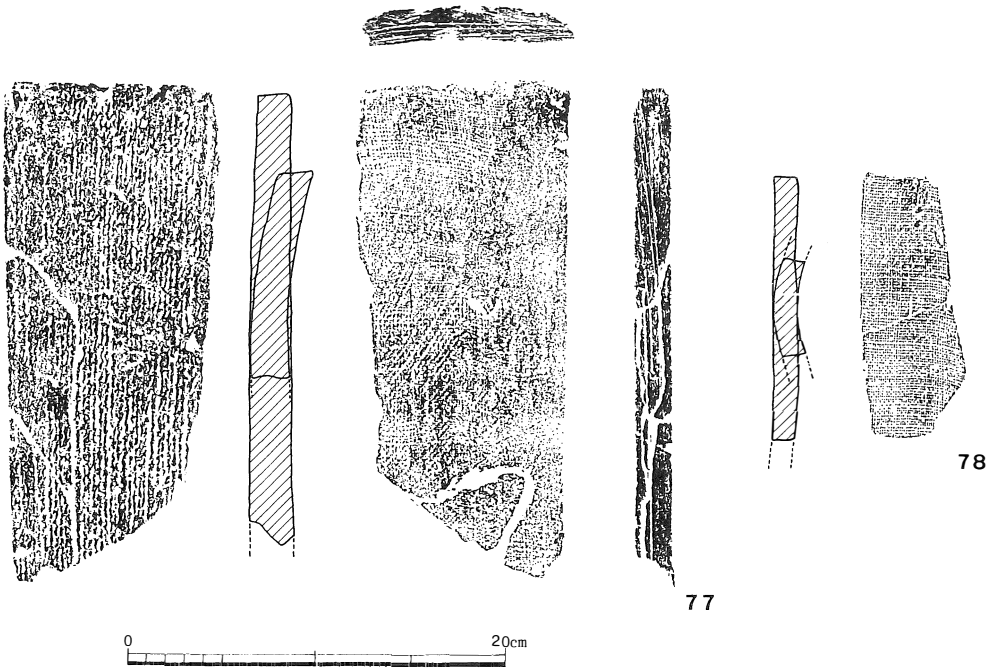
黒色土器は、内面を黒色化するＡ類の埦と坏が出土している。瓦は、平瓦の小片が多い。77は、凸面縄叩き、凹面に布目痕を残し、側面はヘラ削りする。凹面に粘土板切り離しの糸切り痕を残す。胎土は精良で砂粒は少ない。焼成は軟質。色調は、表面灰白色で部分的に黒色。78は、凸面を縄叩きのあとナデ調整。凹面は布目痕を残す。厚さは1.3㎝前後である。胎土は、精良で砂粒は少ない。焼成は硬質。色調は表面が黒色、断面灰白色。

この他、フイゴ羽口の破片（図版７右下）、須恵器坏Ｂの口縁部を打ち欠くもの（図版７左下）、神功開宝４枚・土錘１点、獣骨（図版11－２）、壺の底部内面と外面に墨のあとを残すもの（図版12－２）、土師器皿・埦Ａ・壺Ｂと須恵器坏Ｂの内面に漆の皮膜が付着するもの（図版13－１）、土馬（図版15－２）と、木片、炭、桃の種などが出土している。また土師器の高坏や坏には、表面にスリップを塗り赤色を呈するものがある。

長岡京期以外では、中世の瓦器、古墳時代の土師器甕や須恵器の坏・甕、縄文時代晩期の滋賀里Ⅱ式に比定される深鉢の口縁部（図版11－２）などが出土している。

溝ＳＤ27503出土の墨書土器と線刻土器（第22図、付表２・３、図版８～11）

土師器と須恵器の表面に文様や記号、文字を墨書するものと、記号を線刻するものがあり、墨書と線刻の両方を施すものもわずかにみられる[11]。土師器には皿Ａ、埦Ａ、埦Ｃ、高坏があり、須恵器には坏Ａ、坏Ｂ、坏Ｂ蓋などがある。線刻を施す須恵器は、概して軟質のものに多い。



第21図　溝ＳＤ27503出土遺物実測図４（１／４）

実測図は時間の都合上一部についてのみ示した。本溝出土の墨書土器と線刻土器については付表２のとおりである。なお第22図、付表２と図版８～11の土器番号はそれぞれ対応している。７はＳ字形を組み合わせた流麗な文様。20は「Ｃ」字形と縦棒を２本組み合わせる。88は一部を欠くが、十文字に小さな「口」の字形を四隅に配するものである。この３点については個人の署名を図案化した花押[12]の可能性も考えられる。４は数字の「＋」を墨書したあと、「＃」の字形と「卄」の字形を線刻する。墨書と線刻の両方あるものは合計５点出土しているが、いずれも墨書のあとに線刻を施している。この他、墨書と線刻には卄（１・17・32・68）、卅(71)、卌(87)など、縦棒と横棒の本数で数量の違いを表したものがある。同じように75も、三本線と×印を組み合わせた一連のものであろうか。83は、底部外面に墨書、底部内外面に線刻を施す。墨書と線刻の割合は、土師器では64点のうちほぼ半々、須恵器は32点のうち全体の８割以上が墨書であり、線刻は少ない。墨書と線刻の両方を施すものはわずかである。記載位置は、大半が坏や皿の底部外面に施しており、口縁部の内面と外面にあるものは少数である。標記内容では、墨書と線刻の両方に縦棒と横棒を組み合わせた同形の記号をもつものがあり、この中には４のように異なる記号を後から追加したものもある。また線刻は全形のわかるものは少ないが、「×」や「＋」の中には卄・卅などの記号になるものもあると考えられる。

本溝から出土した土器の量は、破片数では、上層が土師器641、須恵器157である。下層は土師器3231、須恵器571である。これによると、土師器と須恵器の割合はおよそ８対２となる。

付表２　溝ＳＤ27503出土の墨書土器・線刻土器一覧表

器種	No.	墨書	線刻	器形	出土層位	記載位置	備考
土師器	1	++		皿 A	2・3区下層	底部外面	記号　図版8
	2	#×		埦 A	11区下層	底部外面	×は小さく側面に寄る　〃
	3	□〔十カ〕		皿 A	9区下層	底部外面	記号か　〃
	4	□〔十カ〕	廿 ハ	皿 A	9・10区下層	底部外面	墨書のあと線刻　第22図　図版11
	5	□		不明	15区下層	底部外面	図版9
	6	*		皿 A	3区下層	口縁部内面	記号　〃
	7			埦Cカ	15区下層	底部外面	文様、外面ヘラ磨き　第22図　〃
	8	□		皿 A	5区下層	口縁部外面	〃
	9	大		埦Aカ	E－E′下層	底部外面	〃
	10	□		不明	5区下層	底部外面	〃
	11	□		不明	1区下層	底部外面	〃
	12	大		埦Aカ	9区下層	底部外面	〃
	13	□□		不明	5区下層	底部外面	〃
	14	□		不明	5区上層	底部外面	〃
	15	□		高坏	9区下層	坏部外面	外面ヘラ磨き　〃
	16	□		不明	3区下層	底部外面	〃
	17	□〔++カ〕		不明	5区下層	底部外面	記号　〃
	18	□		不明	15区下層	底部外面	〃
	19	□		埦 C	11区下層	底部外面	外面ヘラ磨き　〃
	20			不明	10区下層	底部外面	文様　第22図　〃
	21	□		不明	E－E′下層	底部外面	〃
	22	□		不明	8区下層	底部外面	〃
	23	□		不明	5区下層	底部外面	〃
	24	□		埦 A	8区下層	底部外面	〃
	25	□〔×カ〕		埦 A	5区下層	底部外面	記号か　〃
	26	□		不明	5区下層	底部外面	〃

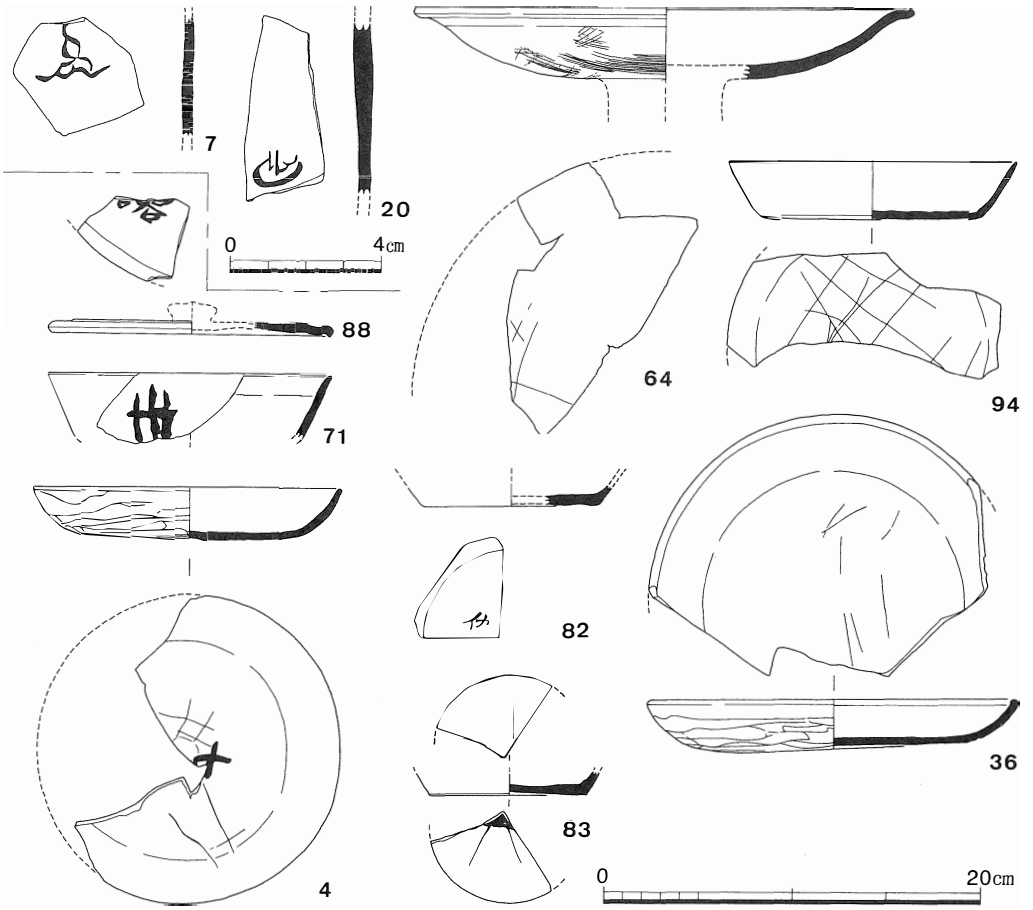
器種	No.	墨書	線刻	器形	出土層位	記載位置	備考
土師器	27	□		不明	4区下層	底部外面	図版9
	28	□		不明	6区下層	外面	〃
	29	□		不明	C－C′下層	外面	〃
	30	□		不明	15区下層	底部外面	〃
	31	×		不明	9区下層	底部内面	記号　〃
	32	□〔ヰヰカ〕		不明	5区下層	底部外面	記号か、墨書のあと線刻　〃
	33	□		不明	12区下層	底部外面	
	34	□		皿A	3区下層	底部外面	
	35		内	皿A	10・11区下層	底部内面	図版11
		東	外			底部外面	墨書のあと線刻
	36			皿A	12区下層	底部内面	第22図
	37		×	皿A	12区	底部外面	
	38		内　外	皿A	13区	底部内外面	
	39			皿A	10・11区下層	底部内外面	灯明に使用　図版11
	40			皿A	4区下層	底部外面	
	41		内	不明	1区下層	底部内面	
		□	外			底部外面	
	42		内　外	不明	4区下層	底部内外面	内面に煤付着
	43			不明	13区下層	底部外面	図版9
	44			不明	11区下層	底部外面	外面ヘラ磨き　〃
	45			不明	10・11区下層	底部外面	〃
	46			皿A	7区下層	底部外面	〃
	47			不明	4区下層	底部外面	〃
	48			高坏	6区下層	坏部外面	外面ヘラ磨き　〃
	49			不明	12区下層	底部外面	〃
	50			不明	8区下層	底部外面	〃
	51			不明	7区下層	底部外面	〃

器種	No.	墨書	線刻	器形	出土層位	記載位置	備考
土師器	52			不明	5区上層	底部外面	図版9
	53			不明	5区下層	底部外面	〃
	54			不明	7区下層	底部外面	〃
	55			不明	7区上層	底部外面	〃
	56			不明	7区下層	底部外面	〃
	57			不明	7区下層	底部外面	〃
	58			皿A	6区下層	底部外面	〃
	59			不明	A－A′下層	底部外面	〃
	60			不明	B－B′下層	底部外面	〃
	61			不明	5区下層	底部外面	〃
	62			不明	2区下層	底部外面	〃
	63		内 外	皿A	15区上層	底部内外面	同じ記号か　〃
	64			高坏	2区下層	坏部外面	第22図
須恵器	65			坏	1区	底部外面	煤付着　図版9
	66			坏	6区下層	底部外面	煤付着　〃
	67	宿		坏B	10区下層	底部外面	図版8
	68	□〔ヰヰカ〕		坏B	15区	底部外面	記号　〃
	69	□		坏B	8区下層	底部外面	記号か　〃
	70			坏A	13区下層	底部外面	〃
	71	ヰヰ		坏	14区	口縁部外面	記号　第22図　図版10
	72	□		坏	10区下層	口縁部外面	記号か　〃
	73	□		坏	2区下層	口縁部外面	〃
	74	□		坏A	10区下層	口縁部外面	記号か　〃
	75	ヰヰヒ		坏B蓋	14区下層	天井部外面	記号、転用硯　〃
	76	□		坏B蓋	精査	天井部外面	内面に墨痕　〃
	77	⊕		不明	精査	外面	記号　〃
	78	□〔積カ〕□		坏	8区下層	底部外面	〃

器種	No.	墨書	線刻	器形	出土層位	記載位置	備考
須恵器	79	□		不明	6区下層	外面	図版10
	80	□〔十ヵ〕		坏B	5区下層	底部外面	内面に墨痕、記号 〃
	81	□		坏B	4区下層	口縁部外面	記号 〃
		□				底部外面	外面に墨痕、記号か
	82	□〔佐ヵ〕		坏A	北拡張区下層	底部外面	第22図 〃
	83	□	内 / 外 \ /	坏A	7区上層	底部内外面	外面墨書のあと線刻 第22図 図版11
	84	大		坏B蓋	8区下層	天井部外面	図版10
	85	□		坏B蓋	10区下層	天井部外面	〃
	86	□		坏B蓋	4区下層	天井部外面	〃
	87	++++		坏B蓋	12区	天井部外面	記号 〃
	88	器		坏B蓋	13区下層	天井部外面	記号 第22図 〃
	89	□		坏B蓋	4区下層	天井部外面	〃
	90	□〔十ヵ〕		坏B蓋	1区	天井部外面	記号、転用硯 〃
	91			坏B蓋	3区下層	天井部外面	記号 〃
	92	□		坏B蓋	15区下層	天井部外面	転用硯 〃
	93	大□		坏B蓋	6区下層	天井部外面	〃
	94			坏A	11区下層	底部外面	外面に煤付着 第22図 図版11
	95	□		坏Aか	9区下層	底部外面	
	96			坏B	1区下層	底部外面	

付表3　墨書土器と線刻土器の比率

	墨書	墨書 線刻	線刻	合計
土師器	32 (50%)	4 (6.3%)	28 (43.7%)	64 (100%)
須恵器	27 (84.4%)	1 (3.1%)	4 (12.5%)	32 (100%)
合計	59 (61.5%)	5 (5.2%)	32 (5.2%)	96 (100%)

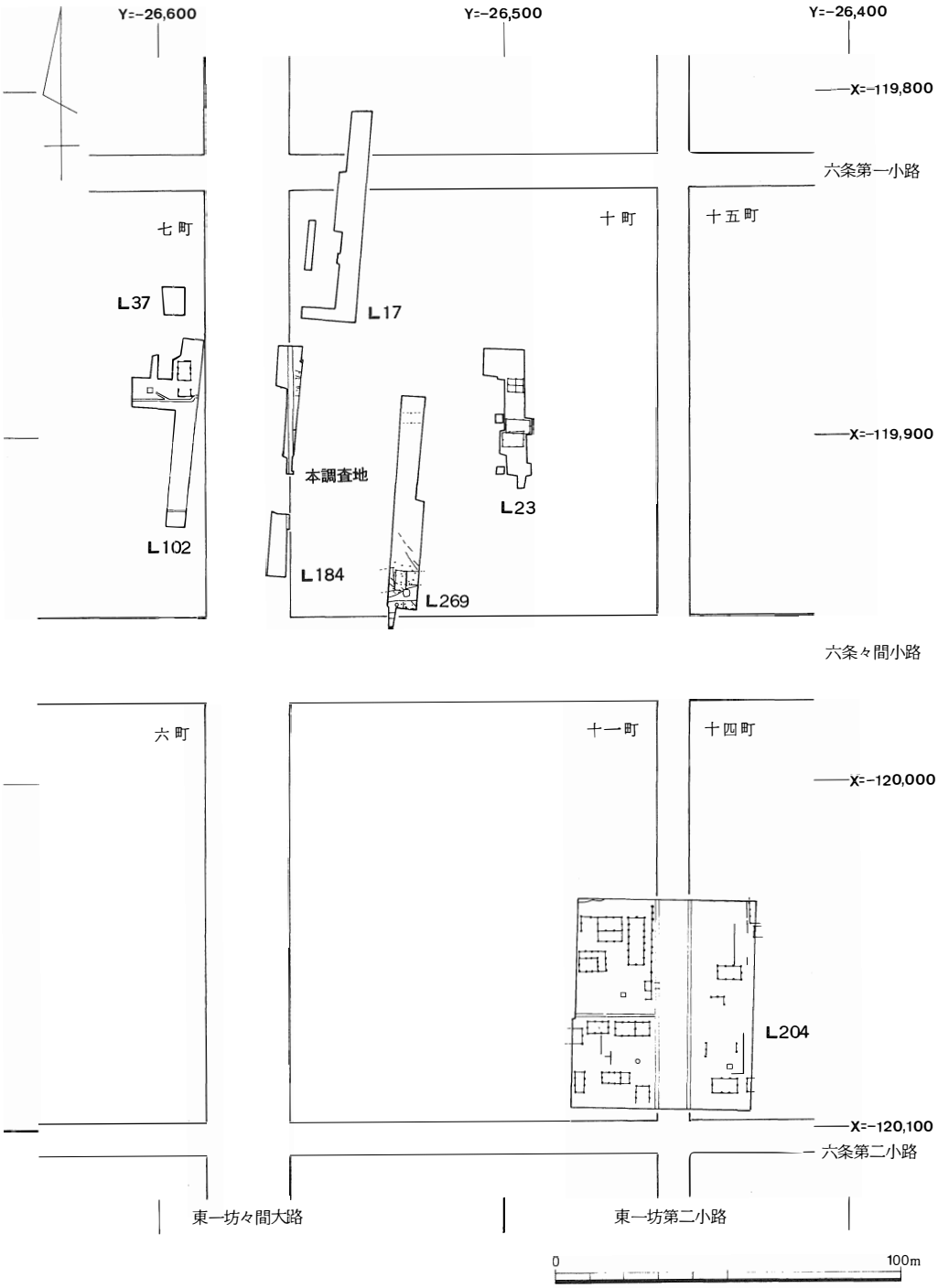


第22図　墨書土器・線刻土器実測図（１／２・１／４）

土師器は、須恵器に比べて壊れやすく破片数が多くなる傾向は否定できないが、総じて土師器が多いといえる。なお、出土層位の地区割はＡ・Ｂ・Ｃライン間を各々２分割して１～６区に、Ｄ・Ｅラインは７・８区、Ｅライン以南からＨラインまでを各々２分割して９～14区に、これより以南を15区とした。

５　ま　と　め

今回の調査では、東一坊々間大路東側溝を南北約38mにわたって確認することができた。東側溝はこれで３例目となる。同西側溝についてはこれまでのところ宮域に接する段丘上の左京第232次調査で検出されただけであるが、両側溝の溝中心座標より求めた東一坊々間大路の路面幅は24.7mである。東一坊々間大路と六条々間小路が交差する六条一坊十町と、その周辺から検出された長岡京の遺構と条坊側溝の位置関係は第23図のとおりである。また、これらの調査地（Ｌ102・Ｌ204・Ｌ269・Ｌ275）で特筆される点は、和同開珎・萬年通宝・神功開宝が合



第23図　左京六条一坊内の条坊検出遺構図（1／2000）

付表４　本調査地周辺の条坊側溝座標値一覧表

東西道路

側　溝　名	調査次数	遺構名	中心座標(X)	標高	報　告　書
六条第一小路　北側溝	○左京第216次	ＳＤ03	−119,818.4	12.8	『府センター概報』第40冊 1990
	右京第344次	ＳＤ01	−119,824.6	23.4	『長センター年報』平成元年度
南側溝	○左京第216次	ＳＤ04	−119,827.7	12.4	『府センター概報』第40冊 1990
	右京第344次	ＳＤ02	−119,833.75	23.4	『長センター年報』平成元年度
六条々間小路　北側溝	左京第210次	ＳＤ33	−119,955.4	9.9	『長センター年報』昭和63年度
	左京第230次	ＳＤ28	−119,954.8	10.2	『長センター年報』平成元年度
	○左京第269次	ＳＤ09	−119,951.9	12.1	長岡京市センター平成３年調査
南側溝	左京第210次	ＳＤ38	−119,979.8	9.9	『長センター年報』昭和63年度
六条第二小路　北側溝	○右京第339次	ＳＤ23	−120,098.15	17.2	『長センター年報』平成元年度
南側溝	左京第53次	ＳＤ01	−120,114.9	9.5	『本市報告書』第14冊 1985
	○右京第339次	ＳＤ10	−120,107.5	17.2	「長センター年報」平成元年度

南北道路

側　溝　名	調査次数	遺構名	中心座標(Y)	標高	報　告　書
東一坊々間大路東側溝	左京第184次	ＳＤ04	−26,562.5	11.8	『本市報告書』第20冊 1988
	左京第228次	ＳＤ54	−26,561.69	14.7	『長センター年報』平成元年度
	○左京第275次	ＳＤ03	−26,562	12.4	本報告
西側溝	○左京第232次	ＳＤ35	−26,586.7	21.3	『向日市報告書』第28集 1990
東一坊第二小路東側溝	左京第155次	ＳＤ22	−26,450.0	16.9	『向日市報告書』第34集(予定)
	左京第176次	ＳＤ35	−26,444.4	13.6	『長センター年報』昭和62年度
	左京第199次	ＳＤ21	−26,444.6	14.7	『長センター年報』昭和63年度
	○左京第204次	ＳＤ07	−26,446.4	11.2	『長センター年報』昭和63年度
	左京第226次	ＳＤ09	−26,443.7	16.8	『府センター概報』第39冊 1990
	左京第252次	ＳＤ50	−26,443.76	16.7	『府センター概報』第43冊 1991
西側溝	左京第176次	ＳＤ33	−26,453.9	13.9	『長センター年報』昭和62年度
	左京第199次	ＳＤ19	−26,453.9	14.8	『長センター年報』昭和63年度
	○左京第204次	ＳＤ14	−26,455.5	11.2	『長センター年報』昭和63年度
	左京第226次	ＳＤ19	−26,452.3	16.8	『府センター概報』第39冊 1990
	左京第252次	ＳＤ51	−26,452.26	17.1	『府センター概報』第43冊 1991

○印は、第23図で使用した座標値。

計70枚余り出土したこと、素文鏡、帯金具、鈴などの銅製品や漆器の合子が出土したこと、墨書土器と線刻土器が多数出土したこと、祭祀遺物が多量に出土したことなどが挙げられる。これは本宅地を占有する居住者の階層を反映するものとして注目される。文献史料によれば左京六条一坊には従六位上石川朝臣吉備人が居住したことが知られる。

なお、本調査地の墨書土器と線刻土器については、財団法人向日市埋蔵文化財センター清水みき氏より多くのご教示を得た。

注１）中尾秀正「左京第184次調査概要」『長岡京市報告書』第20冊 1988年

２）岩崎誠「左京第17次調査概要」『長岡京市報告書』第５冊 1980年

３）岩崎誠「左京第23次調査概要」・「左京第37次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年

４）竹井治雄　長岡京跡発掘調査研究所調査

５）山本輝雄「左京第102次調査概要」『長岡京市センター報告書』第２集 1985年

６）山本輝雄「左京第204次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和63年度 1990年

７）本市センター今年度調査。「左京六条一坊十町の祭祀遺物」『平成３年度速報展展示解説』

８）「古市遺跡群Ⅴ」『羽曳野市埋蔵文化財調査概報』９ 1984年

９）高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報』1979年

10）秋山浩三「左京第120次調査概要」『向日市報告書』第18集 1989年

11）山中章「古代都城の線刻土器・記号墨書土器」『古代文化』12 VOL.41 1989年

12）大平聡「正倉院文書の五つの「絵」－佐伯里足ノート－」『奈良古代史論集』第２集 真陽社 1991年

第３章　長岡京跡右京第385次（7AMSI－11地区）調査概要

――長岡京跡右京六条二坊十一町・開田遺跡――

１　は　じ　め　に

1　本報告は、1991年11月14日～1991年12月19日まで、長岡京市開田四丁目405－４において実施した長岡京跡右京六条二坊十一町・開田遺跡の発掘調査に関するものである。

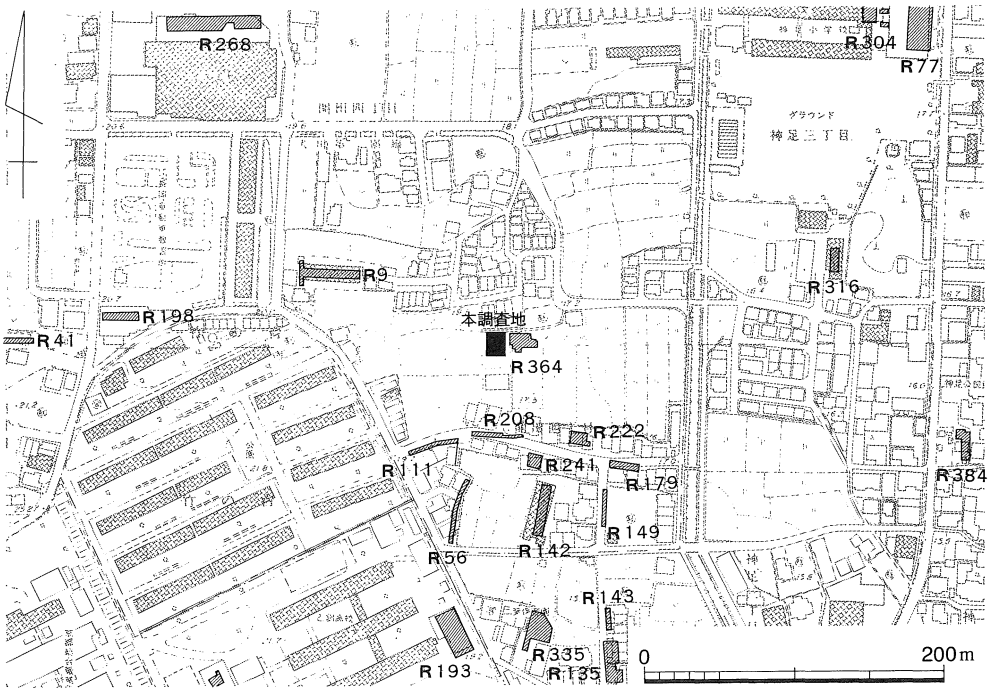
2　本調査は、西二坊々間小路と本調査地の周辺に存在が推定されている長岡京の西市に関する資料を得ることを主な目的として実施したものである。

3　調査は平成３年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、木村泰彦が担当した。また同調査員中島皆夫が常時これを補佐した。

4　調査実施にあたつては、土地所有者の藤井博一氏、および近隣の方々に水道水の供給をはじめ数々のご援助をいただいた。

5　調査後の図面・遺物整理は、花村　潔・久保直子をはじめ多くの方々の協力を得た。

6　本報告の執筆および編集は木村・中島が行った。



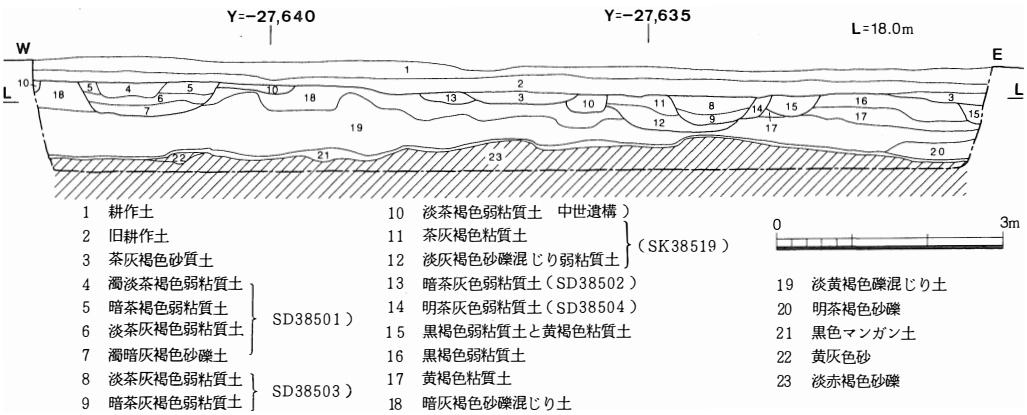
第24図　発掘調査地位置図（１／5000）

2　調　査　経　過

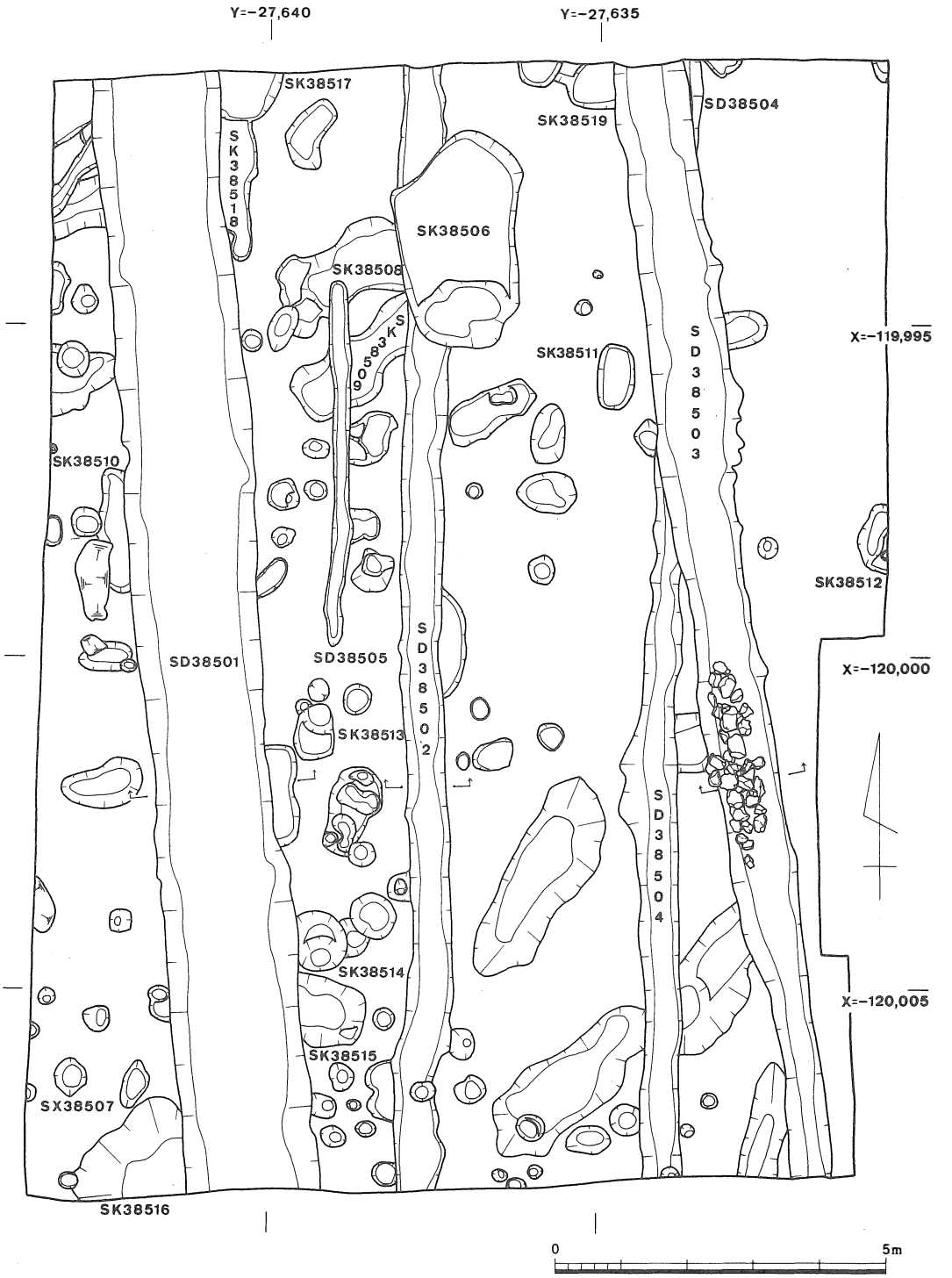
今回の調査地は、阪急長岡天神駅の南東約500mの犬川によって形成された氾濫低地上に位置している。周辺地形は東側を流れる犬川に向かって北西から南東方向に緩やかに傾斜しており、付近での標高は18.5mを測る。当地周辺は以前から長岡京の西市の候補地の一つとして注目されており、長岡京市ではその解明のために国庫補助事業による調査を行うこととし、1990年12月に当調査地のすぐ東側において右京第364次として調査を実施した。[(1)] その結果、長岡京期に関するものとして掘立柱建物、柵列、井戸、土壙、溝などが検出されたが、西市を推定するに足る資料は得られなかった。しかしながら中世の開田遺跡に関する建物などの遺構や14～15世紀の遺物が検出され、多くの成果をあげている。今回の調査地は長岡京の西二坊々間小路が通ることから、西市関係の資料をふくめたその検出と、前回の調査で検出された中世開田遺跡の広がりを確認する目的で実施した。調査は対象地が芋畑として利用されているためその収穫を待って、東西11m、南北13mのトレンチを設定、小型の重機によって耕作土を除去したのち以下を人力によって掘り下げた。その後、遺構の検出に伴って拡張を行い、最終的な調査面積は214㎡であった。調査終了後は再び重機と人力によって埋め戻しを行った。（木村泰彦）

3　検　出　遺　構

調査区の基本層序は、耕作土、旧耕作土下に遺構検出面の灰褐色砂礫土、黄褐色粘質土がある。しかし、調査区東辺で黒褐色弱粘質土、南辺では茶褐色弱粘質土が検出面上に堆積していた。断面観察より、この堆積層が中世の遺構面と考えられるが、面的に捉えることは困難であった。検出面以下は、砂、砂礫など氾濫堆積層が形成されている。ここからは遺構、遺物とも確認されていない。遺構は近世、中世、長岡京期以前のものを検出したが、それぞれの埋土は灰色、茶褐色、黒褐色系に大別できる。



第25図　調査地北壁土層図（1／100）

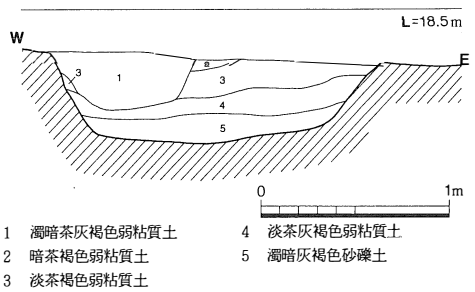


第26図　検出遺構図（１／100）

(1)　中世の遺構

検出した遺構の大半は、この時期に属すと考えられるが、出土遺物などから時期を推定し得るものに限った。なお、南北溝ＳＤ38505は、近世以降の旧耕作面にかかわるものである。

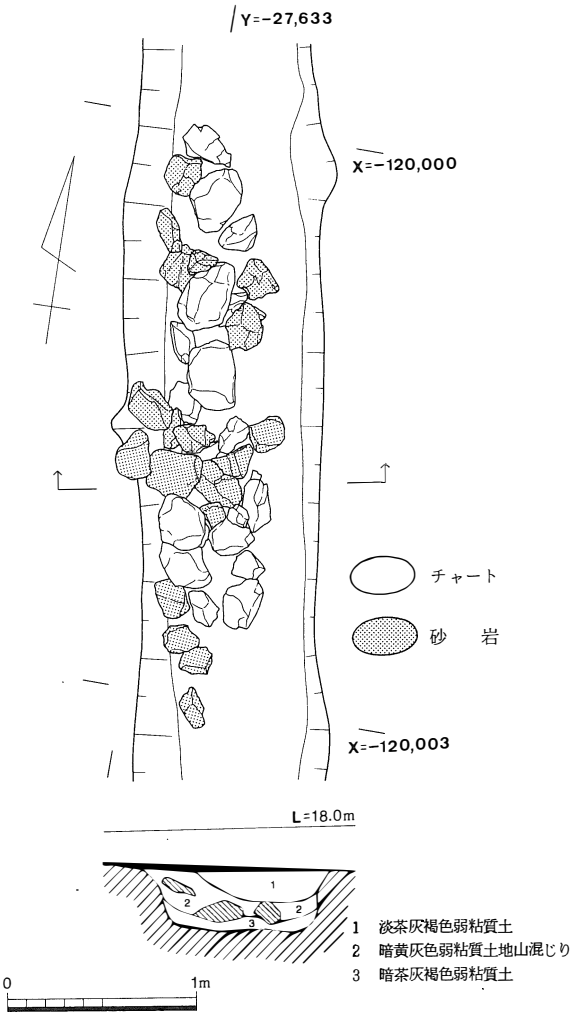
溝ＳＤ38501（第27図）　調査区西半を南北方向に貫く溝である。逆台形に掘られた溝は、幅２ｍ弱、深さ0.45ｍ前後で、底部は南へ緩やかな傾斜を示す。堆積土からは、瓦器など14世紀の遺物に混じって15世紀代のものが出土した。溝の埋没後、幅約１ｍ、深さ約0.2ｍの溝に掘りなおされている。溝主軸は、北で５°西に振る。



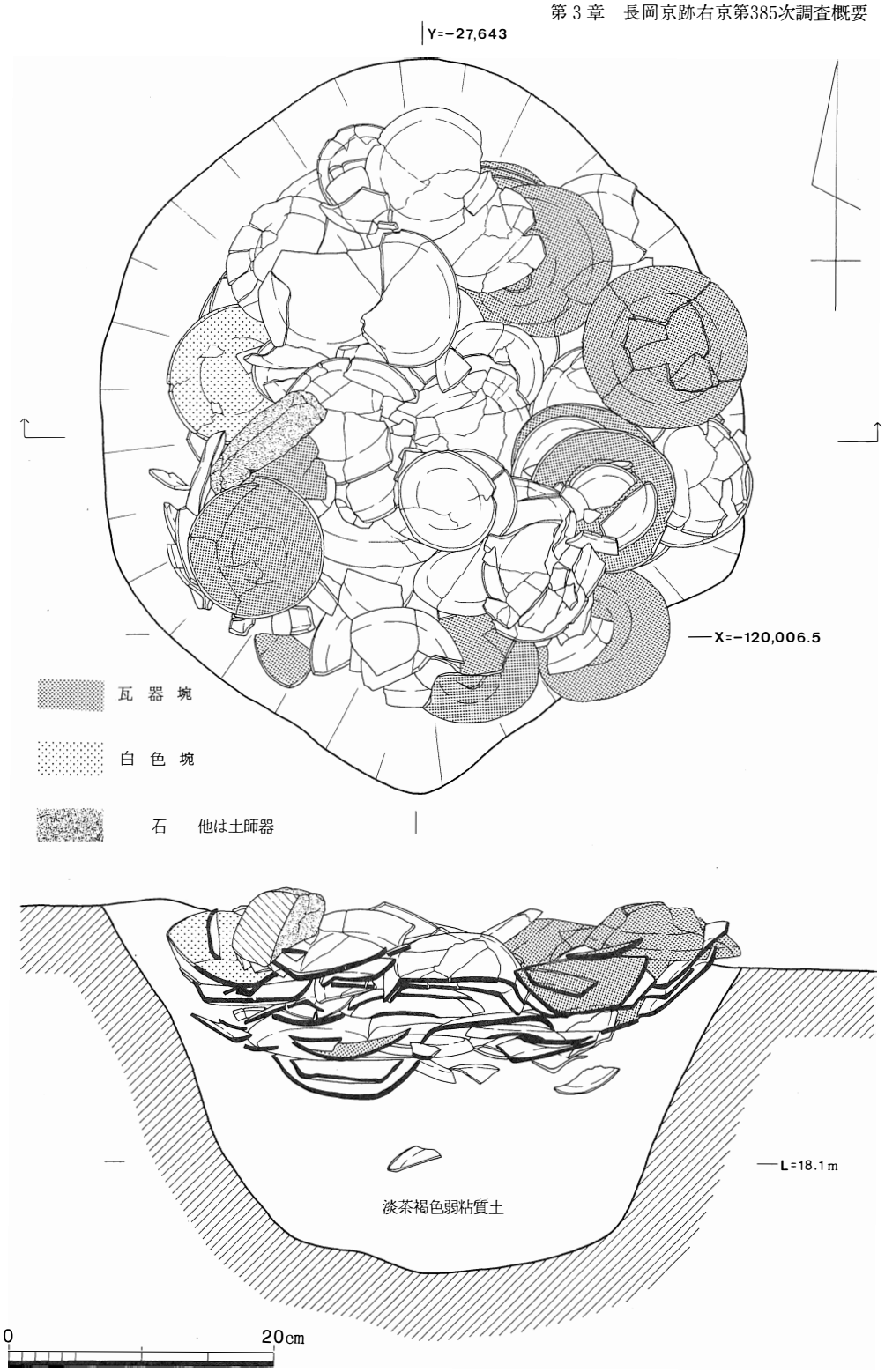
第27図　溝ＳＤ38501土層図（１／40）

溝ＳＤ38503（第28図、図版18－１）　調査区東において、長さ約17ｍ分を検出した南北方向の溝である。検出面で幅0.6～1.3ｍ、深さ0.3ｍ程度の規模をもち、底部はおおむね北から南に向かって緩やかに傾斜している。溝の断面形は一定でなく、調査区の北で逆台形、南ではＶ字に近い形状を示す。溝内の埋土は、粘質土に近いものであり、砂、砂礫は見られない。また、部分的に検出面の黄褐色粘質土が混じっていた。埋土からは、土師器、瓦器、須恵器、白磁、砥石、石硯、鉄釘など14世紀前半の遺物が出土した。特に溝の南部では、土師器皿、瓦器埦などが一括廃棄された状況で出土している。なお、溝は北で約10°西に振る。

溝内には、ほぼ３ｍにわたって、拳大から人頭大の角礫を集積した部分が見られた。石材は、チャート、砂岩である。41個の石材のうち、原位置を保つのは溝の底部西辺に並ぶものだけで、黄褐色粘質土が混じる土層内の石材は人為的な移動と考えられた。これより、集石は溝の西壁にあった構築物を人為的に崩したものと推定できる。しかし、集石と関連する遺構は、一切検出されなかった。



第28図　溝ＳＤ38503集石実測図（１／40）



第29図　土器溜りＳＸ38507遺物出土状況実測図（１／５）

溝ＳＤ38504　溝ＳＤ38503と交錯して検出された真南北方向の溝で、溝ＳＤ38503に切られている。溝は幅約0.5m、深さ0.2m前後の規模をもち、南北とも調査区域外へ続く。遺物は、土師器皿、須恵器甕の破片が出土した。土師器皿の形態は溝ＳＤ38503出土遺物と大差がなく、遺構の時期もこれに近いと考えられる。

土器溜りＳＸ38507（第29図、図版18－２）　調査区の南西隅付近で検出した円形土壙状の土器溜り遺構で、土師器、瓦器が104個体以上出土した。遺構周辺は、検出面上に茶褐色弱粘質土が薄く堆積しており、同層の除去作業中にも土器が多少出土している。円形土壙状を呈する土器溜りは、検出面で南北0.55m、東西0.48m、深さ0.25mの規模をもつ。埋土は淡茶褐色弱粘質土の単層であり、焼土、炭などの混入はなかった。土器は、土壙の上半に集中しており、一括廃棄されたものと考えられる。完形品が多いが接合できない破片も多く含んでいた。出土土器の内訳は、土師器の皿が90個体以上、椀２個体、瓦器椀12個体で、いずれも14世紀前半の特徴を持っている。長さ10㎝程度の砂岩が出土したが、これは廃棄時の混入と考えられる。

土器溜りＳＸ38507は、土器廃棄用の土壙と考えられる。壙内および周辺に焼土が見られず、また、上下に離れた破片が接合する出土状況など、ここで何らかの祭祀が行われたとするのは難しい。但し、大量の食器を使用した行為を祭祀に求めることは可能であろう。

土壙ＳＫ38506　調査区の北中央部で検出した不整形な土壙である。南北3.3m、東西1.8m、深さ0.2mほどの規模をもつ。瓦器羽釜が、長岡京期の遺物と共に出土している。

土壙ＳＫ38513　溝ＳＤ38505の南で検出した平面が方形に近い土壙。長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.6m程度を測る。出土遺物は、土師器片数点である。

土壙ＳＫ38514　調査区の南西部より検出した。直径約１m、深さ0.5m前後の柱穴状を呈する土壙で、溝ＳＤ38501に切られている。出土遺物には、土師器、須恵器、瓦器などがある。

土壙ＳＫ38515　土壙ＳＫ38514の南で検出した土壙。溝ＳＤ38501に切られていたため、全形は不明だが、深さ0.2m程度を測る。埋土中より土師器皿・椀、瓦器椀、東播系須恵器甕が出土した。いずれも14世紀前半の特徴を有するものである。

土壙ＳＫ38516　土器溜りＳＸ38507の南東で検出した不整形な土壙。南および東へ続くと考えられるが、確認することはできなかった。調査区内の最大幅は1.8m、深さは0.3m程度である。遺物は、土師器皿、瓦器椀・堝、須恵器甕などの破片が出土した。このうち土師器皿、瓦器椀は、14世紀代に属するものである。

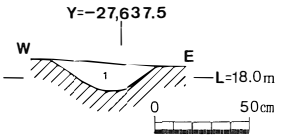
土壙ＳＫ38517　調査区北辺西で検出した深さ0.1m前後の土壙で、溝ＳＤ38501によって切られている。遺物は出土していないが、切り合い関係、埋土より中世期の遺構と考えられる。

土壙ＳＫ38519　調査区北辺の東より検出した土壙で、規模は幅1.6m、深さ0.3m程度と推定される。溝ＳＤ38503によって、その東半が壊されていた。遺物は土壙底から鉄刀一振りと、他に瓦器羽釜・堝が比較的多く出土した。埋土は茶褐色を呈する。

(2)　長岡京期の遺構

調査区では、長岡京期の遺物が散見されたが、当該期の確実な遺構はなかった。最も可能性が高いものは、真南北方向を指し、黒褐色土の埋土を持つ溝ＳＤ38502である。

溝ＳＤ38502(第30図)　調査区の中央部を南北に貫く素掘り溝で、長さ約16.5mにわたって検出した。幅0.7m、深さ0.1mほどの規模を持ち、底部は北から南へ緩やかに傾斜している。遺物は、土師器、須恵器片が少量出土した。他の調査地における座標値(付表５)より、西二坊々間小路西側溝と考えられる。



1　濁淡茶灰色弱粘質土

第30図　溝SD38502土層図(1/40)

(3)　奈良時代以前の遺構

長岡京期と同様に、確実な遺構は少なかった。遺構の時期決定は、土壙ＳＫ38510・ＳＫ38518を除き、遺構埋土、溝ＳＤ38502との切り合い関係、遺構の位置に拠らざるをえなかった。

土壙ＳＫ38510　調査地西辺の中央部で検出した土壙で、深さ0.1m前後を測る。壙内からは、奈良時代の土師器甕などが出土している。

土壙ＳＫ38518　溝ＳＤ38501と土壙ＳＫ38517に切られた南北に長い不整形の土壙で、深さは南で0.1m、北で0.2mを測る。壙内からは、奈良時代後期の土器が比較的まとまって出土している。土師器の食器類が大半を占め、須恵器は坏Ａ１点と甕の体部片のみである。

土壙ＳＫ38508　土壙ＳＫ38506の西で検出した土壙で、土壙ＳＫ38506、溝ＳＤ38502に切られている。幅は１m前後、深さ約0.3mである。出土遺物は、土師器片１点であった。

土壙ＳＫ38509　土壙ＳＫ38508の南で検出した不整形な土壙。全形は解らないが、幅は１m前後、深さ約0.3mである。溝ＳＤ38502に切られていた。

土壙ＳＫ38511　土壙ＳＫ38506の南東で検出した。長辺約１m、短辺約0.5m、深さ0.1m前後の土壙である。須恵器が出土したが、路面にあたるため奈良時代以前と考えた。

土壙ＳＫ38512　調査区東辺の中央部で検出した土壙で、深さ0.2m前後を測る。遺物には、長岡京期以前の土師器埦・坏Ｂ蓋・甕・古墳時代の須恵器坏蓋の小片がある。西二坊々間小路の路面上にあたるため、遺構の時期は奈良時代と考えられる。　(中島　皆夫)

付表５　西二坊々間小路側溝座標表

調査次数	遺構番号	平面直角座標（第Ⅵ座標系）		標　高	備　考
		Ｙ　座　標	Ｘ　座　標		
本　調　査	ＳＤ38502	Ｙ＝−27,637.7	Ｘ＝−120,000.0	17.9m	西側溝
右京194次	ＳＤ19402 ＳＤ19404	Ｙ＝−27,636.1 Ｙ＝−27,627.4	Ｘ＝−119,704.0 Ｘ＝−119,704.0	17.1m 17.5m	西側溝　(2) 東側溝
右京208次	ＳＤ20809	Ｙ＝−27,637.5	Ｘ＝−120,063.0	16.3m	西側溝　(3)

4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で30箱程度であり、その大半は14世紀前半の土器類で占められている。他は溝ＳＤ38501に伴う15世紀の遺物と土壙ＳＫ38518の奈良時代後半の遺物があり、土器以外では石硯・砥石などの石製品、釘・刀などの鉄製品があるが数は少ない。

遺構別では溝ＳＤ38503が10箱と最も多く、次いで溝ＳＤ38501が７箱、土器溜りＳＸ38507６箱、土壙ＳＫ38519が２箱、その他の遺構となる。現在整理段階にあるためすべてを報告できないが、ある程度整理できたものあるいは図示し得たものについて時期別・遺構別に述べていく。なお、周辺においては今後も調査を継続して行く予定であるので、今回報告できなかったものについては、それらと合わせ機会を改めて報告することとしたい。

(1)　中世の遺物

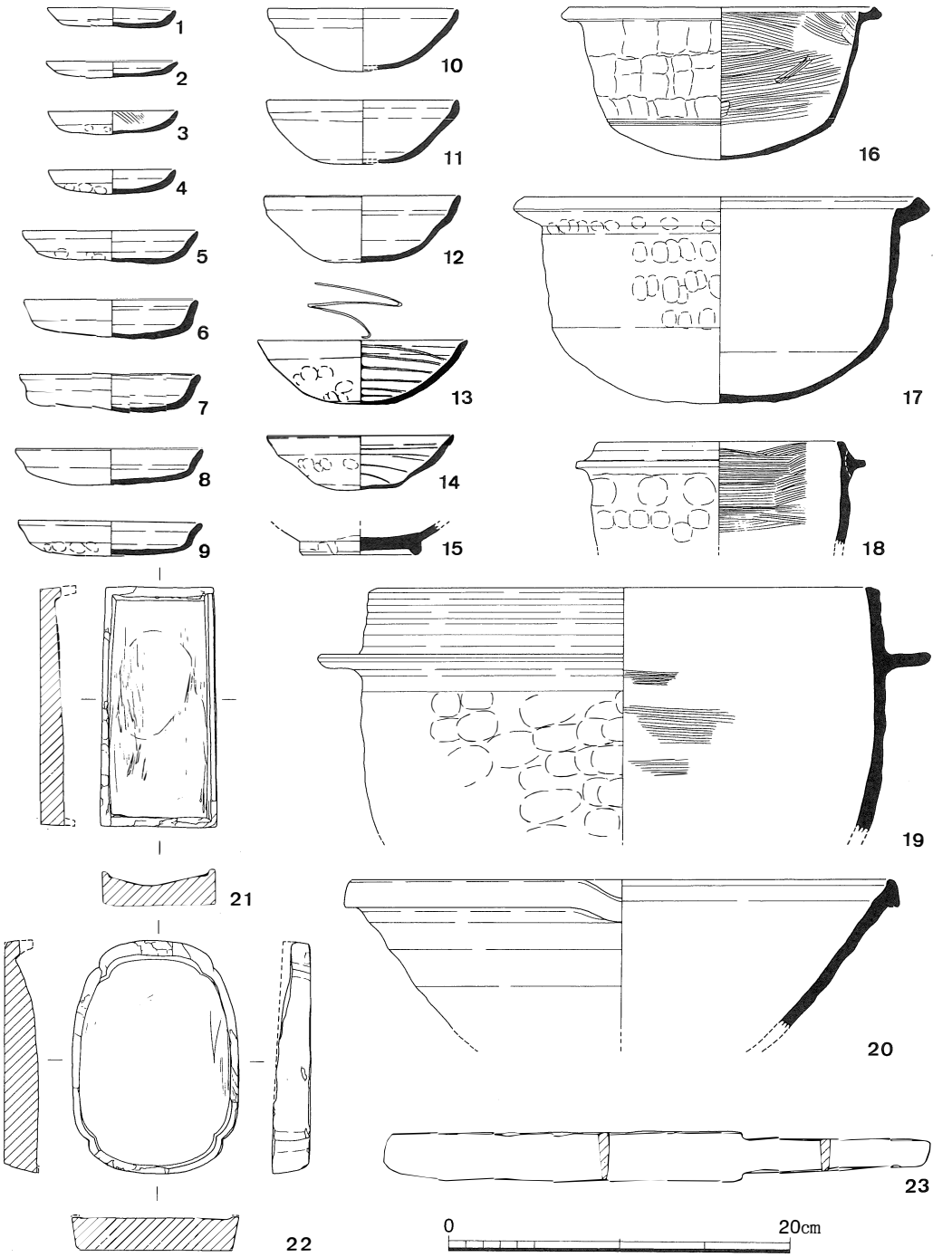
溝ＳＤ38501出土遺物　15世紀後半代の遺物が出土しており、前述のごとく整理箱に７箱の出土量がある。しかしながら、その大半は14世紀前半と奈良時代後半～長岡京期の混入した遺物で占められており、遺構の時期を示す遺物自体は多いものではない。現在確認しているものとしては、土師器皿、瓦器火鉢・風炉、常滑焼甕、備前焼鉢、信楽焼鉢、青磁碗、白磁碗、石硯などがある。

溝ＳＤ38503出土遺物（第31図－１～22、図版19－２）　今回の調査区内で最も多くの遺物が出土した。遺物は特に南側に集中しており、また比較的遺存状態の良好なものが多い。瓦器埦などの特徴から14世紀前半に比定できるものである。土師器皿・埦、瓦器埦・羽釜・鍋、東播系須恵器鉢・甕、砥石、石硯、鉄釘などが確認されている。

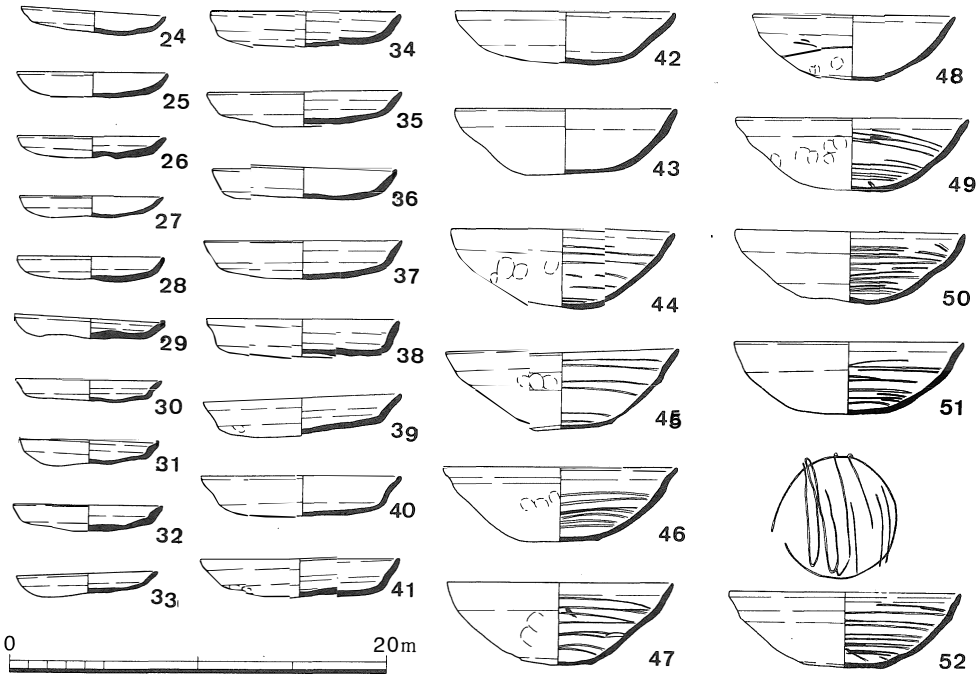
土師器皿には口径7.5cm前後、器高1.5cm前後の皿Ⅰ（１～４）と、口径10cm前後、器高２cm前後の皿Ⅱ（５～９）の２種類がある。皿Ⅰでは器高0.9cmと浅いもの(２)も見られる。３には内面にハケメが施されており、図示していないが皿Ⅱの小片でもハケメを有するものが１点ある。また灯火器として使用された痕をもつものが、皿Ⅰ・Ⅱともに確認される。なお今回の調査では、いわゆる「ヘソ皿」は確認されていない。

土師器埦（10～12）は口径11cm前後、器高3.8cm前後を測る。内面と口縁部内外面をナデ仕上げし、他は不調整である。口縁端部は二段ナデしており内湾気味に丸く収める。胎土は赤色斑粒を含む緻密なもので、いわゆる白色埦の形態を模したものかと思われる。

瓦器埦（13・14）は終末期の特徴をもつもので、橋本久和氏の編年ではⅡｂ４期にあたる。[(4)] 口径12cm前後、器高４cm前後を測り、いずれも粘土紐をすり付けた形骸化した高台を有する。断面がかろうじて三角形を呈するのものとほとんどナデのみのもの（13・14）がある。ヘラミガキは外面には見られず、内面に粗い圏線状、見込みには鋸歯状のものを施している。14はすり付けた高台が見られるが、形態・法量から新しい要素をもつと見られるものである。



第31図　溝ＳＤ38503・土壙ＳＫ38519出土遺物実測図（１／４）
溝ＳＤ38503（１～22）　土壙ＳＫ38519（23）



第32図　土器溜りＳＸ38507出土遺物実測図（１／４）

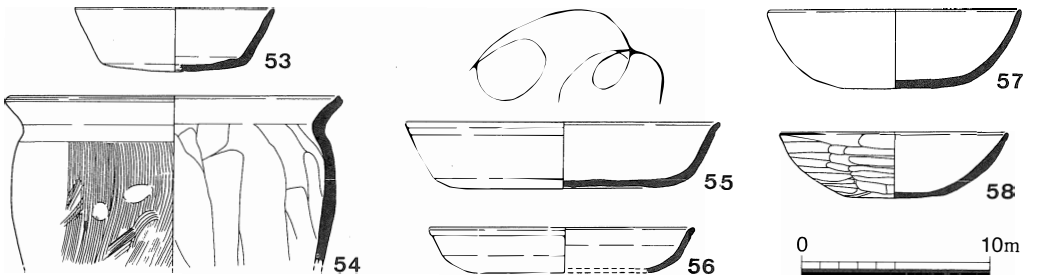
白磁皿(15)は高台のみの破片で、口縁端部が口禿になった大きく外反するものと見られる。[5] 高台は削り出しで基本的に釉は施されていない。見込みには凹線を廻らせる。

瓦器鍋（16・17）は受口状を呈する口縁部をもち、外面黒色化し内面は素地のままである。底部は平滑であるが体部外面には大きく圧痕を残している。また外面には厚く煤が付着する。口径17.8cm、器高8.9cmの小型のもの(16)と口径24.4cm、器高12cmのもの(17)がある。

瓦器羽釜（18・19）は３種類が確認される。18は断面台形の鍔を持ち、口縁部は内傾するもので、口径13.7cmを測る。外面のみ黒色化し、内面は素地のままである。19は口径28cmを測る大型品で口縁部は直立し、２条の凹線をもつ。内面は横方向のハケメを施し、黒色化されていない。鍔は幅約2.5cmで、鍔より下には煤が付着する。他に三足羽釜の破片が１点ある。

須恵器鉢(20)はいわゆる東播系のもので、口径31.6cmを測る。内面は著しく摩滅しており、長期間の使用が看取される。図示した他に糸切り痕をもつ底部片がある。

石硯（21・22）２種類の硯が重なって出土した。21は台形硯で硯頭幅6.3cm、硯尻6.8cm、長さ14cm、高さ2.15cmを測る。中央部は使用による大きな凹みがあり、縁帯は欠失が目立つ。側面はわずかに傾斜しており、底部は平坦である。陸部には深い傷が見られ、砥石に利用されたと見られる。水野和雄氏の分類による台形硯ＩＡｃにあたる。[6] 22は四隅を入角にしたいわゆる四葉硯で、側面が傾斜し底部が平坦なものである。水野氏の楕円硯IIＡｃにあたる。最大幅9.8cm、長さ13.6cmで、縁帯は徐々に傾斜しており、硯尻で高さ2.2cm、硯頭で1.7cmを測る。



第33図　土壙ＳＫ38518出土遺物実測図（１／４）

土壙ＳＫ38506出土遺物　羽釜の小片が１点出土している以外は８世紀後半～長岡京期の遺物が混入しており、須恵器の坏Ｂ・甕、土師器の小片、丸瓦片がある。この遺構は長岡京期の条坊側溝と見られる溝ＳＤ38502を切っており、その遺物が一部含まれる可能性がある。

土器溜りＳＸ38507出土遺物（第32図－24～52、図版20）　出土した遺物はすべて供膳形態であり、瓦器埦、土師器皿・埦で占められる。土器の特徴は溝ＳＤ38503と同様であるが、器種が限定される点と、いわゆる白色埦を含む点が異なる。検出遺構でも述べたごとく、ほぼ完形に復元できたもの以外にも接合できない破片を多く含むが、口縁部が１／２以上残存するもので、瓦器埦12個体、土師器皿Ⅰ48個体以上、皿Ⅱ42個体以上、埦２個体を確認している。

土師器皿（24～41）溝ＳＤ38503と同様に口径7.5cm前後、器高1.5cm前後の皿Ⅰ（24～33）と、口径10cm前後、器高２cm前後の皿Ⅱ（34～41）の２種類がある。皿Ⅱには緩やかに内湾するもの（34～37）と、口縁部のヨコナデがきつく外反気味のもの（38～41）がある。皿Ⅰにも同様のことが言えるようであるが、同一個体でも両者の特徴を有するものもあり、大まかな傾向として捉えておきたい。なお前述のごとく皿Ⅰ・Ⅱ合わせて90個体以上あるが、溝ＳＤ38503出土遺物とは異なり灯火器として使用されたものは見られない。

土師器埦（42・43）２個体のうち42はいわゆる白色埦で、口径11.5cm、器高2.9cmを測る。内面および口縁端部をヨコナデするが、内外面ともに剝離が多く、調整は不明な点が多い。破片も含め白色埦はこれだけである。43は口径11.4cm、器高3.5cmのもので溝ＳＤ38503出土のものと同一である。ただし口縁部の二段ナデは顕著ではない。これも１個体のみである。

瓦器埦（44～52）は口径12cm前後、器高４cm前後を測り、内面に粗い圏線状、見込みには鋸歯状のヘラミガキを施している。高台は粘土をすり付けただけの形骸化したもので、断面三角形を呈するもの（45～48・52）と、ほとんどナデのみのもの（44・49～51）が見られる。また溝ＳＤ38503でも確認された、口径10cm、器高3.5cmの小型品(48)も１点出土している。

土壙ＳＫ38519出土遺物（第31図－23、図版19－１）　図示した鉄刀(23)のほかに瓦器の羽釜・鍋が多く出土しているのが特徴である。鉄刀は土壙の底部付近で検出されたもので、切っ先を欠失する。現存する長さ32.1cm、幅3.0cmを測る。

(2)　長岡京期の遺物

溝ＳＤ38502出土遺物　検出遺構でも述べたごとく、須恵器の体部片と土師器の小片しか出土していないが、座標値から長岡京期と推定したものである。ただし土壙ＳＫ38506出土の須恵器坏Ｂなどが当遺構のものである可能性があることは前述した。また溝ＳＤ38501から比較的多くの長岡京期の遺物が出土しており、付近に当該期の遺構の存在が推定される。

(3)　奈良時代の遺物

土壙ＳＫ38518出土遺物（第33図－53～58）　土師器の坏・皿・埦・甕、須恵器の坏Ａ・甕などが出土しているが数は少ない。特に須恵器は図示した坏Ａ(53)以外は甕体部片が２～３点あるのみで土師器がほとんどである。土師器の特徴などから平城宮Ⅴ期にあたるものである。甕(54)は内面を縦方向にヘラケズリする乙訓では珍しいタイプで、他にもう１個体ある。坏には口径16.6㎝、器高3.5㎝、口縁部ヨコナデで底部は不調整の坏Ａ(55)と、口径14㎝の坏Ｃ(56)がある。55は底部内面にらせん状暗文を施す。埦Ａのうち57は金属器の形態を良く残すが表面は剝離のため調整は看取できない。58は外面全体をヘラケズリするものである。（木村泰彦）

5　ま　と　め

本調査ではほぼ当初の目的どおり長岡京と中世開田遺跡に関する資料を得ることができた。

長岡京期では西二坊々間小路の西側溝を検出している。残念ながら遺物が少なく、西市に直接結びつく資料は得られなかったが、条坊の施行が当地に及んでいることが明確となり、また他の遺構より出土した遺物から、小路西側の右京六条二坊十一町域にも遺構の存在が推定された。

中世開田遺跡のうち14世紀前半の遺構は溝・土壙が中心で、東側で行った右京第364次調査で多くのピットが検出されたのとは様相を異にする。このことは建物群がこれ以上西側に広がらず、溝ＳＤ38503は集落の西側を限る溝あるいは道路の側溝と推定される。15世紀代になるとさらに西に溝ＳＤ38501が造られるが、集落の何らかの変化を示すものであろうか。中世開田遺跡は14世紀前半を中心とする時期と15世紀後半から16世紀前半にかけての２時期のまとまりが指摘されており[7]、今回の成果は集落の変遷を知る重要な手がかりといえよう。(木村泰彦)

注１）　中島皆夫「右京第364次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊 1991年

２）　黒坪一樹「長岡京跡右京第194次調査概要」『京都府センター概報』第19冊 1986年

３）　小田桐　淳「右京第208次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年

４）　橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報』昭和63・平成元年度 1991年

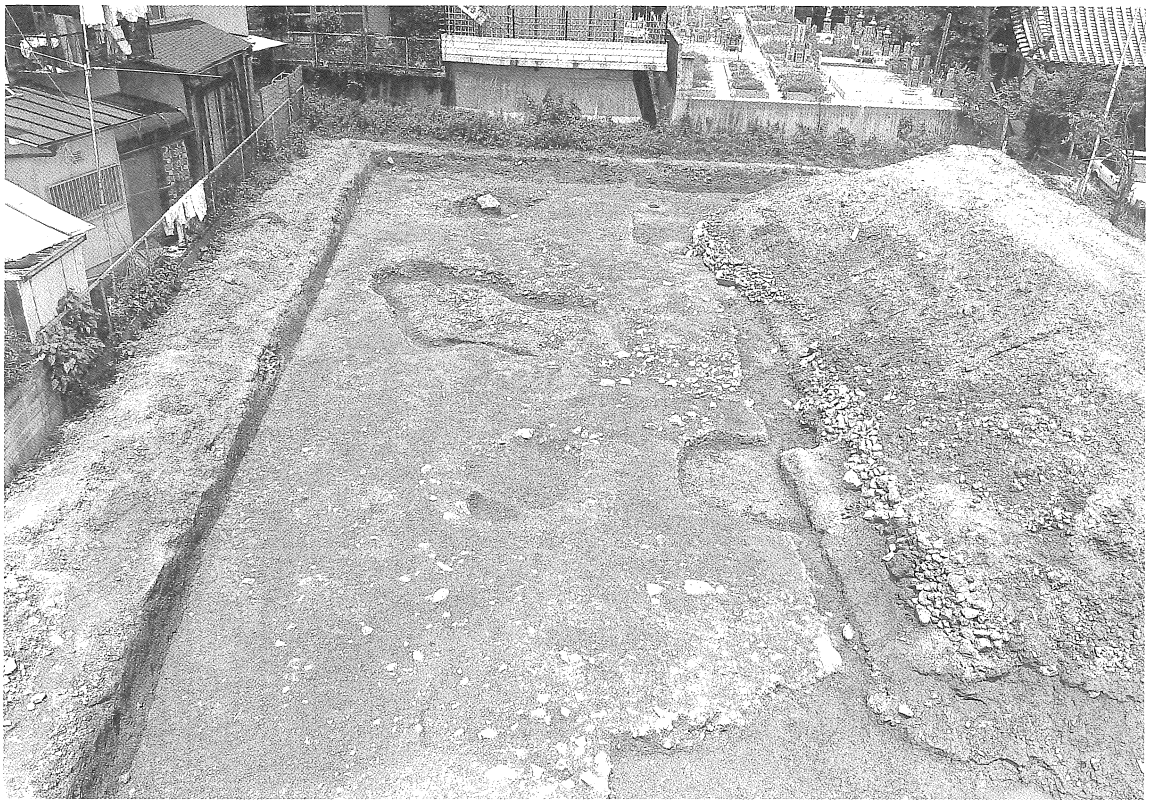
５）　原　秀樹「右京第222次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年

６）　水野和雄「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第70巻第４号 1985年

７）　原　秀樹「鎌倉・室町・桃山時代」『長岡京市史』資料編一 1991年

図　版

1　調査地全景（東半部、南から）



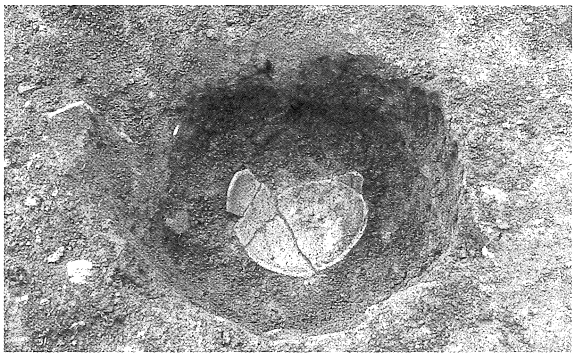
2　調査地全景（西半部、南から）

1　西側試掘トレンチ（東から）

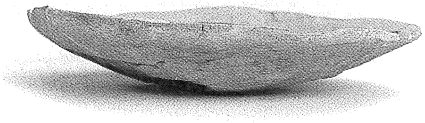
2　調査地東側遠景（西から）

3　ＳＸ08検出状況（東から）

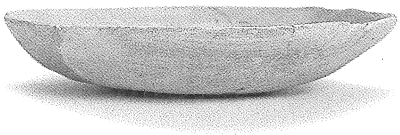
4　ＳＸ07高坏出土状況



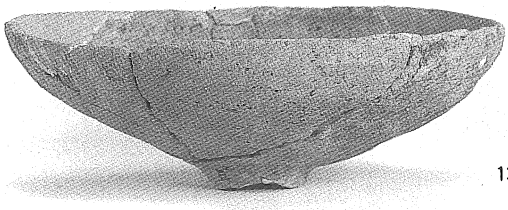
5　Ｐ６高坏出土状況



1



2



13

14

12

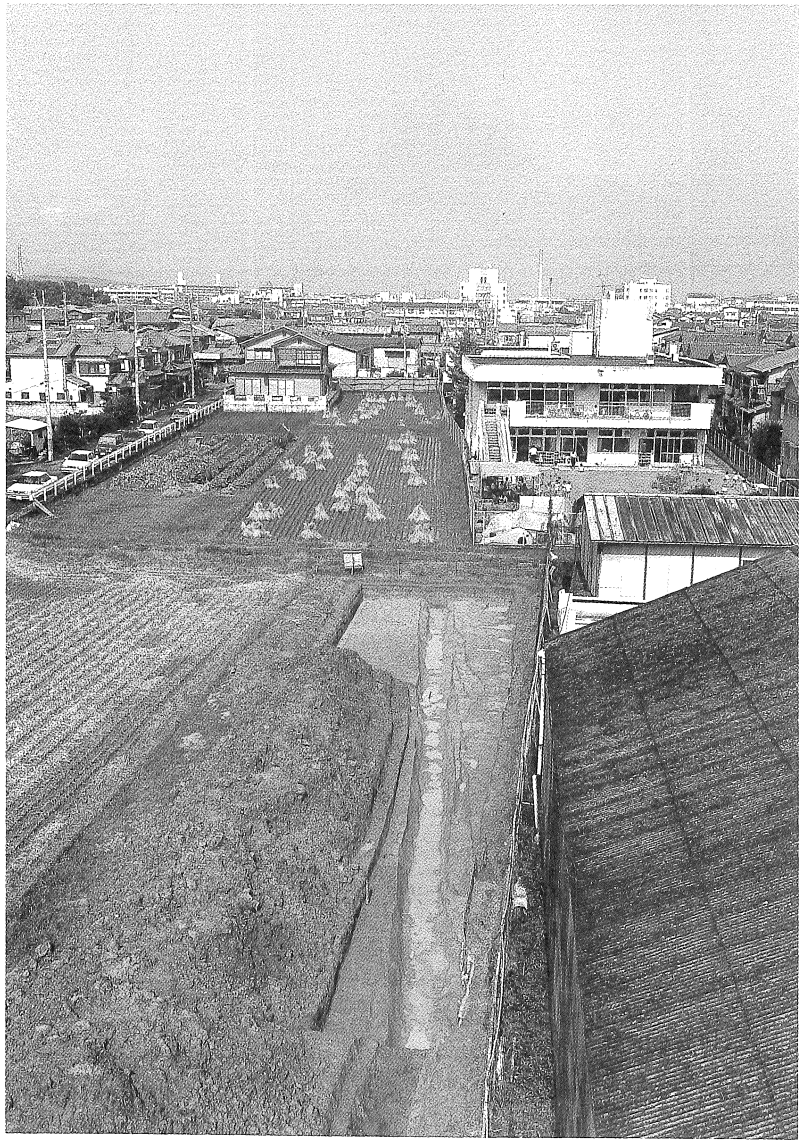
15

17

8

9

出土遺物

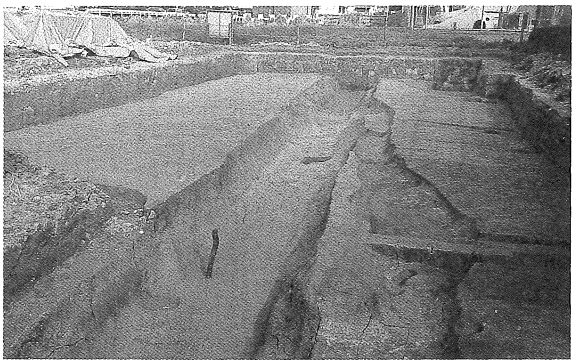


1　調査地全景（南から）

2　調査地全景（北から）

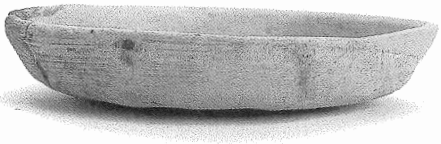
1　轍検出状況（西から）

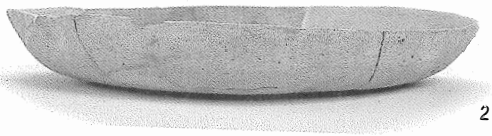
2　溝ＳＤ27503断面（南から）



3　溝ＳＤ27503杭出土状況（南東から）

4　樫の木出土状況（北東から）

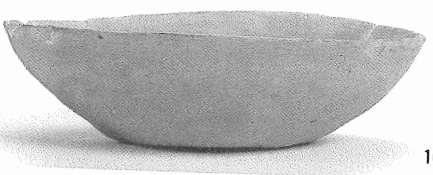

18

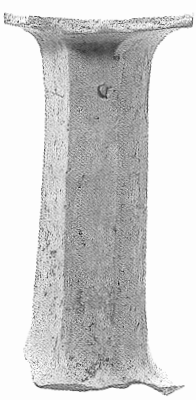

2

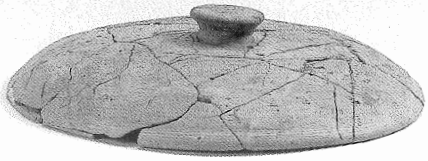
6

13

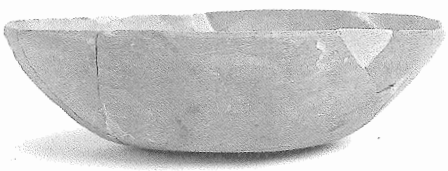
14


16


33


22

23


12

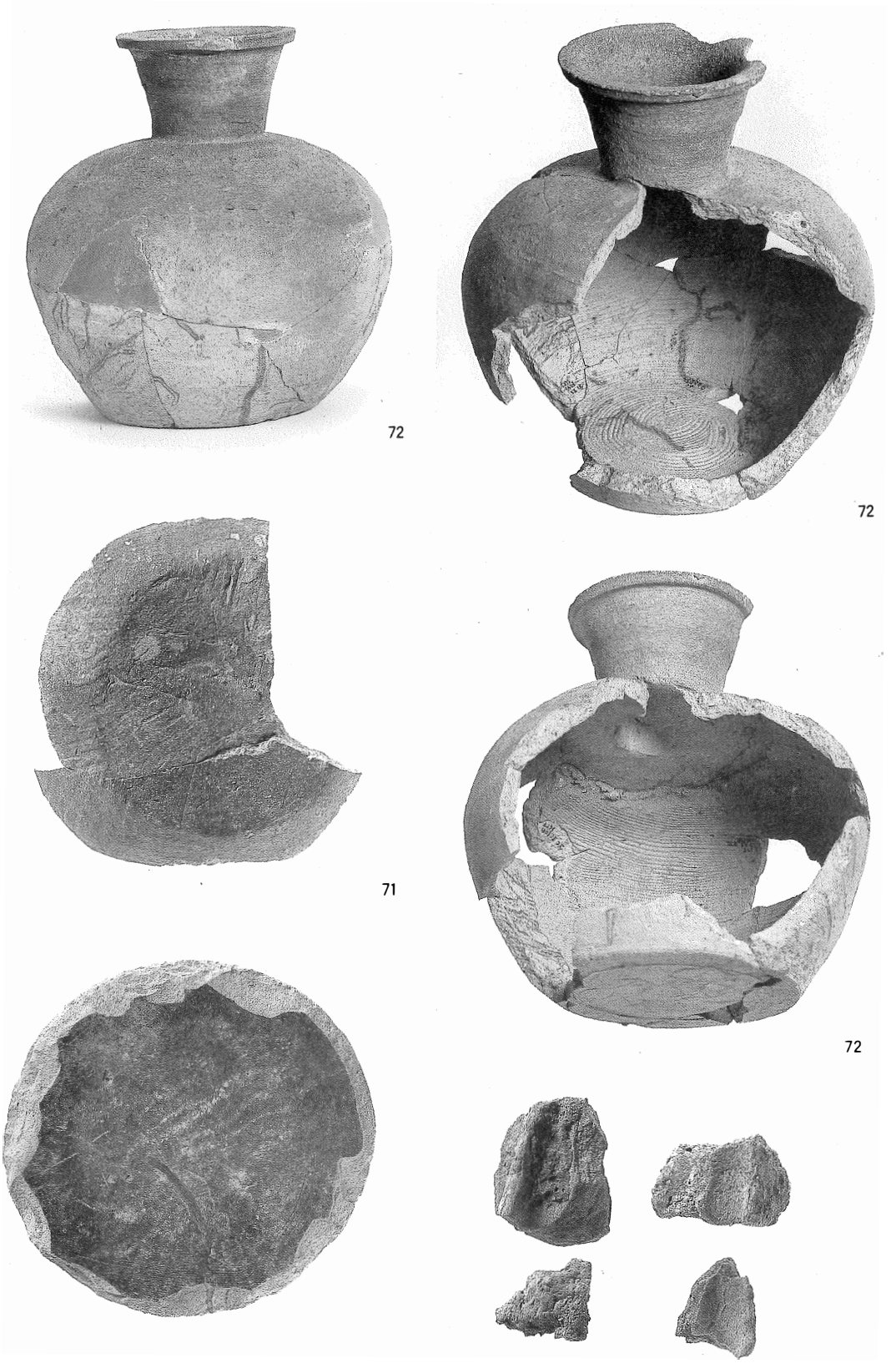
17

28

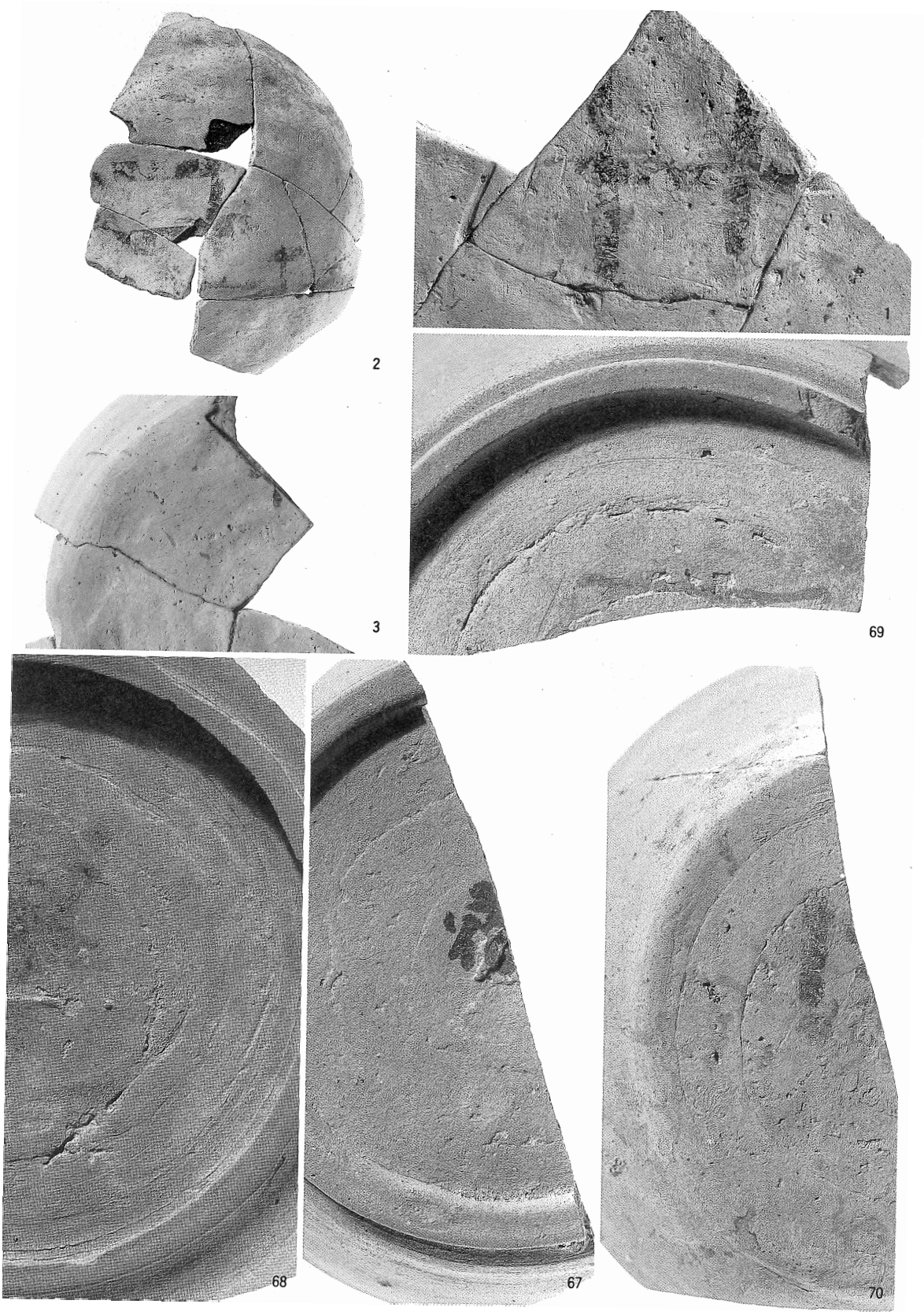
27

26

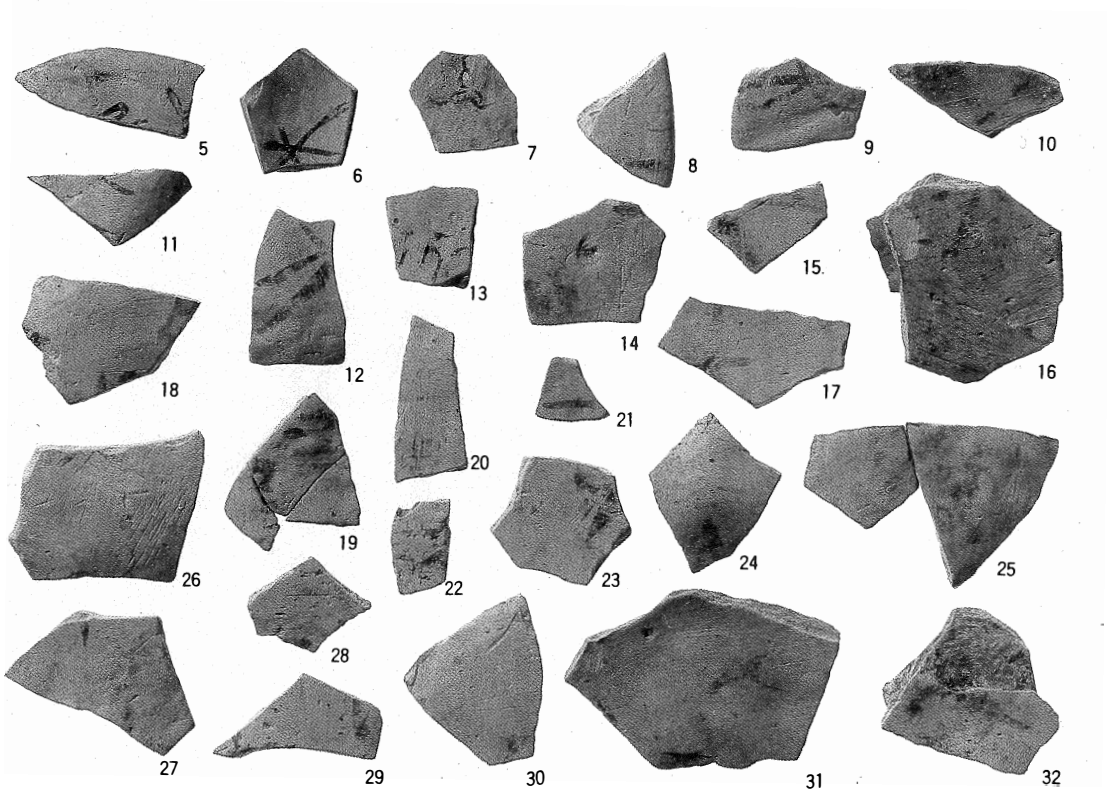
出土遺物－１



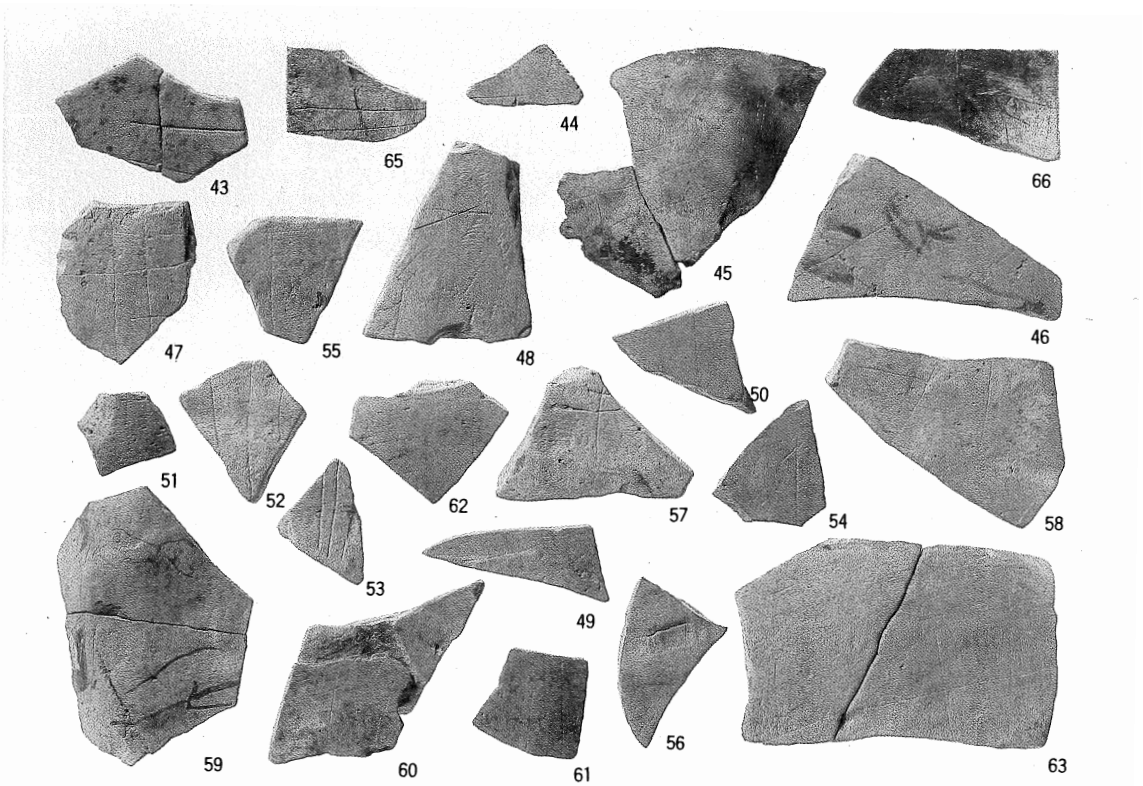
出土遺物－2



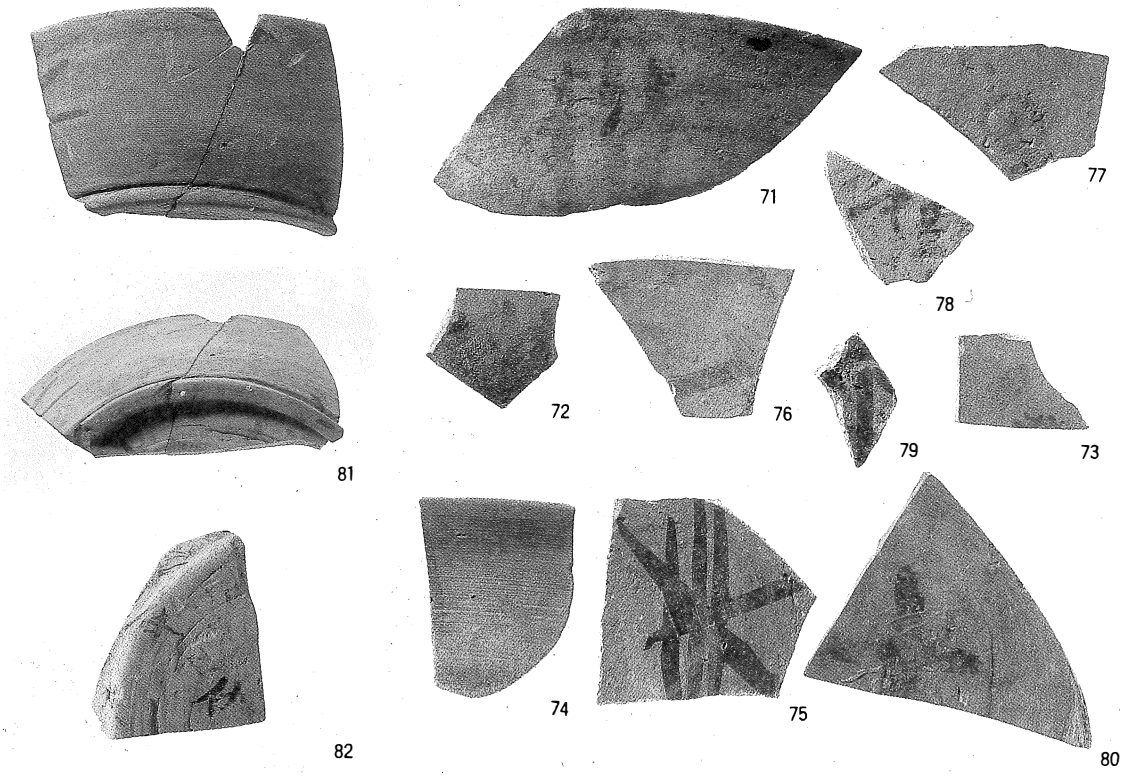
1　墨書土器　土師器１～３　須恵器67～70



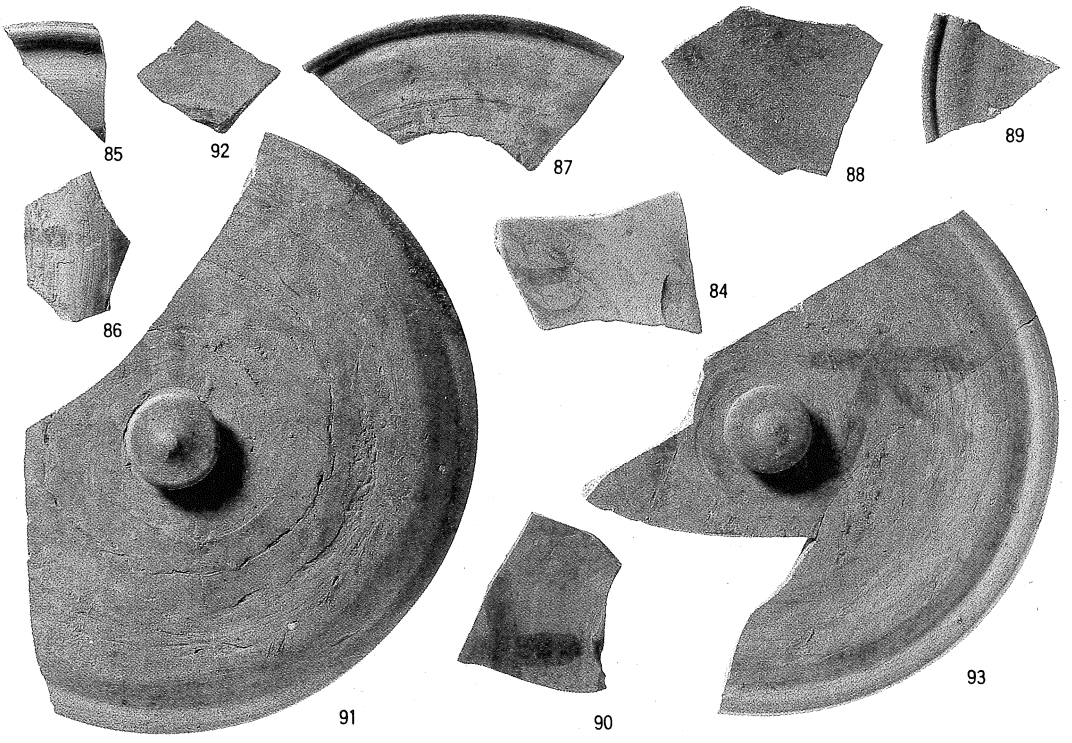
1　墨書土器　土師器５～32



2　線刻土器　土師器43～63　須恵器65・66

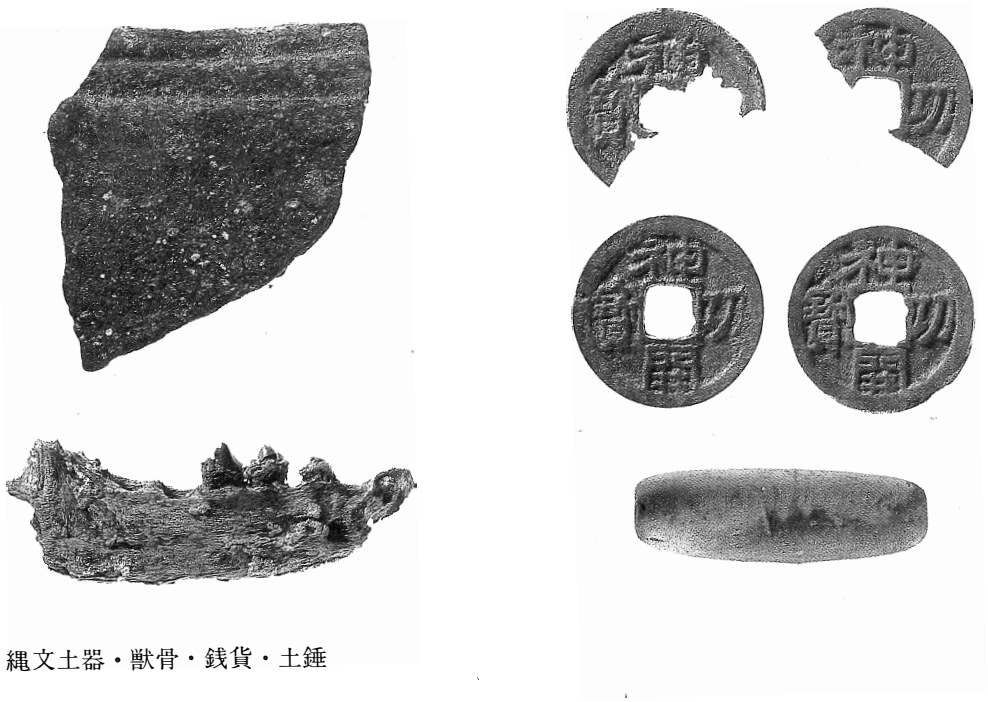


1　墨書土器　須恵器71～82

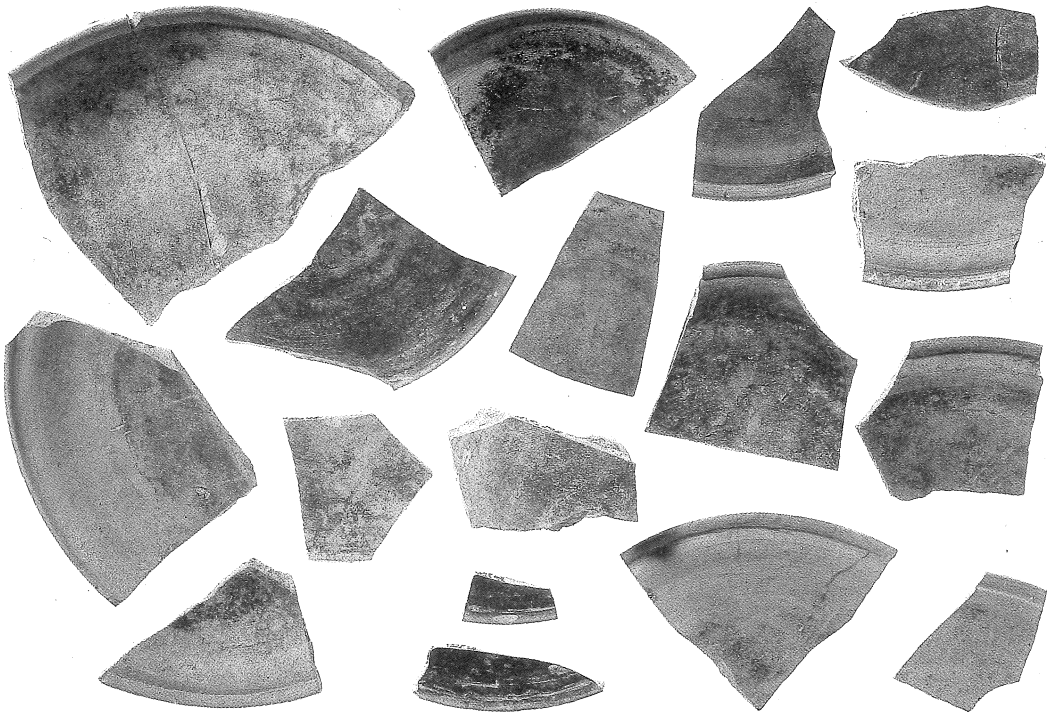


2　墨書土器　須恵器84～93

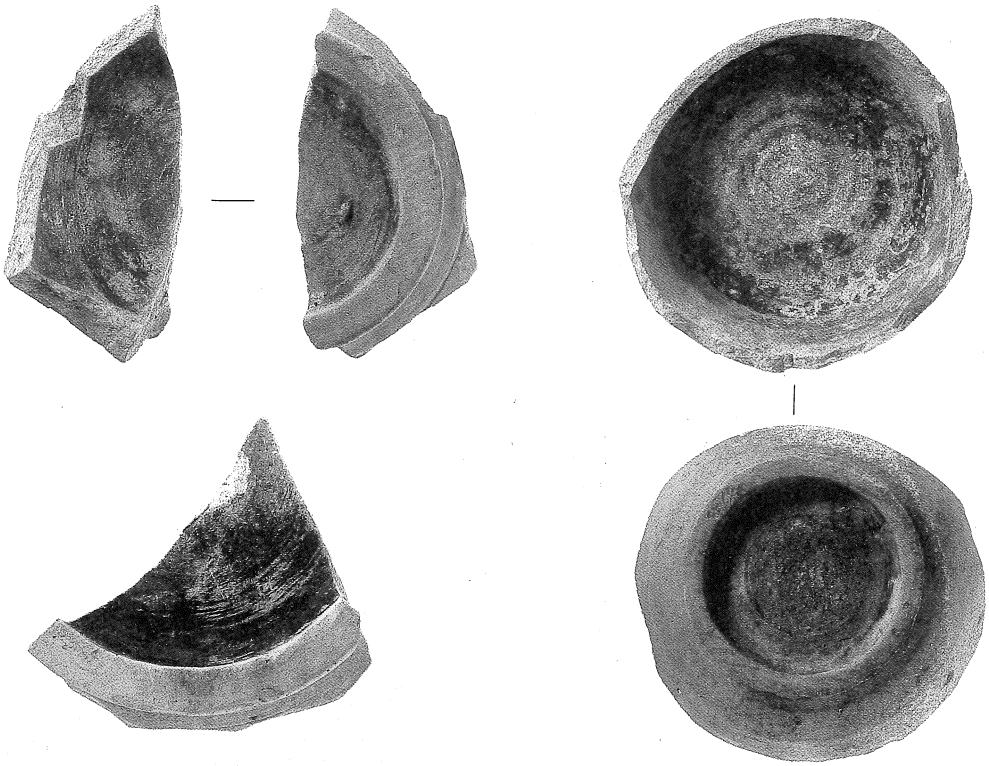
1　墨書土器と線刻土器　土師器４・35・39　須恵器83・94



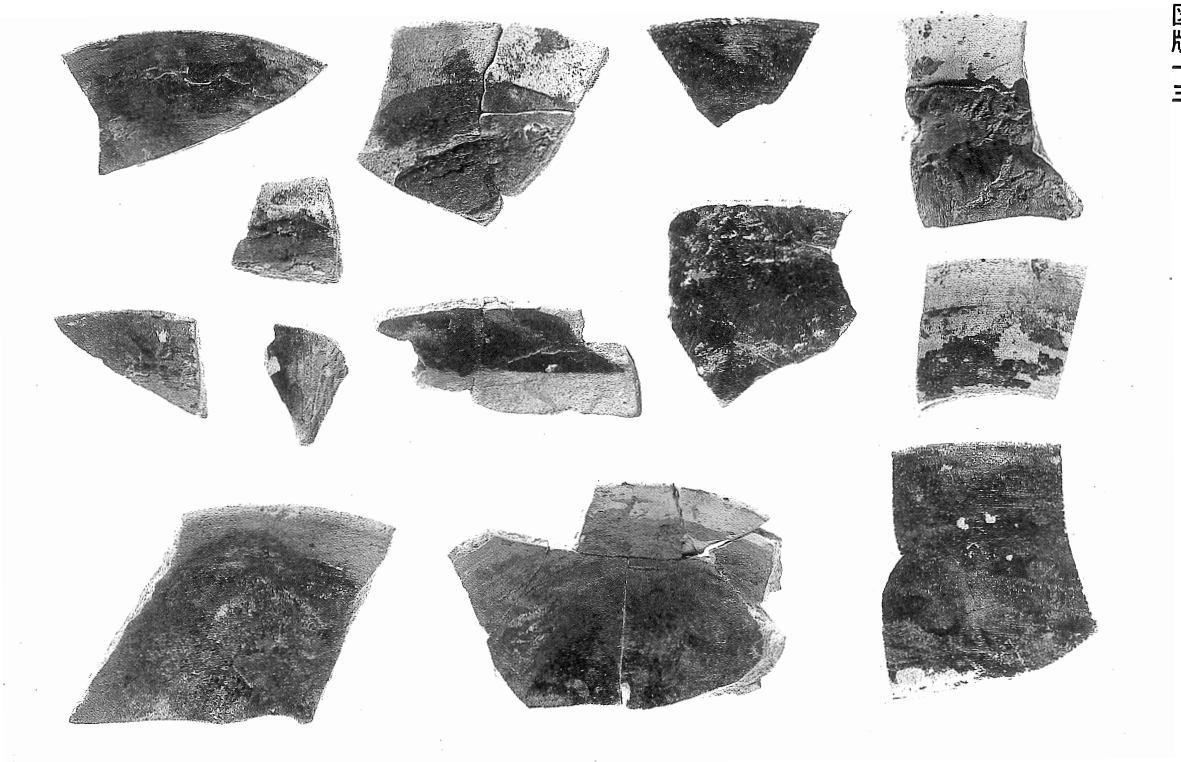
2　縄文土器・獣骨・銭貨・土錘



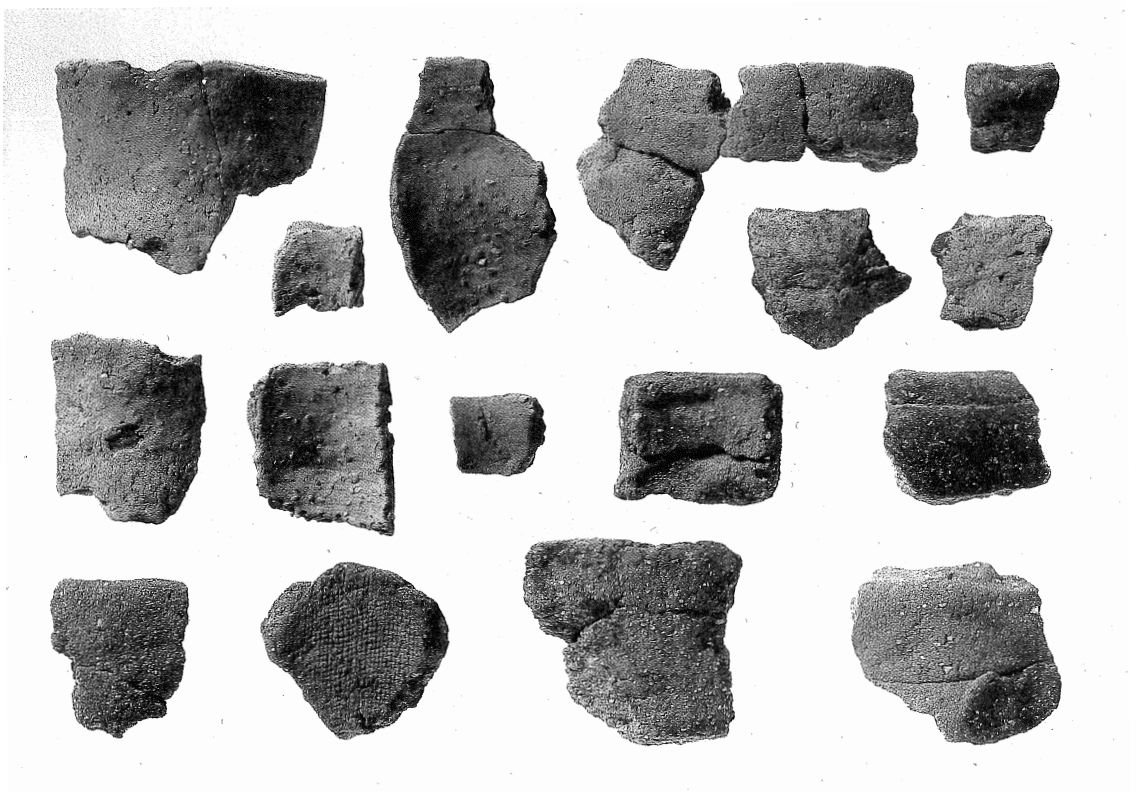
1　硯に使われた須恵器坏蓋



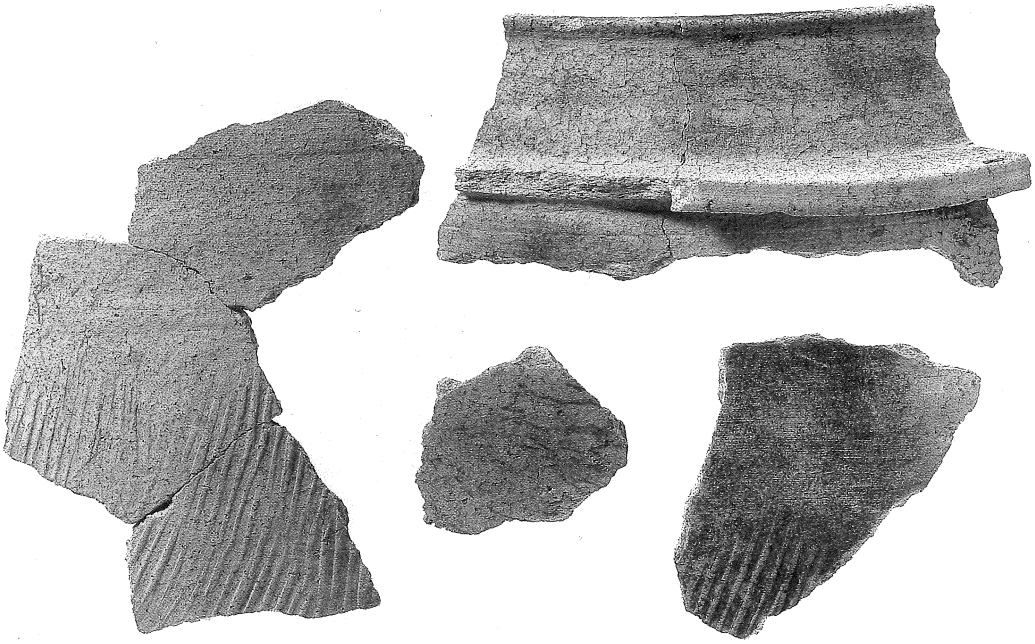
2　墨痕を残す須恵器壺



1　漆の皮膜を残す土師器と須恵器

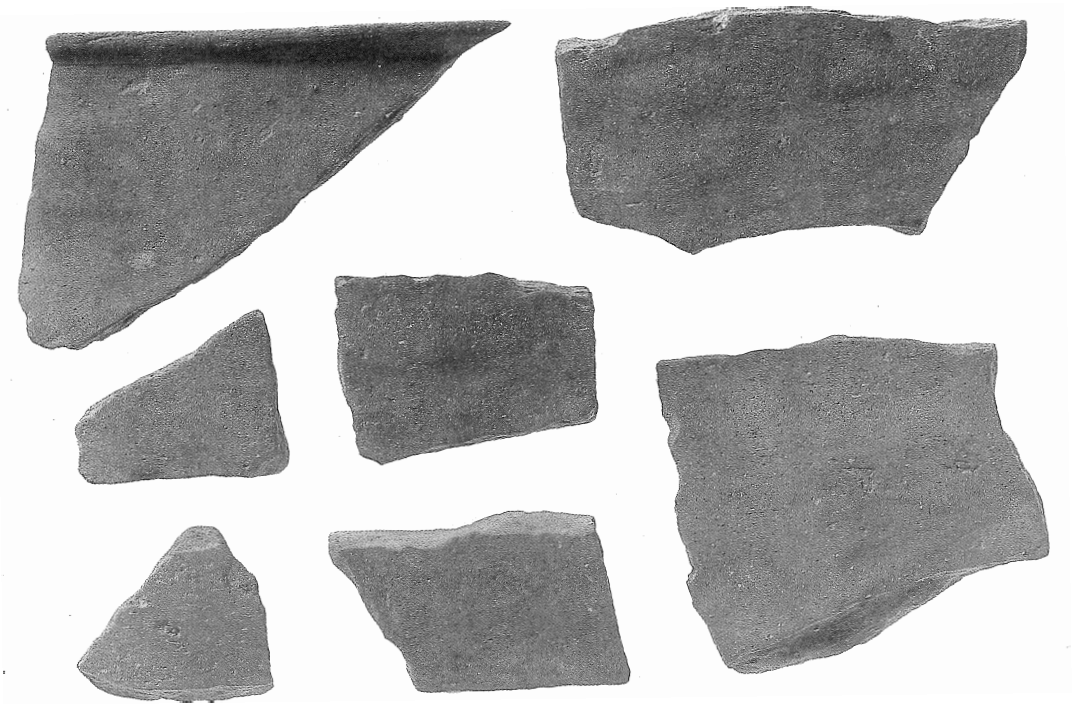


2　製塩土器

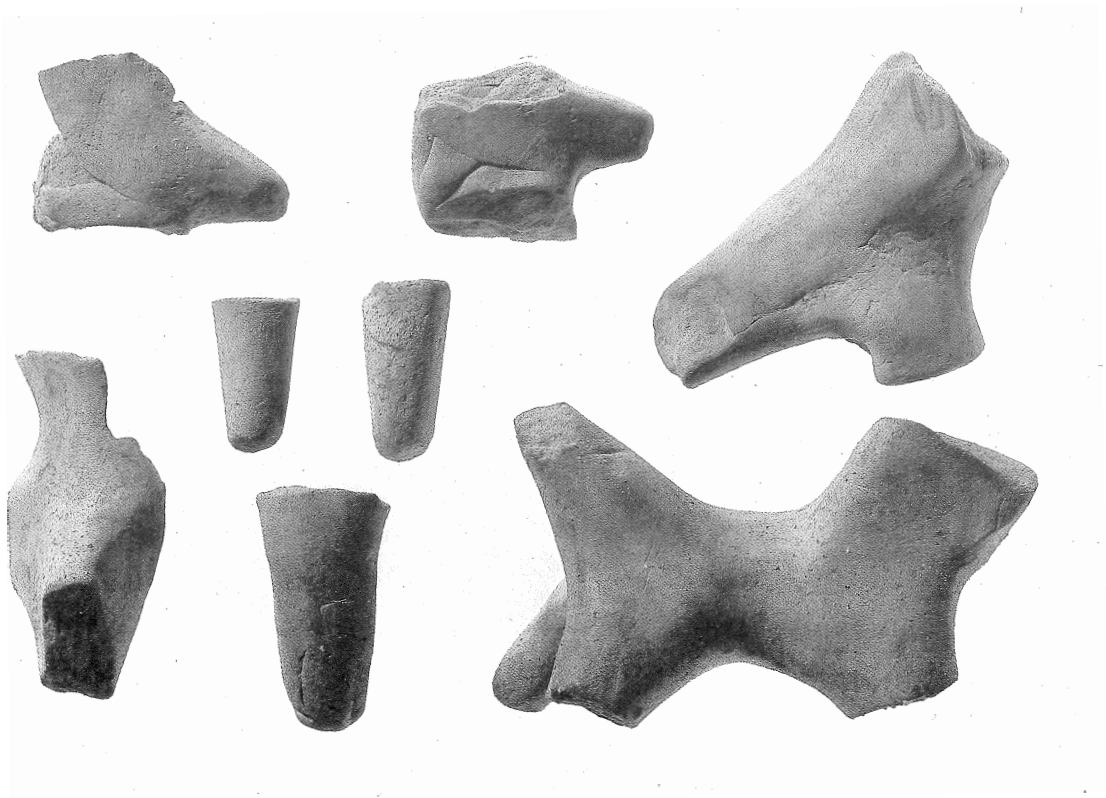


1　瓦質の羽釜

2　生駒山西麓産の羽釜と竈



1　土師器甑



2　土馬

発掘調査地全景（西から）

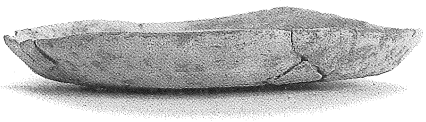
1　調査区全景（南から）

2　北拡張区全景（南から）

1　溝ＳＤ38503集石検出状況（南から）

2　土器溜りＳＸ38507遺物出土状況（南から）

1　土壙ＳＫ38519出土鉄刀



1

2

7

9

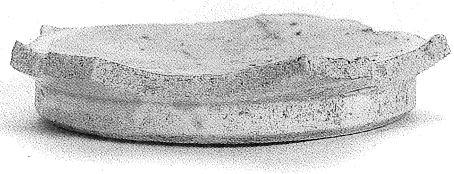
10

11

12

14

13



15

21

22

2　溝ＳＤ38503出土遺物

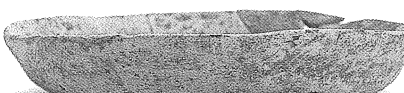
24

25

28

29

31


34

35

37

38

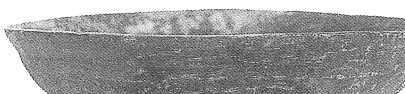
39

42

43

44

45


46

48

51

土器溜りＳＸ38507出土遺物

長岡京市文化財調査報告書　第29冊

発　行　日　平成４年３月31日
編集・発行　長岡京市教育委員会
〒617 京都府長岡京市開田一丁目１番１号
電話　075－951－2121
印　　刷　株式会社　ぎょうせい
〒614 大阪市北区天満２丁目７番17号
電話(06)352－2271（代）